

325
522

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



325-522



山

光

照

千

山光照千



大正
8.13
内交

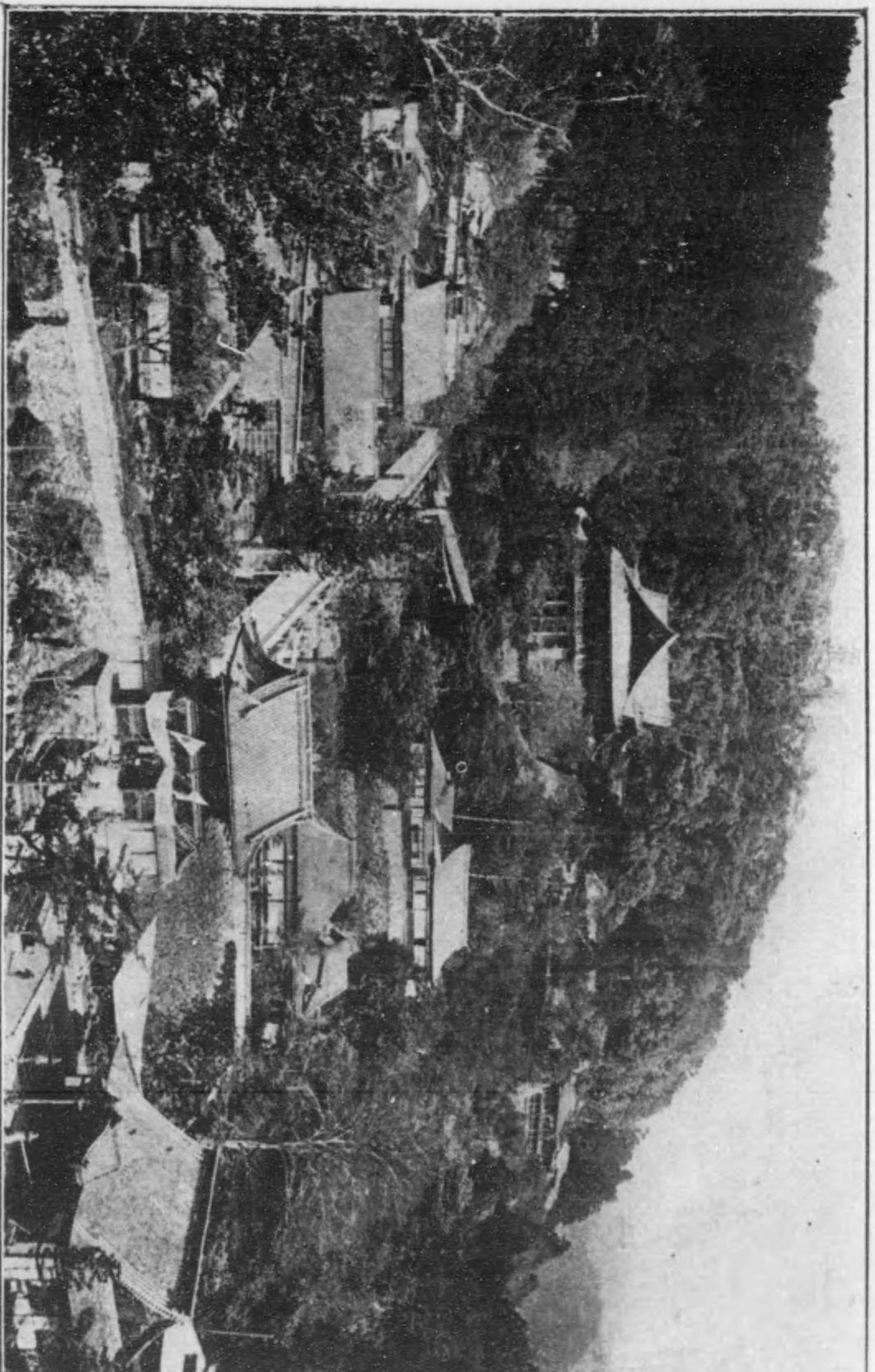
祐嚴法印は今を距る一百三十二年前、天明六年八月二日寶仙
寺内の玉泉寺に入寂せられ、此尊像は寶仙寺中の常光明眞
言堂（通稱大師堂）に安置せらるゝものなり、寶仙寺にては秋
の土砂加持は祐嚴法印入寂の日を記念せんが爲め八月二日に
修行せられ、其日には此尊像の前に御施餼鬼を修行するの例
なりと云ふ。今は一ヶ月後の九月二日に秋の土砂加持修行せ
らるゝが四隣の善男善女参拜するもの最も多し。

第一圖 著者祐嚴像



山行崎嶇數十里、經綠原吉隱、且將晴、忽遇一圓石、榜上題曰長谷之道、登則眼界頓豁、寺在前山中央、金闍寶塔、窺紫綠樹間、其下碧雲粉牆、人家且于、實爲壯觀、同人連聲呼快下阪數町、自大門入穿廊、長三丁許、南郭詩三十三天次第攀信矣、曲折而上、右傍有一老梅樹、榜曰紀實之故里梅、出後人猿啼耳、廓盡即爲大悲閣、架於崖而起、與瀟水石山同制俗呼爲舞臺、倚欄而望、櫻花爛熳、坐人白雲中矣、遙覽而出、已昏黑、長廊掛燈數丁、累々如連珠。(齋藤拙堂)

第三圖 長谷寺全景 (第二頁參照)

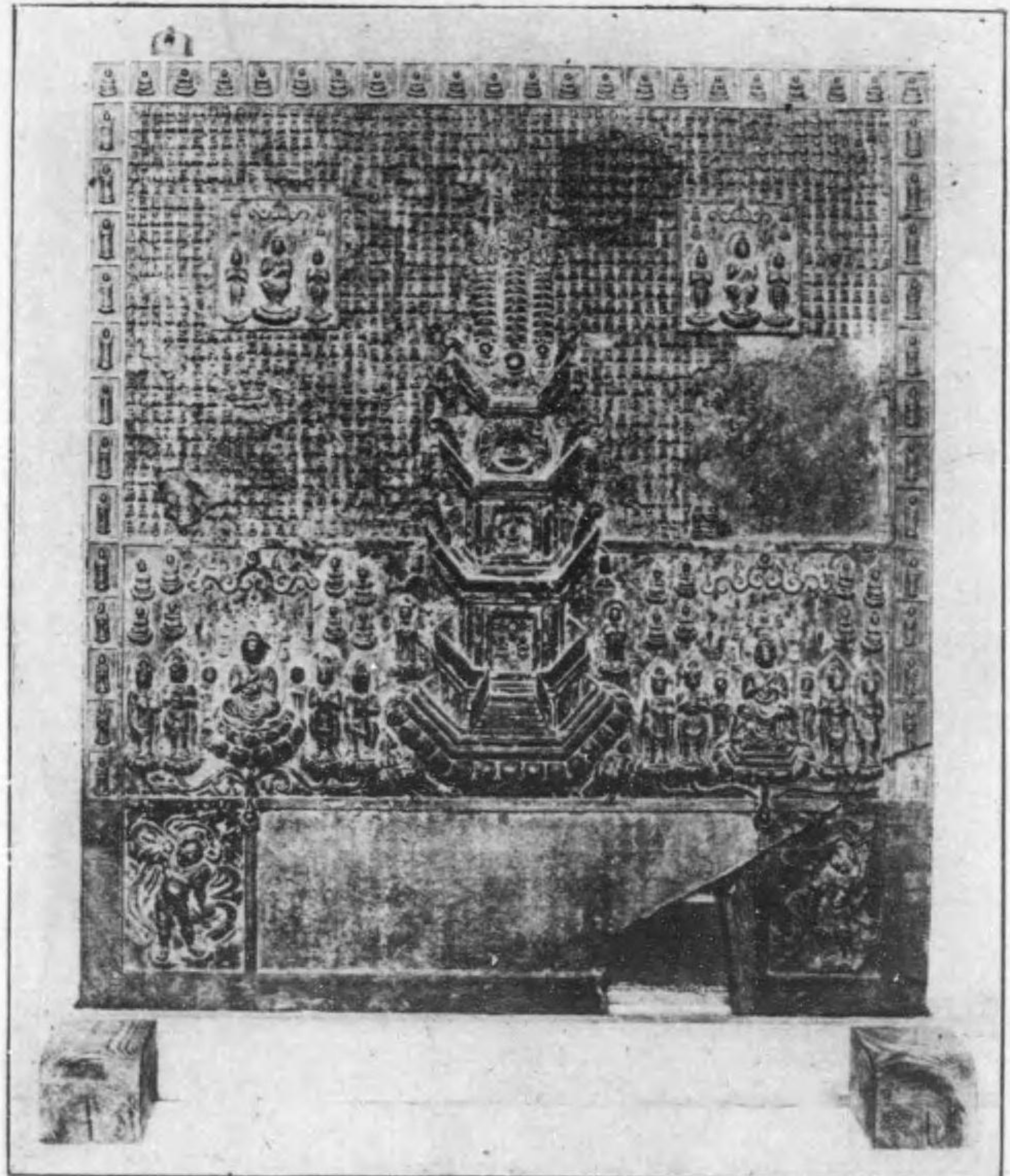


第四圖 千佛多寶塔銅盤 (第九二頁參照)

堅三尺、巾二尺六寸、厚一寸其面の中央に多寶塔を鑄出し、無數の諸佛菩薩其四傍に充滿す、其鑄造の技や極めて精巧、下段に銘文あり三百二十餘字を勒す、首八行許半缺損するも、後段及銘辭は完し、此銅盤は曩に甲種一等彫刻として國寶に編入せられ、美術上、史料上珍重措かざるに至る。

銘辭曰

遙哉上覺 至矣大仙 理歸絕妙 事通感緣 釋天真像 降茲豐山 鷲峰寶塔 涌此心泉 頁
錫來遊 調琴練行 披林晏座 寧枕熟定 乘此勝善 同歸實相 一投賢劫 但值千聖 歲次
降婁 漆菟上旬 道明率引 捌拾許人 奉爲飛鳥 清御原大 宮治天下 天皇敬造



國寶

第五圖 地藏菩薩立像 (第九四頁參照)

傳春日佛師作 木刻長六尺一寸、蓮臺六尺四寸、經一尺六寸五分、蓮臺の裏書に

長谷寺内地藏堂觀阿妙善大工太二國長妙海妙幸寄進處也蓮花座西蓮宗春

天文十五年丙午霜道阿西見、月十七日施主、敬妙阿宗見

本願覺因 春正 妙金 道善妙賢 法界六親

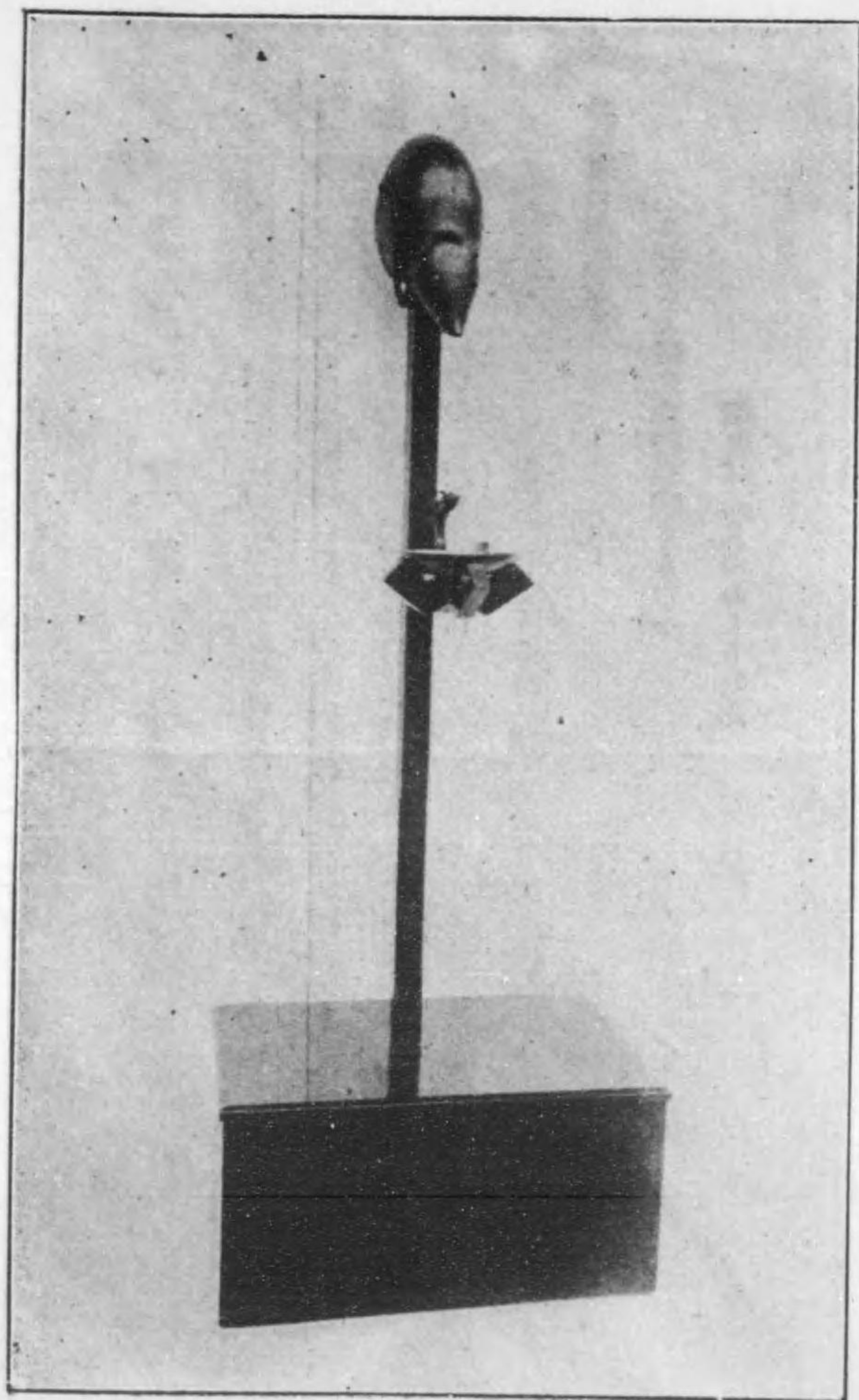
道金的大夫



國 寶

第六圖 鼠 燈 檠 (第一一八頁參照)

唐僖宗皇帝の妃馬頭婦人病氣平癒の靈驗を得たるより報謝の爲に帝より當山に寄贈せる十種の寶物の一なり、見よ！留まれる親鼠の沈靜なるに比して登る子鼠の敏活なる姿を、特長を擧ぐれば、中央なる皿に油八分の量を常に保つにあり、燃ゆると共に油量減すれば、親鼠の口より八分に滿つるまで滴り落つるなり、則ち皿より柄との間に空氣滿ち鼠に入れたる油の滴たるは空氣の壓力の關係に依るなるべし。乍併想ひ見よ科學の發達せざる當時に於て此着想と此技巧とに富めるを、柄は木にして、皿は金屬製、鼠は乾漆製のものなり、國家の珍寶として美術家歴史家の垂涎措く能はざるも宜なりと可謂。





第七圖 貫之梅 (第一二七頁参照)

藏王権現堂の傍雲井坂の上にある、出で、は朽ち朽ちては亦出で、今に絶えず、歌仙貫之が
伯父浄真に就て、幼き頃雲井坊に住して教養を受け、後朝廷に奉仕す、此寺に再び遊びける
に浄真は嘗て貫之が植え置きし梅花を手折りて示せしに、貫之よみて

人はいざ心も知らず故郷は

花ぞ昔の香にほひける (古今集)

浄真直に返歌して

花だにも同じ色香に咲くものを

植えけん人の心しらなん (貫之歌集)

第八圖 派祖專譽僧正御筆蹟

(第三六頁參照)

天正十五年派祖上人豐臣秀長の請に依り長谷寺を中興し新義

真言豐山派の法旗を樹立す。其際舊來當寺を守護し永く俗別

當を勤め來りし麻坊家は、祖を藤原房前公に發し隆賢氏の代

に寺領并に寶物等を僧正へ附屬し、實際の引繼目錄等現存し、

左の起請文と共に同家に秘藏せらる。苗裔榮えて初瀬柳原に

居住し當主男氏の代に至る。古人曰積善の家は餘慶ありと蓋

し誣言にあらざるを知る。起請文左の如し、

麻坊御身上之儀に付而少も女在申まじく候互存分候は、使三

不及以直段可申合候如何様にも御爲能様三不可存疎略候若於

偽申者觀音天神大師明神之御罰を可罷蒙者也仍記請文如件

文錄四年八月二十七日

小池坊專譽花印

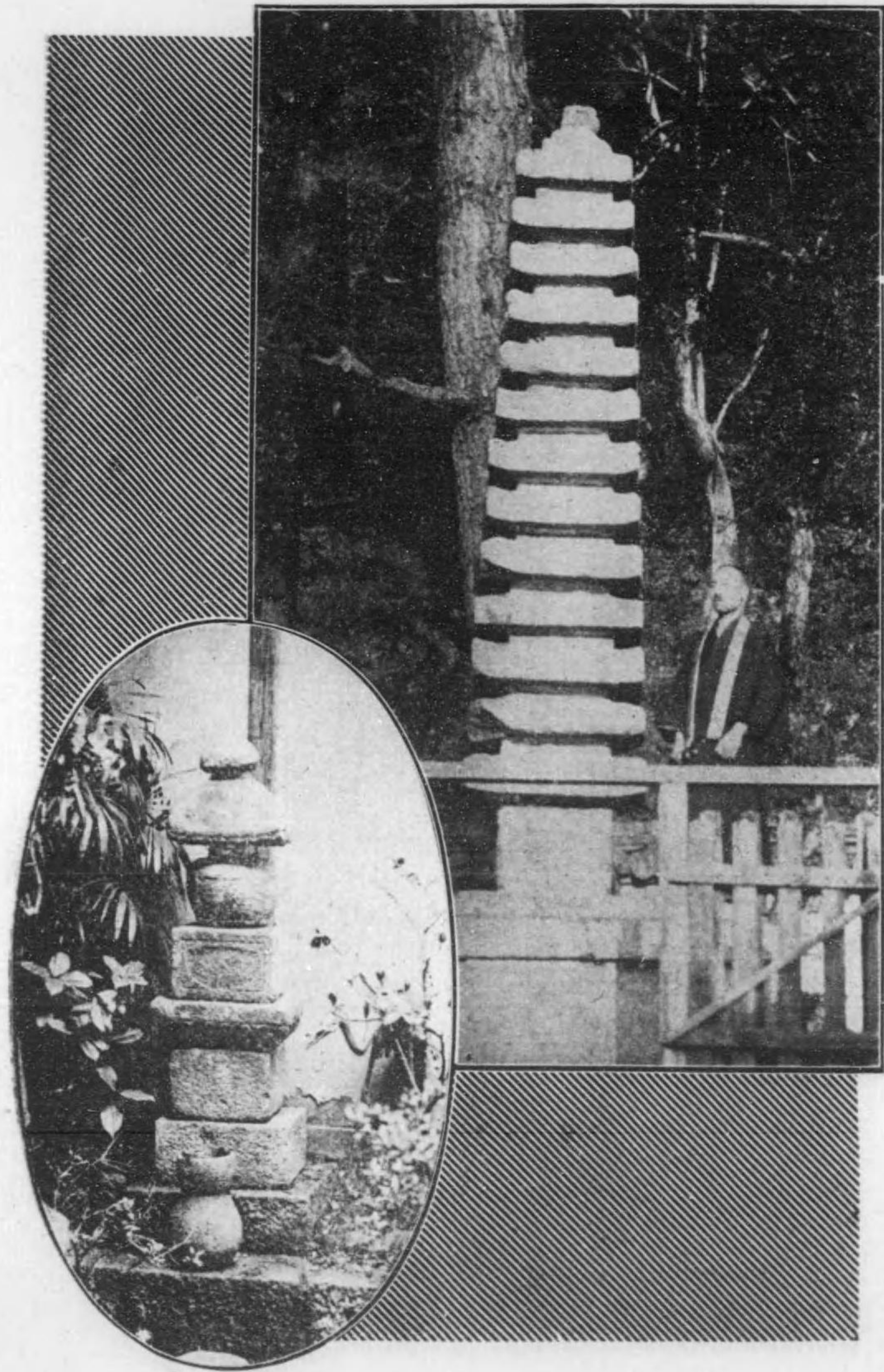
麻坊

參

見よ大悲薩埵を證として御影の裏に認めたる一通、此一片の紙

に由りても、先徳が信義の觀念の嚴重なるを窺ふに足る





第九圖

上圖 (第二三七頁參照) 德道上人廟

下圖 (第二二五頁參照) 謠曲隨筆もの等に名高き玉葛の碑にして、碑も亦今や考古學上多大の興味を以て賞玩せらる此碑奈良縣初瀬町河井氏の庭前に据えらる。

第十圖 德道上人像 (第二四二頁參照)

德道上人像は初瀬町の上端右側法起院なる御影堂の本尊として崇む、上人は豊山神樂院長谷寺の第二祖なるも、御本尊十一面薩埵の彫刻より伽藍の營構等悉く師が力與つて大なり、三千ヶ寺の末寺を有する新義真言豊山派の總本山として、百萬の信者を包擁せる西國第八番の靈場として、日に月に新なる攝化度生は行はれ。今この國家的信仰の中心を集む。信ぜよ救ひの御手は彼處にあり。法は人を侍て弘まる、初瀬の大悲を念するもの亦師が恩德に酬めて一片の報謝を吝む勿れ。



燭こりて君みそなはず牡丹かな	塚	間
牡丹さく廊下を練るや紫衣紅衣	同	人
春の夜やこもり床しき堂のすみ	芭	蕉
笈摺に卯の花寒しはつせ山	去	來
うかれける人をはつせの山櫻	芭	蕉
日のかけも降るか雲間の夏の雨	無	相
門前の茶店や花のつかみざし	塚	間
名月や下は一輪の踊りかな	同	人
灯笼踊顔見えぬこそ床しけれ	瓜	流
細腰の法師すべろに踊りけり	蕪	村

豊山玉石集序

夫れ、其の詳を欲すれば、則其の蔽や煩。其の要を欲すれば、則其の蔽や簡。煩簡其の宜きを得るは、蓋、難きなり。然れども、其の要を欲して簡に失せむよりは、寧、其の詳を欲して煩に失するに如かざるなり。我が祐嚴法印の著豊山玉石集は、卷を分つこと六、其の記する所曰く、長谷寺縁起、諸國新長谷寺。曰く、皇室の尊信、幕府の擁護。曰く、宗旨の沿革。曰く、專譽僧正畧傳。曰く、内外諸堂寺院。曰く、與喜神社。其の他、年中行事、故事、口碑、傳説に及ぼし、詳を致し、密を極め、巨細併せ得たり。今や我が密教の研究、日を逐ふて盛に、又我が豊山派

の本山にして、西國第八番の觀音靈場たる長谷寺を知らむと欲する者亦多し。此の時に方り、其の知らむと欲する所を得しむるには斯の書を措きて他に求む可からざるなり。頃、本山事務所、此に見る所ありて之を刊行し江湖に頒たむとす。若し斯の書一たび出で、廣く行はるれば、長谷寺の眞價值、天下に顯れて、其の裨益する所、蓋、尠少ならざるなり。敢て一言を記して、以て序と爲す。

大正六年七月孟蘭盆會の日

豊山派宗務長 加藤精神

序

再三改正誤字謬語不用異字難字附假名愚女頑夫以令易讀可爲本意讀者增信不讀者難發信心也事物名字古事舊事不可錯也

新義眞言宗豊山第二十四世能化

寶曆十年

信恕僧正

序

豐嶺即事雨峯

巍巍大悲閣春色滿山巔水暖

穿谿底鶯啼度埵邊幽鐘破迷夢迴廊迤

諸天淨域千年寺焚香禮大仙

大正五丙辰春

自序

今茲庚辰春三月 化主信恕僧正顧余謂曰惟夫我
大悲者之霸惠也恰如鐘谷叩則嗚呼則應布溢于本朝
延蔓于異域普熏於人心既千有餘稷王公歸崇皂白渴
仰所言不言而信者乎厥所以爲靈者具在菅神親手緣
起而昭々焉

慶僧正曾弁諸傳通記然文約而義邃世俗通曉者少徒
信耳傳口碑語誤亂眞孰不寒心哉我欲始載

後圓融帝揮宸翰書寫

神製緣起次錄諸有佛閣神社之興起及法劣祭祀之事

自序

實等以爲有信之手鏡者尙矣奈人法倥傯無遑秉筆請
子其代之余逡巡而退稽首曰雖嚴命回辭才不辨菽麥
安堪是舉時上座諸賢亦強之尋見促者數回於是乎余
不能得而遁力搜索陳簡旁諮問者舊起艸於林鐘上弦
閣筆於無射既望輯成五弓敬以呈覽自顧管窺蠡測
豈無差謬頽巧更附博雅之士爲下郢斧

於豐山月輪院

祐嚴識

凡例

一、本書は寶曆の昔豐山第二十四世信恕僧正の發願で一蒲席祐嚴法印
が執筆せられ公刊して世に長谷寺を紹介し大悲薩埵の化益を廣く
十方に知らしめんとしたことは信恕能化の序文並に信恕能化の加
筆等に由つて窺はれる然るに信恕能化は間もなく寶曆十三年には
遷化遊ばされ祐嚴法印は塔中月輪院より東京府下中野町寶仙寺に
移錫せられ好事魔多しとやらで上梓の運びには到らずして止むだ
それを月輪院の後住春祥師が豐山の書籍中へ著者の没後に寄附せ
られ永く金毛藏の篋底に祕藏せられて居つた

一、本書は卷を六大に配して地水火風空識の六卷となし外に縁起和讃
一卷を輯めて一帙とせらる併し乍らかゝる玉稿珍書をして何ぞ紙

魚の食ふに任せんやで茲に公刊し得るに到つたことは偏に鴻湖の同情に由ることゝ喜びに耐えぬ次第である

一、之を一巻に輯むるに當て本書の原文を損はざるやふ貼紙と雖も苟且にせずして編纂せしは故人の勞を損せず尙ほ着意を尊重する爲めと或は讀者に時代思潮を窺ひ歴史の參考にも資する所あらんかとの編者の婆心からである

一、早川大僧正より題字を賜はり宗務長加藤僧正より序を賜りたるをこゝに感謝し奉る

一、本書が世に公にせられるまでに至つた階程には寶仙寺の富田僧正が表紙の事から奥附に至るまで終始御指導の懇切を盡し眞摯な態度で御世話下されたるは茲に謹で深謝し置く

一、本篇章句の中文字の消えたるもの難讀の箇所は之を訂正したること

は故著者に對して衷心御詫びを申し上げて置く又寶曆より大正の今日に至る二百有餘年の星霜の間には事實は多くの變遷を生むで居るが其中大いなる事柄にだけ補ひ記して蛇足を加へたるは讀者に對して潛越なる沙汰を慚愧懺悔する次第である

一、本書は而も僅々旬餘日に成りたるものなれば校正の粗漏編輯の不備は多々あり讀者の御叱は覺悟の前であるが編者の此我儘を通された印刷者村田氏の忍耐を多しとする

一、本書の表紙圖案は畫伯柴崎恒信氏の勞を煩はしたるもの感謝の意を表す

一、表紙文字は幾分遺稿の面影を偲ばしめんと大いさもそのまゝ寫眞として表はせるもの

一、裏面の型は牛玉加持の條に在る印重の約二分の一の型を示せるもの

凡例

の閻浮陀金にて作製し道明大徳より徳道上人に傳へ千有餘年の今日に及びたるものと口碑する珍寶である

編輯者

網代智明
吉田深了

豊山玉石集目次

豊山派現管長早川大僧正猊下題字
寶仙寺現董富田僧正校閲並跋文
豊山派現宗務長加藤僧正序文
豊山第二十四世信恕僧正序文
豊山一薦席著者故祐嚴法印自序

口繪

祐嚴法印像……………
祐嚴法印筆蹟、石像、其建立の大師堂……………
長谷寺全景及漢文……………
千佛多寶塔銅盤及解説……………
地藏菩薩及解説……………

目次

鼠燈檠及解説……………

貫之の梅及解説……………

專譽僧正筆蹟及解説……………

徳道上人像及解説……………

徳道上人廟并玉葛塔及解説……………

凡例……………

地之卷……………

長谷寺縁起……………往生の間三四……………賓頭盧尊者三六……………今の観音堂三六……………專譽僧正傳三八……………

水之卷……………

藥師堂四五……………瀧藏三社權現四六……………愛染堂四八……………彌勒菩薩四八……………求聞持堂並能滿院四九……………求聞持修行最上の勝地五〇……………密宗の徒必修六〇……………諸國新長谷寺六四……………

火之卷……………

御影所七九……………籠堂七九……………水向井八〇……………大黒堂八〇……………十六丈水精塔八二……………

御供所八六……………白山權現八六……………珠寃堂八八……………不動堂九一……………一切經藏九二……………木長谷寺釋迦堂九二……………三重塔九二……………賓頭盧九三……………本願院九三……………兒大師九四……………或問九四……………奥之院九七……………興教大師堂九九……………興教大師略傳九九……………陀羅尼堂一〇五……………墓所一〇五……………蓮花院一〇八……………聖笈院一〇八……………勸學院一〇九……………

風之卷……………

鐘樓一一一……………三百餘社一一五……………馬頭夫人社一一五……………八幡大菩薩一二一……………住吉明神社一二五……………寶篋印塔一二七……………藏王堂一二七……………貫之梅一二七……………石橋一三〇……………湫鹽石一三〇……………陀羅尼壇一三〇……………三部權現等一三一……………春日明神一三三……………橋宮神一三四……………道明上人石塔一三六……………仁王門一三六……………長廊一三九……………小池坊一四二……………護摩堂一四三……………表門一四三……………稻荷社一四三……………新義真言統括之印章一四四……………諸堂行人之事一四五……………來淨來言被官之事一四八……………安養院一四九……………二本杉一五二……………長勝寺一五三……………

空之卷……………

年中行事一五九……………観音開帳一六〇……………修正會一六二……………珠寃講一六五……………東照權現法樂一六五……………與喜社月次連歌一六六……………御影供一七〇……………灌佛會一七一……………仁王會一七二……………聖靈尊師追福一七四……………高祖誕生會一七五……………蓮花會一七五……………施餓鬼一八二……………陀羅尼會一八九……………佛名會一八九……………節分會一八九……………

目次……………

識之卷 目次 一九三

與喜山一九三……………觀音山一九三……………與喜社一九四……………末社二字二一〇……………鵝形石二
 一二……………菅聖廟密奏記斷章全文二一二……………荒神堂二一三……………廿日大師二一五……………天滿宮拜
 殿二一八……………菅明院二一八……………試十一面觀音堂二一九……………隔夜堂二一九……………多羅尾
 瀧二二〇……………愛宕權現社二二一……………朱書貼紙曰二二三……………去來諸尊二二四……………鍋倉
 明神社二二五……………玉葛庵二二五……………牛頭天皇社二二九……………見廻不動尊二二二……………加
 茂大明神社二三三……………石地藏尊二三四……………十一面石像二三四……………大手水石二三五……………
 ……熊野權現社二三五……………橋詰社二三六……………大川大明神社二三六……………泊瀬石二三七……………
 ……德道上人御影堂二三七……………法起院二四一……………管神御旅所二四二……………粧坂二四二……………
 ……手力雄明神社二四二……………萬幡豐秋津明神社二四三……………大鳥居二四三……………興元寺二四六
 ……
 大日本長谷寺觀世音緣起和讃……………二四七
 附 錄……………二七九
 長谷寺世代……………

目次大尾

豐山玉石集

故豐山月輪院 祐嚴法印遺稿

地之卷

長谷寺緣起

長谷寺緣起……………往生の間……………資頭盧尊者……………專譽僧正。



寬平八年(五九一年)五月廿六日(皇)二月十日勅に依り菅蒸相の勘書せしめ給
 ふ長谷寺緣起に云く吾遣唐大使中納言從三位兼行左大辨春宮太夫式
 部大輔侍從菅原朝臣某(道真)恭しく寺官に謁して大安寺に附く因に法
 師の請によりて長谷の靈地によち入り爰に即ち勝絶たる靈場にむか
 長谷寺緣起

ひ大明をなす流起をみるに、精氣一度通じて、靈夢を得たり。十一面堂の下二百餘歩を下りて、そばだつて岡あり、雲の梯と名づく。高き事幾許ならずして、其頂より雲にかまへる。三の梯有りて、金峰山に到る。三人の藏王各山神等の諸眷屬を率ゐる。梯を踏で影向す。忽に十一面堂に入り、各五色の蓮華をもて寶前に捧ぐ。則其故を求むるに、藏王權現答て云く、此山は功德成就の地。諸佛經行の砌、これ都率天宮觀音院なり。菩薩聲聞此山に住して功德を恣にし、諸天神祇此山に座して威験をふる。専四海の安寧をおさめ、鎮に御一人の寶祚を守る。我等彼の冥誓に融じて、日に來て衆生を利益すと云。爰に彌々信仰貳心なし。仍て行基菩薩の國府記七卷並本流起文三卷、本願上人の上表狀一通を鏡とす。此中に尤金をあつめ、塊を去て縁起の文一首を勘出す。夫南閻浮提湯谷輪王所化の下、礙劔盧島水穗國泊瀨神河の浦に觀音利生の道場あり。此砌に二の名あり。一には泊瀨寺、長谷寺の本の名を得たることは、泊瀨の川上、瀧藏の社を脇

にして天人所造の毘沙門天王います。其御手の寶塔ながれて、此山の麓、神河の瀨に留る。武内宿禰卜筮して云く、斯れ天の徳を授け、地の榮を表すと云。即ち崇めて北の嶺、西北の角に納む。仍て舊の號の三神を改めて、泊瀨豊山とす。其後三百餘歳を経て、道明上人是を石室に移す。それより此山繁昌して、觀音應現す。故に里の號を取て寺號に置く。是、天武天皇(紀元一三三三年)更に道明上人に勅して、西の峰に石室の佛像並に三重の塔を建立す。二には長谷寺、長谷寺後、大悲利生の谷、長きによりて此名を得たり。是北嶺に徳道上人、聖武天皇(紀元一三八四年)の勅を承て、觀音の靈場を建立す。此人は播磨國指實郡の人、俗姓は辛谷田部の造米丸なり。是法基菩薩の應化、第三仙人の再誕、母をば寂子と申し、夢に明星天子くだりて、口の中に入ると見て、物をのむがごとくして十六ヶ月をへて、齊明天皇即位二年(紀元一三〇六年)丙辰歲九月十八日の日出に、天晴れ風じづかにして、悲母をなやますこともなく、懐の子を放すが如

くにしてうみ給ふ。

徳道上人生年十一にして考に別れ十九にして妣をはなれ給ふ才を藝て跡をあらはす。即よく五常を存し、四恩を思ふ。遂に彼の二親の菩提に廻向し、佛道を求めむがために、遙に本郷を去て異域にうつる。因縁相感じて此山に來り、慈悲の師に逢て俗姓の號を改む。干時、天武天皇即位四年二月五日、生年廿にして出家授戒す。則習學閑なく、勤行暇なし。終に佛心を得て、修驗ならびなく、精進多年なり。

上人累年の間處の相を檢知するに、上求菩提の山高く下化衆生の谷深く、四神相應の靈場一天無雙の勝地なり。さだめて知ぬ、此處は古仙修行の跡、衆妙吉祥の砌なり。我此所に精舍をひらきて、日域の衆生を利益せむと、心中に思惟して山の内を見まはすに、北嶺に金色の光を現はす。いよ／＼恠むで、日日に其處に行て、勤行精進する程に、常にこの事を見る。上人無上菩提の志堅くして、終に其師道明大徳に語て云く、佛像を作

らむがために、御衣木を求めむと思ふ。師答て云く、善哉、遠からず神河浦に靈木あり、尤吉と怪い哉。今夜一の夢を見る、異形の類數輩、彼の木を中にして座列す。其中一人の童子、蓋をもて木をおほふ。又木の本に白衣の老翁あり、其形まことに微也。我問て曰く、翁は何人ぞ、又何事に此處に住するぞ。答云く、我は是三尾大明神なり。此木を守らんがために、本國より片時も離れず、諸の眷屬を將ゐて來る。又蓋を取る童子は、即ち當山の守護の神なり。靈木の請によりて、此山に來る所の相應との奇瑞也。云云。爰に窘然として、夜をあかす程に、汝に今請問す。上人謹でうけ給ふ。上人長谷の郷の古老の者に、木の由來を尋ぬるに、答て云く、所命の木、此土に來てより、以來郡郷の人民おだやかならず、各力をあはせて、遠く他の里に送らむと思ふ。尙も語て曰く、傳へ聞く、近江國三尾前山の白蓮花が谷に大なる臥木あり、長き事十餘丈の楠也。此木より常に瑞光をはなち、異香を薫す。又諸天來下して、白蓮華を捧げて、此木に散す。其花、此木に屬し

て蓮花を生ず、その色又白色なり。かくの如くして多年を経たり。故に今に白蓮花が谷といふ。又いはく繼體天皇即位十一年(紀元一七七年)雷電風雨大に命じて、洪水あり。此木彼の谷より流れ出で、志賀郡大津の里にある事七十年、里の人いまだ木の心をしらすして、伐採ほごに、郡郷の家門門宅を焼き病を發して、よろづ不吉なりければ、その故をトふに、此木のたゞりなりと聞き、て、犯す者もなかりしと然るを大和國高市郡八木の里に住する小井門子といふ女人因縁ありて、父母ならびに夫の爲に佛像を造り奉らんとして、用命天皇即位元年(紀元一三十四年)を以て彼の木を、八木の辻に引きけるに、木の崇に依りて、小井門子死去しぬ。其後彼の里に經過ること三十餘年、郡郷の家門門又不吉多し、則葛下郡の人出雲臣大水沙彌法勢十一面像を造らんとす。推古天皇即位七年(紀元六四五年)葛下郡當麻の郷に、この木を引きけるに、願をはたさずして、法勢又命盡きぬ。其後此里に經過すると五十餘年、如斯所所にして不吉なりし故に

衆人皆恐怖する木なり。又語るらく天智天皇即位七年(紀元一三十八年)域上郡長谷郷神河浦をさして、此木を引捨さりぬ。それより後この里に止まること三十九年、彼の木をおかすもの穩かならずといふ。徳道上人このことを聞て、彌々靈奇あるべきことをしりて、里人に請ひうく、乃ち古老の刀禰ども悦びたふとんで、件の木をゆるす。其後徳道上人十五年の間、精進修行して、崇重したてまつれども、都て願をはたすべきことなし。唯冥助を仰ぐ處に、夢に東の嶺に三の燈を見、そのかたはらに怪しき人ありて、三燈は三世の利益を表すなり。彼の峰に靈木を引あげて、佛像を造るべしといふ。教へのごとく、養老四年(紀元一四四年)二月のはじめに、靈木を東の嶺に引き上げて、庵室をむすび、香花を備へ、あつく三寶の加被をたのみ、夙夜の勤めおこたらず。かさねて願をたて、彼の木を禮して云く、聖朝安穩、藤氏繁昌、乃至法界平等利益のために、十一面の像を造り

たてまつらんと欲す。大悲の弘誓我願を感せば靈木自然に佛像に成らせ給へど禮す。然るに同八年七月に房前の朝臣大和國斑田の勅使を勤められし次に、御獵のために此峰に躋る忽にして山の中に禮拜の聲を聞く。勅使怪しの思ひをなして庵の前に到り問て云く、上人何ぞ兩家を祈る。答て云く、傳へ聞く第六天の魔王我朝をおかさんとせし時天照大神法性宮に居して此事を見る。大悲の餘り春日大明神と契りて云く、汝と共に日域にあまくだりて我は國王となり、汝は臣下としてかの土の衆生を利益せむと云云。その恵にむくひて忝くも二神此土の塵にまじはり、其二神の孫として兩家此國を治む。佛法の興廢は兩家により又兩家の運否は佛法によるべし。此兩家と佛法と繁昌せば廣く衆生を利しなん、我此願を遂て國土の群機に應せんと思ふ。如斯具さに佛像を造らんことを望むものなり。勅使聞きて云く、おのづから慶賀のごとあらば必ず助長のために朝廷に奏聞して官物を申し下げ、精誠を融じて懸

念をはこばんと約し、祈念に酬て房前朝臣不幾して勅賞を承はり、榮名を辱くす。いよ／＼上人の徳に歸して解狀をすむ、即ち神龜元年(聖武紀元一三八四年)正月一日解狀を奉つる。同年二月廿二日勅し、其年の三月二日に宣下せられ、同月十八日に香稻三千束を下り、同六年四月八日辰時吉日良辰を撰び定めて御衣木を加持す、其役は道慈律師なり。同日はじめて時をうつさず三ケ日の間に佛像を造り奉る、高さ二丈六尺、其巧みは稽文會並に稽主動なり。佛像を造りそめて第二日に當り樵夫吉窮津丸山に入て薪をとらんとするに佛處にむかひて遙に稽文會を見れば、六臂の地藏手ごとに佛像をけすり刻む、又稽主動を見れば、不空羅索觀音六臂にして或は鑿をとり、或は刀を取て佛に向ふ、これを見て奇特の思ひをなし上人の所に行てこの事をかたる。すなはち遙かに見れば云ふが如し、共に佛所に行きて見れば常の人なり。堂舎の構高下嶮難なれば、いかゞせんか。常に思ひ歎きて勤行精進

長谷寺縁起

する程に、夢中に金神現じて北嶺をさし示して上人憂ふること勿れ、峰の地中を勘ふるに金剛寶盤石あり、其面に金容座す、上は地際に等しく、下は輪際をきはむ、其體に三の枝あり、枝の頂ごとに大悲の菩薩座して法を説く、これの一なり、かれをもて金剛寶獅子座とすべし、我等八部衆各諸眷屬をひきゐて、往昔より此山を擁護して天の如く普く卒土を守り、地の如く厚く群生を顧る、此山興する時は形として威をふるひ、この山衰ふる時は幽として福をなすと告げ給へり
夢さむる時、天風嶺を吹き龍王掣電し、大雨時に降て山くづれ石破る、音をなす、心肝安からずして、窓のひまより電の光を見れば、天龍八部ならびに八大童子等岩をくだき地を堀る、夜明きて現に北嶺を見れば、平かなること掌のごとし、中に金剛寶座あり、縦横正等にして方八尺なり、その面掌のごとし、綾の文並に菩薩の行足の穴あり、新像の御足と比較するに敢てたがふことなし、爰に上人よろこびて龍尾寸を出せば、其

大小を知る、瑞木既に奇特なり、兼て知ぬ此山の餘山に秀甲なることを、當初に誓ふて國家に奉じ、寮菜に恵み佛法を興し、衆生を利せむとす、此願もし成就せば早く當山にして大伽藍を興隆せんと、既に願をなす、後代の利益も定めて虚からじ、爰に大會をまふけて、開眼し奉らむとす、聖武天皇の勅に依りて大般若經を一部うつして、前皇后帝の萬德莊嚴聖化無盡を祈り奉るべしと云々。

天平五年(四代聖武天皇)五月十八日に房前朝臣勅をうけ給つて長谷寺につきたまふ、同月二十日法味をさげ音楽をさげのへて開眼し奉る。

導師は行基上人、呪願は義暹大德、請僧百口なり、時に觀音の頂上より五色の雲そびえ虚空に満てり、又造花を散するに天花まじはり下て、ともに西方の空にさきのぼりてくだらす、又供養の夜、本尊の眉間より光をはなつこと一夜の間、山内皆金色なり、かくの如きことを見て衆會の

者歸敬せずといふことなし。

其夜上人の前に白衣の金剛童子八人幻に出現して上人に語て云く、我等八輩は寶盤石守護の密迹神なり、その名をば一岱石精護石、青形施願隨念密跡施無畏等といふ、則ち誓ていはく、この本尊に歸依をいたし、渴仰して冥加を祈る者をして、福慶をたもたしめ、菩提を求むるものをして法理を究めしむ、又一たび此山に入るものをば生々に加護して終に淨刹に送り、長くこの山に住せむ者をばたとひ行ゆるくとも我添ふて勇を生せしむ、又一切の道俗男女魔靈に擾亂せられて、遠近より群集し、除瘴を蒙らんがために籠りて祈るものには、避除して忽ちに平安を得せしめむ、若くは官位榮爵福徳壽命を求め、男を求め女をもとめ、乃至一切善惡の事、菩薩の慈悲にいのり、願をなさんものには、其求むる所に從つて満足の使者と爲りて佛法を守り、衆生を利益せむ、又上人重ねて誓つていはく、我若功德成就して自在の力を得ば神通力を以ての故

に鎮へに國家を守り四海を保護せむ、又衆生有て我寺に歩をはこび掌を合せ一草一葉をもて、菩提に結縁せんもの、縱令極重惡業を造て惡道に墮つることも、我がの苦みにかはつて其人をして西方の淨刹に往生せしめむと誓願かくの如し、同く二十一日大般若經供養あり、其儀式觀音開眼に同じ、但呪願は神叡律師題名僧六十口なり、その夜皇帝の御夢に東南の方より光をさして殿中に入ると御覽じ給ひて御歡喜極りなし。

爰に行基上人信心稍驟き歸居の心を虚くし、終に百ヶ日の參籠を始む、第七十六日にあたる申の刻(午後四時)に觀音の右脇に忽然として金色の童子化現せり、手に金剛の獨鈷を持ち、顔貌絶妙にして面は少しく忿怒なり、漸く歩み來つて上人の前に居す、頗る恠みの思をなして問ふて云く、汝何事に來るぞ、答て云く、我は是當山守護の八大童子、最末の金剛使者童子なり、我上人に謁し奉らんがために來るなりといふ、あやし

みて重ねて問ふ、何の意趣ぞ。答て云く、上人知れりや、當山は是れ三世諸佛轉法輪の地、菩薩聖衆利生の砌なり。一岱の峰高く聳えて、兩部の諸尊星の如くにつらなり、長谷の谿深くおびて、大悲の利益月のごとく耀く、其中に今あらはるゝ所の金剛寶座に三枝あり、上は地際に分ち、下は金輪に屬す。一枝は西土にさして中梵の佛成覺の寶石なり。一枝は清山にあり、補陀落山の觀音所座の石なり。一枝は此山にあり、靈木にちなんで金神示現するなり。此寶石に副ふて左の脇に龍穴あり、無熱池に通ず。八大龍王並に小龍等番を守り來て、大聖の左にありて、近くは寶座山内を守り、遠くは王法國土を治む。凡そ天龍八部各八輩を上首として、無量の眷屬寶座をかこんで守護す。又八大童子觀音に侍從して、菩薩應化の使者となる。又寶座を東西に相去ること、各三百餘歩にして、二の仙宮あり、數輩の仙人恒に大乘經を讀誦して、諸の衆生に廻向す。東北の隅仙宮に隣次して、平然たる地あり、日域の大小諸神寶石を守護する處なり。後ろ

の山の地中に堀入て十六丈の水晶の寶塔あり、七寶をもつて莊嚴せり、其空輪は即ち山の頂に等しくして、過去の千佛現在四佛の舍利を此中に納む。又未來諸佛の舍利もこの中に納むべし、これ閻浮提の福田なり。此寶塔並に寶石を中にして四方の角に四天王座を守護す。東の山の腰河を隔て、鵝形石あり、天照太神影向の石なり。その南に沓形の石あり、春日大明神影向の石なり。是等の神石の北の谷に又仙宮あり。凡そ不動は魔を降伏して瀧のもとに立ち、天人は佛を讚して山の頭に居す。一山の中所として聖衆修行の地にあらずといふことなし。此山は即ち秘密莊嚴の土群仙窟宅の地なり。一瞻一禮の輩はながく三惡趣を離れ、二世の願を成するなりと云々。

爰に行基菩薩このことを檢んといふ、即ち行基を將ゐて龍穴より始めて山内をめぐりて、悉く順禮せしむ。後の山にいたりて童子の持つ所の獨鈷を持て山頂を堀て拾六丈の水精の塔の空輪並に諸佛の舍利を拜

せしむ。

重ていはく此山の祕密莊嚴せるを見むと思ふ童子答て曰く是肉眼の及ぶ所にあらずたゞ上人兩部の三摩地に入るべしといふ即ち詞に隨てその三昧に入る山内みな密嚴の土にして兩部の諸尊彌輪せるを拜見し奉る良久くして上人共に寶前に歸り童子の前に立ち觀音の後ろに行てすなはち見えす百日既に満ちて行基菩薩本寺に歸り給ひ一々此事を朝廷に奏し重て佛殿を造らんが爲に白綾一萬反を申し下す又徳道上人上下の諸人を勸進して造營をはじめ天平七年五月十六日に上棟なり天載を蒙りて御倉司等繕の綱のために線絲三千五百兩施入す。

堂舎の構へ悉く成て同十九年九月二十八日に供養し奉る請僧百口導師は菩提聖人呪願は行基菩薩なり瑞應一にあらず異香會場に薰じ紫雲虚空に沸き天人影向して音楽を奏し天華を散す衆會みな之を見

て奇特の思ひをなすそれより以來上御一人より下萬民にいたるまで、漢家本朝ことごとく歸敬し奉れり。

こゝに聖武天皇御位をすべらせ給ひて後天平勝寶四年十一月十六日に臨幸即ち御自筆の最勝王經一部并に法華經一部を大聖の寶前におさむ同月十八日に供養し奉り數回の舞樂を奏し千口の請僧を囑す導師は隆尊律師なり。

同十九日の夜 天皇御夢想のこゝとあり勅によりて同十二月廿日始て寶帳を掛け奉る則この伽藍におきては永代に及ぶまで聖朝安穩寶祚延長國土太平萬民快樂を祈り奉るべきよし賢璟僧都勅を奉て是を門徒に傳ふ即ち勅約の金札を以て御寶前に納め奉る。

今此伽藍開發の一途は常の儀にあらず道場をいへば諸佛轉法輪の地祕密莊嚴の土三際の壞劫にも動くべからず四魔靈鬼も威をうしなふ砌なり大檀主聖武天皇は聖觀自在尊の化現本願徳道上人は法起菩

薩の垂跡、開眼の導師行基上人は文殊の應現、供養の導師は天竺菩提流師普賢之再誕也。

右は天満天神御直毫の縁起を人王第一百代 後圓融院(人皇一百三代「北朝」) 宸翰を振て假名に寫させ玉ふ御本を敬て寫し奉るものなり。

菅神御親毫の縁起今に傳て小池坊の寶藏に有り。此親毫の縁起慶長年中(人皇一百七代) 伽藍再營を 上皇より東君へ詔し玉へし頃 上

覽に備へんとて、江戸へ持下りける時、一夕旅宿の邊りに火災ありて叱責する間に紛失して見へず、歎き惜むこと久し。然るに旅亭の主その至

實なるを聞きて、其の騒ぎの間に盗みとりて是を賣却し、羽州秋田城主佐竹氏の許に納る。貞享三丙寅春、秋田少將佐竹義隆公、隆光僧正に語て

曰く、聖廟宸翰の豊山の縁起久しく我家に有り。幕下公綱吉の除厄を祈らむが爲に是を豊山に寄附せんと。光僧正喜びて即臺聽に達し、同五月此菅神親毫の縁起豊山に還り納り、同年霜月高辻大納言菅原豊長公はこ

れを 宸宮に奏し 天覽に備へ玉へり。あゝ神製神毫の縁起再び豊山萬歳の寶となり、山色光りを増し、溪聲喜びを奏す。あに天満宮加護の致すところか。

後圓融帝宸翰の繪縁起三卷元祿八乙亥年三月卓立僧正桂昌院殿一位尼公に見へ玉ふ時、尼公の直に恩賜し玉へるなり。

繪は土佐某の毫と、なん古錦の表装黄金の巻軸、朱紐紅巾十襲して數重の箱に入れ、寶庫の内に秘藏す。是亦鎮に寺の洪寶なり。即今所寫の

烏丸大納言光廣郷寫本 字 眞 二卷 遊行他阿上人直毫 字 眞 一卷 中坊美作守時祐寄附之、

其外名毫の寫し數本有り。 謹で當山の縁起菅神自ら製し玉ふ由來を按ずるに、古記に曰く寛平

二年三月 宇多天皇桃花の宴にて徳政の計を菅相亟に御尋ありける時、菅相府謹で佛法を崇め神明を敬ひ、聖跡を興し、賞罰を正す可とい

長谷寺縁起

ふ。右四ヶ條を勘奏しけるに聖跡とは何處ぞと重て勅問有りしかば、菅公鎮護國家の靈場十八ヶ處を奏し玉ふ。就中當寺は開天以來の勝地神明發願の精舎濫觴世に超え、利生無雙なる旨を奏し申されければ、同年七月廿七日勅を下して當寺建立の次第を御尋ねあり、依て同八年貳月十日當寺俗別當三綱等菅相府に屬請す。相府請に隨て當寺に入り、靈夢を感じ玉ひて信心二心なく數本の古記を閲し、緣起秘記の二卷を毫録して叡覽に供へ玉へり。緣起は密奏記にて神明内證するもの、是は顯は記すべからざる故に、別に記して奉れり。緣起の中、密奏記今に傳ての權跡、其具なる記別あり、さいへる、是をさすなり。此密奏記今に傳ての權跡、其具なり。菅神の小序に所言の行基菩薩國府記七卷といふは、菩薩金剛使者童子と共に山内を巡禮し玉ふ時、童子の教を受けて毫記し玉ふものなり。今は絶てなし、惜ひかな。

觀音堂 東四十四間半 南北十五間 舞臺 四間

春日本尊天照

壇面

本尊御長	二丈六尺七寸
御面相	四尺六寸
後光暨	三丈九尺八寸
錫杖	二丈一尺七寸
持花瓶合	一丈三尺
寶石蓋	四方八尺九寸
頂上佛面	長二尺六寸
最上佛面	長二尺六寸
	高一尺

佛工稽文會は地藏の垂跡、稽首勳は觀音の化身なること緣起に見えたり。

長谷寺緣起

観音寶龕の扉には十二天を畫く、これ即ち梵釋日月等の諸天日夜寶座を圍んで、大聖に侍衛すといふことを表現す。

本尊兩脇侍のあはひに三十三身の木像を次第に安ずるは、是又本尊應度の衆生に隨て此等の身を現じ玉ふは大悲弘誓を表し奉る。

又本尊左には八大龍王各眷屬を率ゐて日夜侍衛して寶座並に山内を守護し、右に八大童子諸の眷屬と共に日夜大悲度生の使者となつて衆生を救濟し玉ふとぞ。

堂内左脇を護摩所とす、十一面を本尊とし、兩部の曼荼羅を左右に懸け、毎日晨朝護摩を修す、右の脇に代々將軍の御位牌を安ず、其次に一丈餘の座像尊を安ず、此尊昔南都肘塚の精舎にあり、一夜住僧の夢中に告げ玉はく、我を早く豊山に送れ、常に觀音の側に在て大悲者の化益を助けんと思ふと夢覺めて後了々として明かなりければ、疑ふべくもなく即日當山へ護送し今の處に安置しけり、年を経て後尊像頽敗しけれ

ば堂内西北の隅に移し置けり、小池坊第六世良譽法印洛東の智積に住せられし頃夢に手足支離なる大法師告て曰く、我は豊山觀音の側に居る者なり、汝近き中に豊山の主となるべし、必我を修補せよ、我又汝の法化を助けんと玉ふと見て覺めぬ、心中に深く怪みて人にも語らずおはせしが、承應癸巳春圖らざるに尊慶僧正の譲りを受け當山の席を董じ玉ひければ、前の夢を思ふて大悲閣の内を尋ね玉ふに、果して此尊破壊して有り、扱ては此尊にて在せしとぞ、厚き修補を加へ、爰に安置し給ふとぞ。

觀音寶龕の後に阿彌陀如來の三尊及び廿五聖來迎の形を彩畫し奉る、參詣の善人後戸の格子の間より拜し得らる。

或問曰、往昔聖武天皇東大寺大像御造營の時、皇大神の御本地を崇め奉らんとて、行基菩薩並に諸兄公を勅使として伊勢に詣でしめ神託を請ひ玉ひし時、皇大神日輪の形を現はし、日輪は即大日如來なり、帝此

意を得て造建せよといふ神託に依て、大日如來を造立し、東大寺の本尊
とし玉ふこと世の人みなよく知る處なり。又西大寺淨覺律師參籠の時
は、第一義天金輪王光明遍照大日尊と告させ玉ひしとなん(律苑傳)。
故に世人みな大日如來を以て大神宮の御本地と仰ぎ奉る、然るに又當
山觀音の垂迹なりといふもの有り。しらす何れを是とせん請ふこれを
決せよ。答云觀音は即ち大日如來なれば何れも其旨あるべし。大日經疏
に云く、八葉は皆大日如來の一身一智なり、如來内證の徳を顯さんが爲
に八葉分別の説をなすといへり。觀音即ち大日如來なることを見るべ
し。諸觀音の中にて、別して十一面尊に就て大日同體の秘旨有り。諸尊皆
大日に同じといへども、別して金輪佛眼を以て同體の深義を傳ふるが
如し。當山開基徳道上人、手力雄命の告を受けて、皇大神の御本地を本尊
と崇め奉らんが爲に、伊勢五十鈴河の邊磯宮に百日參籠し玉ふ。其満す
る夜、文武天皇即位十年九月十五日戌刻ばかりに、蒼天雲なく、月光こ

とに朗なり、御宮殿の外に一の日輪を現す、其中に金色の十一面尊光り
を放ちて、顯現し玉へり。聖人遙に是を拜して、御本地を知ることを得、歡
喜の餘り、重て垂迹の御形を拜し奉らんと祈念しけるに、忽常ならざる
貴婦人の形を顯し笑を含みて告て曰く、汝我本地を知らんと思はば、能
く我言を思へど、即ち偈を説いて曰く。

我本秘密大日尊 大日日輪觀世音

觀音應化日天子 日天權迹名日神

此界能救大慈心 所以示現觀世音

と、いへり聖人かゝる委曲の御告を承はりて、歡び歸り其顯現し玉ふ御
形を、稽文會稽首勳をして三ヶ日の間に作らしめ玉ふこと、祕記の中に
出でたり。此神勅を以て知るべし。大日如來、觀自在尊、日天子、天照神、只本
迹の異なるのみにて同體なるべきこと分明なり。故に當山に衆生の機縁
に應じて一門の觀世音の形を示し給ふ時は、即ち觀音の淨土補陀落山

長谷寺緣起

なりといへども、普門を改めざる一門の尊なるが故に、観音即ち大日如來にして全く大日如來の淨土密嚴國土なり、行基菩薩兩部の三摩地に入り、山内皆密嚴の地にして兩部胎金の諸尊彌輪し玉ふを拜見し奉りしといふ起本縁。即ち是れなり、豈疑うべきことあらんや、この故に當山彼の巨靈の手を借らず自然に二つに分れたり。古歌に是を大初瀬小初瀬といふ。川の東の與喜山は大初瀬即ち胎藏界の曼荼羅なり、川の西の觀音山は小初瀬是れ金剛界の曼荼羅なり。故に一度び此山に入るものは即ち兩部界會に入れるなり、むべなるかな。八大童子、徳道上人に告て一度此山に入るものは生生に加護して終に淨土に送るとの給ひけり、一瞻一禮の輩は永く三惡道を離れ二世の願を成就すと云云。況や常に住せんものおや、悦ぶべし仰ぐべし。大日如來は諸佛の本祖にてまじませば阿闍寶生、彌陀釋迦等の十方法界の諸佛菩薩、此山内に集會し給はざるなし。王城の地には諸國の侯伯悉く集るが如し、かゝる貴き山なれば、善

光寺如來を始め諸佛諸神も讚歎し歸信し玉ひ、十一面尊も諸國に類ひなく在せども、古より今に至るまで、他の神佛の力に及ばせ給はぬことをも速に満させ給ひ、貴賤道俗共に渴仰殊に深きは此尊の如くなるはなし。あに餘尊に超えさせ玉ふ所以なかるべけんや、能く是を察し信心を起すべきことにして、又天照大神即大日如來なること天照大神の神勅のみならず、神祇本紀上に曰く、大日靈尊亦の名は天照大神、又日遍照太神、月夜見尊、又は月遍照太神といひ、又舊事本紀第十八丁十五に云く、懿徳天皇二年甲午、午中天に在す日輪直ちに輪を分け、五瀬國に降臨し玉ふと又神皇本紀第廿に云く、日本媛命昔日天降りて岡に在し、天照大神天に在す大日とこゝに在す、大日と差う所なきを觀玉ふといへり。天照大神即ち大日如來なること明かなること鏡に向ふが如し、況や既に内外兩宮を日月とし、日遍照尊共に遍照尊と稱す。大日如來を亦遍照尊とも稱し奉れば、内外兩宮次いで、の如く胎(日)金(月)兩部の大日如來な

ること分明なり。大日と遍照とは言異なれ共意同じ。又天照遍照は和訓既に同じくあまてらすなり其意同なること知んぬべし。又大毘盧遮那と大日靈尊と同名なり。毘盧遮那の言を略すればたゞ毘盧なり。然れば大毘盧大日あに同名ならずや。毘盧と日と和梵語同じ其例擧て計ふべからず。今一二を出せば梵に鉢多羅和に鉢といひ梵に阿魔和に尼といひ梵に素羅和に天といひ梵に魔斯叱和に猿といひ梵に波多和に幡といふ其類數數あり。大毘盧遮那と大日靈と只言の具なると略せるとの違のみにて同體同名なること例して知るべし。舊事本紀を撰集し玉頃は大隋の代にあたれば震旦國にも眞言經はいまだ渡らず。神代より傳はれる和字のまゝを漢字にうつし玉ふ故に自然と相稱ふこと最奇妙ならずや。是を以て知るべし。神佛二道本來不二なることをされば伊勢皇大神社内に眞言三部の祕經有り。淨覺律師拜見し玉ふに善無畏三藏所譯の本と異なることなかりしとかや。寔に密教は我朝本有の經

なりといふも宜ならずや。是等の心を以て併せ見れば前に出せる神勅の我本祕密大日尊大日日輪觀世音等の一偈半の文は甚深の道理を盡したるにあらずや。又按ずるに本縁起に天照大神法性宮に在して春日大明神と契りて君臣となり。此土の塵に交り玉ふといふ法性宮は即當山なり。大日如來釋迦藥師地藏觀音等の諸尊と議り玉ふて日月星等の形を現し玉ふなり。故に當山の一名を日出山といふ。是大和姫命世記に天地開闢之初神寶日出之時御饌都神與大日靈貴豫結幽契永治天天下言壽宣肆或爲月或爲日永懸不落或爲神爲皇常々以無窮といふと暗にかなへり。亦奇妙ならずや。初瀬の里人古來語り傳へて日輪は當山より出で玉ふといふ。當山觀音天照春日左右に祀るわきだち深旨仰ぎ觀奉るべし。東の山に天照太神並天兒屋根命天太國命鎮座の石有り伊勢の相殿も是に同じ。世紀姫命又は大鳥居の兩脇に手力雄命萬幡豐秋津姫鎮座し玉ふも亦伊勢大神宮の相殿一説に此二神な

りといふ。命世紀當山此等の義にかなふこと奇しからずや。是故に秘記の中、天照太神の當山は我本有相應の地との玉ひ密嚴本有の光りを秘してなごの玉ひけり併せ案すべし。當山即大日如來の淨土密嚴國土にして天照大神本有常住の靈場なること疑ふべからず。況や我朝自然に五畿七道に分れ、東に八州有り、西に九州有り、五畿内を中國とし、五ヶ國の中に大和國を本とす。大和、大日本共に我朝の總名にして、而も又當山の別名とす。甚深の道理に契ふとて國を大日本と名づくる其根本を尋ぬれば、即當山に在りと熱思して知るべし。猶甚深の習有りとかや、毫に顯すべきことにあらず。默思して知るべき事なり。又問天照神の御本地、大日といひ觀音といふこと共に神勅にして、甚深殊勝の旨を承はり、疑ひ既に霽れぬ。然れども當山の觀音といふことは疑氷いまだ消えず。如何となれば、當山觀音顯れ玉ふは、人王四十五代、聖武帝の御宇なり。天照神伊勢の神乳山にて生れさせ玉ふは、天神七代の末なれば、大凡二

百四十萬餘歳前なり。豈前に生れます皇太神、後に顯れ玉ふ觀音の化現なりといはんや。譬ば二三歳なる嬰兒をさして百歳の老翁の親なりと言はんが如し。常情の世俗に疑ひなからんや。其説あらば、請詳に之を示せ。答前にいはすや、當山は常住三世淨妙法身、大日如來の淨土なり。大日如來は、喩ば日月のごとく、觀世音は大日如來大慈悲の應用の徳なれば、光明の如し。日月光明共に無始無終不生不滅、本有本覺の佛身なり。神道に是を過神といひ、常世大聖といひ、久在神といひ、又は未だ天地始らざる先より世間に在りといふ。此常住不變の眞身をさして、皇大神の御本地といふなり。此眞身は凡人の拜見すること能はざる尊容なれば、是を摸して靈木を刻み顯し奉るなり。故に金剛使者童子、宇治關白頼通公へ告ての玉は、く、當山は往昔よりの淨土なるが故に、伽藍未興の時より生身の觀音利生の砌にして、鎮に衆生を利す。是を有縁の機に示さん。が爲に假に靈木を刻み尊容を顯はす。靈驗といふなり。此靈木を刻み奉

る像は佛の應身に屬す機縁に隨て生滅隱顯有り、此像を天照神の御本地といふにはあらず、繪木等の形像は應身にして眞身にあらずといへども、迷人に親しくする事は眞身にも勝るが故に衆生濟度の利益は形像の尊却て眞身にも勝れ玉へり、況や又眞實形像異なるといふは凡夫の謂情淺教の意なり、眞言教の意は形像即眞實と談するが故に實には眞應の差別なし、誠に觀音御座の金剛寶石は金輪際より屹立して其面に自然と菩薩の行足の跡有り、新像の御足に比ぶるに少しも違はずといふ本縁起。此御足の跡は即是觀音眞身の御足の跡なり、眞身は凡夫の眼に拜することあたはずと雖、その跡を見て觀音の眞身三世常恒此石上に立たせましますことを知るべし、此御足の跡に自然と同じやふ刻まれ玉ふ形像を安置し奉るが故に眞身形像自ら冥合して不二一體なり、故に別して形像即眞實の道理有り、是れ亦靈應餘尊に超え玉ふ所以なり、豈尋常の形像と年を同じふして論すべけんや、是等の深意を以てい

はゞ形像を以て直に皇大神の御本地なりといふども妨げなし、彼の信州更科の新長谷寺は當山觀音未だ顯れざる時、以前なり善光寺如來の御告に依て、白介の翁といふ者、常山をうつして十一面觀音を刻み安置し奉ること靈驗記に委しく記す、則去己卯の秋關の左より登り、次に善光寺へ參詣す、神の宿を出で左に望めば川の西の方遙に遠き山の端に貴げなる佛殿僧院見へければ、馬追ふ者に是を問ふに、あれは名高き支那の新長谷寺なりといふ、即ち予うなづきつゝ試みに其由來を尋ぬるに、馬子の詳しく語る所に依れば、靈驗記に記せしよりは猶具さなり。千餘歳の後兒女走卒まで其由來を能く諳知しおれり、今も猶靈驗揭焉なる事を知んぬ、其夜は善光寺に宿り、翌日丹波島を過ぐることに一里計も來りけん、其新長谷寺の麓を通りければ、立ち寄りて拜せんとせしも路峽くして馬の通ひなし、廿町餘も辿るべしと馬子いひければ、詣でざりき、高山の尾上に在りて見渡すに、望中百里景色無雙の勝地と見へた

り今思ふに追分の宿より二日路の善光寺すら詣でしに、一里に足らぬ間を、いかで餘所に見て通りけん、我心の等閑なるぞ今更悔しく恥しく侍る。此新長谷寺既に當山草創より先き百年ばかりに當山十一面尊を寫し新長谷寺と名づく、今に至るまで靈應昔に替らず、國合て信仰す、是れ現前の證據なり、以て知るべし、當山は三世常住の佛土なれば天照太神も當山觀音の垂迹といふ、豈疑ふべきことならんや。

(信 恕 能 化 加 筆)

上件披閱長谷寺緣起文等、而和語緩句助、愚僮頑夫之微志而已、看者莫簡多事、言約旨隱、詞繁義鮮、今執三折衷、染三禿毫、矣。

往生の間

禮堂の西面の一間をいふ昔大唐國天台山に堯惠禪師とて道心堅固にて西方往生を願ふ貴き僧おはしき、彼の山の如意輪に籠りて順次の往生を祈られるに百日満する曉、本尊の御前に容儀氣高き童子現はれ禪師に告げて曰く、是より東方に國有り、其中に西方有緣

の地有り青山四方に聳え、石木皆大聖の變化にて誠に觀音利生の道場なれば、一瞻一禮の者皆悉く益に預る、彼地に至て念佛し往生の素懷を遂ぐべし、其山の形は如是とて左手を挙げ玉ひしかば、小指の端より光を放ち、光の中に山河草木歴歷として顯はれ、佛閣僧院巍巍として現じ、十一面觀自在尊金光を放ち玉へり、禪師喜びに堪へず、此國に渡て處處の靈場を尋ね拜する中に、當山に詣で此山の此尊こそ能く彼の瑞光に叶へり、とて當山に籠居し、至心に念佛すること僅に廿一日にして、豫め死期を知り、寛和二年八月十五日正念にて往生す、異香薰じ紫雲聳へて聖衆來迎し、音樂空に響き人皆耳目を驚かす、依て御來迎の形を觀音堂の後堂にゑがゝしめ、その往生の處を指して、往生の間と名づけたり。此處と天王寺の西門とは極樂淨土の東門に當ると、守護の童子行基菩薩に告げ玉ひけり、むべなるかな他方の冥衆も我山の功德成就の地、往生極樂の砌なる他に超えたる事を示し玉ふこと、靈驗愚按するに指光の

往生の間 寶頭盧尊者

中に當山の形を顯し示し玉ふことは、當山の觀音南方高野山の形を指光の中に現じ祈親上人に示し玉ふと一般なり佛佛道同の方便難有とにあらすや。

賓頭盧尊者 禮堂の中に安す。要覽を按ずるに此尊者を供すること。晋の道安法師より始り、像を立つることは宗の泰初の末より起り、天下則とすと見えたり。大法東漸してより我朝の諸刹も亦然り、尊者の緣起一卷慈眼院の住真龍北野集たり、尤も詳なり、方丈に納めたり、俗に、なで佛と號したる、參詣の男女老少此尊をなで敬ふと限りなし、奥州やない津の賓頭盧尊者靈應速疾なるよし諸人傳へ語りたり。

今の觀音堂は 大猷院殿の御建立なり、小池坊第四世秀算僧正寛永十四年(紀元二二七七年)武城に至り、伽藍の再營を東都の有司に願ひけるに、同十四年の春家光公痘不豫にして病患甚だ重く、國醫術を失ひ、左右亦手を亡す。即ち諸臣評議して三寶神明の冥助を祈り玉ふ時、長谷の

修造を以て第一とし玉ふ、丹祈の感ずる所不日にして平復し玉へり。その頃僧正一首の和歌を夢み玉ふて諸徒に語り、願望當に成就すべしと悦び玉ひけるに、果して二日を過ぎて東都より拜書到來し、堂舎修營の次第具さに圖畫し上るべき由仰せ下されければ、急ぎ巧匠を集め大悲閣を始め鐘樓廻廊二王門等一々圖繪し是を有司に啓す、修造未だ始めざるうち、寛永十八年十月僧正寂し玉ひぬ。第五世尊慶僧正緒を繼で、翌年壬午春武都に赴き、大樹君に謁し、且つ豊山の營構を經始せんことを寺社監に請ふ。癸末の夏五月に至て之を允許して黄金貳萬兩を賜ひ、中坊美作守時祐に命じて造營を主らしむ。越えて正保二乙酉年五月工を鳩め營を創む。慶安三庚寅五月に至り終始六ヶ年にて、營功悉く就る。同六月臺命有りて、落慶供養を勤むること都て三ヶ日、初善は曼茶羅供、職衆は一百廿口、中善は三問一講、列客一百廿員、後善は具支灌頂、職衆五十口なり、寶幢、幡蓋、花鬘、花籠、袍服、袈裟、戒場の法具、兩部曼茶羅等悉く官命

賓頭盧尊者 專譽僧正

に依て新に辨備す。大凡供養の會場、莊嚴殊妙にして瞻禮の緇白皆いふ、眞に補陀落山なりと。紺閣樓門、登廊鐘樓等、規制宏麗にして柱礎、梯磴、結構處を得、高薨、橫欄、輪奐の美を盡せり、亦天平新創の昔にも差ることなし。惣て是幕府の深信大悲の神力より起れり。此時惣る十有餘ヶ所、新に修造あり、慶安三年落慶の時より當寶曆十庚辰年まで百十一年なり。

專譽僧正

此に先づ是を載するに當り、中山中興眞言新義、豊山中興

小池坊第一世專譽僧正字は宮賢、泉州大鳥郡の人、父母勝尾寺の觀音を信ず、一夜母公の夢に胸に白色の蓮花を生ずと見て、姪めり、生れて四五歳となり、動もすれば合掌して佛を念ず、父母其法器なるを知て、將ゐて根嶺に登り、妙音院玄譽の室に入り、十三にして受戒す、灌頂加行の頃、十一年、一面觀自在尊夢中に、祕印明を授け玉へることを感ず、性學習を好んで朝夕倦むことなく、遂に顯密の教旨に達し、野澤の法流を窮め玉ふ。天正十二年(紀百五二代正親三天皇)八月、化主賴玄の譲りを受けて、妙音院に住す。

又小池坊、翌十三年三月、豊臣秀吉公の軍卒一炬を擧げて、根山を焼き、唯大塔一基残りて、佛殿僧院、悉く焼かる。満山の淨衆、各四方に散す、師は泉の國分寺に隠る。同十五年和州の大守豊臣秀長公、長谷の梵場法風、稍衰へたるを歎き、世に超えたる名徳を屈請して、主として一新せしめんことを願ふ。時に小堀正次といふ近臣啓して曰、智行兼備の名匠あり、其名を宮賢房、專譽といふ。根來寺傳法院正嫡の法將なり、根山廢して、今は泉州國分寺に蟄居す、斯人然るべしと。大守欣然として、即ち小堀正次に一庵の法印を添て、泉州に使せしめ、禮を厚くして、之を請じ、豊山の貫首とす。日譽、快盛等の龍象、四十餘輩、從ひ來て、道化を翼け、れば慶事宜しきを、得て人法濟々たり、鶴の聲天に聞えて、程なく僧正に任せられたり。其冬、始て講筵を敷、再ひ法幢を建つるに及んで、四來の學徒、星の如くに馳せ、雲の如くに集る。寔に佛天も影向し、玉ふべく、皂白隨喜せずといふことなし。文錄四年九月、豊臣秀吉公、舊來の封戸を改め、朱印を賜ふ。東照神

君素より師の徳風を愛し寵遇最渥かりければ慶長五年軍卒の放火伐木を制する印章を給ふ是より衆園益益静安にして講學日に煽なり正に是神君の恩光師徳の感ずるところ世舉て瞻仰尊崇せずといふことなし師撫衆の暇ある時は心を月輪に住む一時闇室に於て月輪炳現し光明赫赫たり慶長九甲辰(紀百七代後水尾天皇)夏五月五日睡るが如く寂し玉ふ行年七十五先に文録末奥州の鏡線といふ僧豊山に登らんとして箱根山を過ぐる時束帯せる翁一人神祠の下より出で曰く僧は長谷寺に行かるゝならば僧正專譽の方へ言を寄せん我は俗たりし時は祐成といふ者なり彼の山の專譽は我前世の弟なり吾は未だ苦趣を免れず救ふに法力を以てせよと鏡線曰く何を以てかその證とせん翁曰く專譽は右脇の下に黒子あり又性質勇力にして左手特に力強し是を以て其信とせよと鏡線山に登り竊に此奇事を專譽僧正に語りければ譽僧正良久有て曰く汝が傳ふる所誤らすとこゝに知んぬ彼の翁

は曾我祐成が幽魂師は是五郎時宗が後身なることを以上傳通記略抄。謹で按ずるに豊山は即ち秘密莊嚴の地兩部大日如來の淨土なる事本縁起の旨分明なり密教相應の靈場何の處か是に増らん開山徳道上人既に求聞持の法を修して其成就を得玉ひ靈驗記高祖大師も一百日籠り居て密教の弘通を祈らせ玉ひ八祖相承の舍利一粒觀音の御頭の中に納め玉ふ東寺舍利記而して是は後に密教弘通の本山となるべき奇瑞を示すもの歟夫れ當山は即ち密嚴淨土なれば觀世音は即是れ大日如來なり密教興隆はたとへ祈らすとも守り玉ふべし況んや高祖百日の熟祈救世大悲者何ぞ納受し玉はざらんや故に高祖入定の後高野山諸堂伽藍いまだ具備せざりし時當山觀自在菩薩の教示に依て祈親上人高野山に登り二親上生都率の消息を感じて大師の加持力を感じ再び山を下らず諸伽藍を造立し南山を中興し玉ふ是れ當山觀音密教擁護力の徴なり又興教大師少年の時南都に在て修學し玉ふ頃春日

專譽僧正

大明神第四の御殿夢に告げ玉はく汝は大法器なり將に密教を興隆す
べし我汝が法を守らんと誓ひ玉へり年譜春日大明神は當山觀音右邊
の脇土就中第四御殿は即ち觀音の垂迹なり旁以て眞言教を守り玉ふ
べき事疑ひあるべからず然るに伽藍の興廢は時運の致すところ時に
寒暑有り劫に成壞有るが如し願て致すべからず惡んで去るべからず
觀自在尊豫じめ根山の廢せんことを知見し玉ふて彼山の法流此長谷
川に溢れ法水漫漫として密宗の本山となさしめ玉はんが爲に專譽僧
正を出生せしめ給ふなるべし前にいへるが如く專譽僧正の父母勝尾
寺の觀音を信じ瑞夢を得て生みたる人なり且幼にして根山妙音院に
投す妙音天は即辨才天女これ日分魂富主姫と申し天照大神と御同體
なれば當山觀音の垂迹なり況少年の頃十一面觀音祕印明を授けさせ
玉ふなご思ひ合せ見るべし此人にして此山を中興し此法を紹隆す豈
奇しきことならずや當に知るべし觀自在尊を始め兩部の諸尊山内影

向の日本朝中小神祇並兩大師等惣る一切の三寶諸天神祇佛意神慮
を合せ妙智力を添て當山に引接し玉ふあゝ專譽僧正は所謂如來の所
使なる人なるかな譽僧正三密の法幢を當山に移してより已に今寶曆
十庚辰年まで百七十四年大悲の威光は日を追ふて盛に法の花ぶさ年
年に色をそへありふる鈴の音は二六時中に清く渡り文讀む窓の燈は
山上山下にかゞやきあひ大悲の法樂を増し天下の昇平を祈るされば
にや高根にすめる月面は笑を含みて遠く八洲の外を照し麓に流るゝ
法水は普く日の本の内に溢れたり大日如來の淨土に大日如來の祕法
を宣揚して依正人法既に相應し三密の法燈永く三會の曉かけて輝き
國家を鎮護し萬民を救濟すべきこと疑ひなし故にいふ根嶺の廢する
は還而豊山の興る爲なるべしと豈に然らずや

(信 恕 能 化 加 筆)

大はつせ小はつせ峯峯谷谷の奇瑞靈驗むかしを今に見ることのよ

し此卷に過こざるべし、はやく版に行ふて遠近の賢こ愚かなる人に
しらしめよ其利益限りあらまじ經王云爲^ニ度^ニ於^ニ世間^ニ而以^ニ文字^ニ説^ク
云々

寶曆十一己年六月ヨリ同十二年六月迄

大仲月輪院

鳳觀祐嚴



水の巻

薬師堂……瀧藏三社権現……愛染堂……彌勒菩薩……求聞持堂並能滿院……
聞持修行最上の勝地……密教の宗徒必修……諸國新長谷寺

薬師堂 三間四方 本尊は座像三尺餘、日光月光十二神將、側に訶梨帝
母の像安ず。迦り考ふるに天文五丙申（紀元四二九六年）六月二十九
日三十餘ヶ處炎上したるに、頂上の佛面燧灰の中に在て毫も焼けず、然
るを延享元年甲子年（紀元一七四三年）圭賢僧正寶庫の中に有りし焼
残りの佛體を修補し、之に日光月光十二神將を新に彫んで安置したる
ものなり。傳え聞く薬師如来は日夜常恒に歸衣渴仰の者を守護し玉ひ、
日光月光は晝夜を分つて守り、十二神將は十二時を守り、十二神に各七
千の夜叉神隨從して、總て八萬四千の眷屬あり、我等一晝夜の間に八萬
四千の念有り、八萬四千の夜叉神番代に其念念を守り玉ふといへば、睡

薬師堂

れる中も其守護を蒙るなり。況や我此名號一經其耳一衆病悉く除く身心安樂ならんと誓ひ玉へり、誰人か信仰せざらんや、別して日本有縁の佛にて御座せば必ず歸依し奉るべしと。さればにや天王寺法隆寺を始め比叡山の中堂高野の金堂など古き伽藍多くは薬師を本尊とす寔に故あるをや、殊に東照大権現は鳳來寺の薬師佛に祈て生れ玉ふ故に、薬師の垂迹にてましますとかや、神武天皇より以來御當代の如く四海波静にて萬民快樂なるはなごといふも、むべならずや。當に禮拜して天下太平を祈り君恩の萬一をも報ひ奉るべき事にこそ。

瀧藏三社権現 拜殿各表一間半裏二間半當山の神名帳には瀧藏大菩薩といふ、此神に三社有り、第一御殿は新宮権現、第二殿は瀧藏権現、第三殿は石像権現、中大石を以て神体とす、社の内より外まで顯れ見ゆ、其根地の人は是を撫づ、三社別なれども總て瀧藏権現といふ。瀧藏講式に曰く、新宮は女體にして柔和なる姿なり、本地は薬師如來、瀧藏は老父の形、本地

は虚空藏尊、石像は比丘の形、本地は地藏菩薩なり、神武天皇の御宇、明星天子瀧藏の絶頂に降て鎮座し玉ふ。瀧藏山は初瀬川上、聖武天皇御宇、天平五年八月十五日夜、長谷観音堂の左脇に平坦の地有り、明星天子降臨して比丘僧の形を現はし、徳道上人に告て曰く、我は是れ上古より三神の里の地主なり、今重て十一面堂を衛護せんと約し給ふ、依て祠を立て祭祀す、此権現は長谷八邑の鎮守なり、年年正月十一日祭祀す、氏人皆集て盛饌を奠り、方丈六坊出席し、二箇の法要を勤めて法樂を供ふ、其儀式嚴重なり。

明暦元年乙未(百十代後西院天皇)夏大に旱して河水渴き、林木焦れ、村民眉を顰めて雨を請へども、其驗なし。依て請雨を化主良譽和尚に願ふ。和尚慈愍深く法座を瀧藏の神前に莊り、龍象を率ゐて三分機根といふ題の論鼓を鬨はしむ、蓋し機の勝劣を大小の龍に比して論ずれば、龍の感動あるべきを察しての故なり。鐘響正に發する時、雲油然として北

峯に湧き、法席未だ巻き了らざるに、雨沛然として南畝に溢れければ、人民感悦し僧俗驚歎す。和尚諸徒に語て曰く、我平生修法の壇上に一花を以て水天に供す、速疾に靈驗を得たることは從來勤念の致す所なり、子等是を思へど、亦法門の深義神天を感動す尊ひかな嗚呼。

愛染堂

表三間裏本尊は古佛なり、世人此尊を衆人愛敬の本尊とす、

さればにや經に云く此明王の眞言を誦すれば、能く一切の見者をして皆父母妻子の想を生せしめ、所作の業皆成就することを得と説かれたり、誰か信誦せざるを得べし。

彌勒菩薩

同堂内に安ず、跏趺座の下に記して曰く、これ當來の導師にてましませば、誰も敬禮して龍華三會の値遇を祈り奉るべし。と殊に當

山は都率天宮觀世音院なりといへば、當山信仰の人は因縁尤も深し。又彌勒觀音共に西方蓮花部の尊なれば、其内證の深義以て知るべし。

求聞持堂并能滿院

常州水戸林諦房宥仲、同全雅房寬海二師共に此法

を信じ、或は高野山に登りて勤め、又は朝熊岡に籠りて修すること數度頗る悉地を得て、種々の靈瑞なご感せしかば、常に當山密宗の一本山として此道場なきことを歎き、兩人心を同じくして衣鉢を傾けて造營の志を起し、化主隆慶僧正へ啓す、僧正甚是を嘉して、黄金若干並に良材なご給ひければ、海衆各隨喜して淨施を添へ、正徳三癸年(百十三代中御門一年)處を東北の隅に擇で、求聞持堂を建つ、本尊木壇等の支具を辨備して、又一宇を造り、能滿諸願の寺なればとて、能滿院と名づけたり。

本尊の供物を調べ、又は行者の休息所とす、常に一僧を置いて、行者を護持せしめんとするに、其資糧を如何せんと議しける頃、勢州射和富山氏黄金百兩持ち來りて、勸學院へ寄附せんとす。このことを聞いて、喜んで五十兩を以て、能滿院へ附す。それより供料など次第に増加し、年を追ふて繁榮す。又寶曆六丙子年(百十五代桃園天皇)江戸彌勒寺住職教林

求聞持堂并能滿院

法印江洲北野寺に在りし日、黄金五拾兩勸學院へ寄託し、其子分を年年
兩人に分ち與へ、永代聞持修行の費に充らる。其處は觀音堂より東の方
盤廻して入ること數百歩、峻嶺に傍ひ、深谷に臨む。蕭々たる松の嵐は浮
世の塵を遠ざけ、鈴曉たる水の流は妄想の垢を滌ぎ、寔に經軌の説にか
なへる。禪寂の靈場なれば、開闢の始より今に至るまで、(寶曆十)萬指の
大衆の中代り交り修する者絶えず、隨分の悉地を得たる者擧げて數ふ
べからず、あゝ仲海二師の功勳鴻ひなるかな。

予按するに當山には往昔も聞持堂有りしものか、開山徳道上人既に
此法を修して悉地を得、高祖大師百日參籠し玉へてより、當山は密教を
専門とせり。勢州國速寺祕記の中に聞持修行の靈場三十三處を擧ぐる
中に當山其隨一なり、定めて知んぬ往古これ有りしことを。

聞持修行最上の勝地 當山は即秘密莊嚴の靈場、兩部大日の淨土な
ることは、縁起の文明なり。然れば觀音即普門の大日如來なり。何れの法

を修するにも最上の地なることは、いふもさらなり。今淺略一途の説に
依ていふに、瀧藏權現は明星天子の應化にて、當山の地主なれば、當山は
是南方寶部虚空藏尊の山なり。じかのみならず、觀音御座の金剛寶石と
いひ、金剛寶は虚空藏尊なる十六丈の水精塔中に三世諸佛遺身の舍利
を安ず、舍利は虚空藏の三昧故に或は此山を舍利山といふ。神鏡廣又閣
浮提の福田といふも是れが爲なり。故に武内宿禰山の形を卜して天の
徳を授け、地の榮を表すといふ縁起文。彼の多聞天所持の寶塔も此山に
納る。寶珠の徳になぞらへて豊山と名づく縁起文。世俗當山の觀音は別
して福徳を授け玉ふとて福觀音と稱し奉るも、むべならずや。又高祖大
師八祖相承の舍利も觀音の御頭の内に納り、興教大師信貴山毘沙門天
より賜はる寶珠も今當山に納る。其外大悲閣、方丈、講堂、勸學院等諸寺院
に安置する所の舍利皆因縁殊勝なること擧て記すべからず、いはゆる
物は類を以て聚るものか、諸經軌の中に舍利を安ずる處は一切法成就

し易しといふ壇上に舍利を安ずる此故なり。一佛一粒の舍利すら尙し
かなり。況や三世諸佛の舍利をや、功德成就の地と藏王權現の玉へる、
また此故にあらすや。然れば則所居の山は能滿所願虛空藏尊能居の佛
は大慈大悲觀自在尊にて、此二尊御意を合せて、三世常恒衆生を利益し
玉ふ淨土なれば、靈驗漢家本朝に秀で應用三千界に滿つといふも宜な
るぞかし。予曾て神鏡廣傳記と題せる秘記を見侍りしに、第八卷に、高祖
大師曰く、虛空藏尊を信仰せざれば、觀自在尊の利生を蒙り難し、觀世音
に歸依せざれば、虛空藏尊の福智を得難しといへり。思ふに當に深き理
あるべし。凡情を以てはかり難きことなり。當山觀音を信仰する者は、た
とひ虛空藏尊を歸依する心なしと雖、寶部の山に入り、寶塔寶石の功德
に照らさるゝ故に、觀音の感應に預り易かるべきこと思ひ見るべし。又
當山に於て、聞持修行の者、觀音を信するは、勿論なれば、聞持成就し易か
るべきこと必定なり。開山德道上人瀧藏の麓にて、求聞持一印の法を修

し神龜五年五月十五夜、明星天子石上に降り、壇上に天の甘露を感得し、
聞持成就を得玉へり。靈驗 既に先づ成就者の勝場なり、爾のみならず
德道上人は法起菩薩の應化、役の行者の再誕なり、母公明星天子降て口
に入ると夢みて、孕み九月十八日に生れ給ふ。或書に法起を寶喜に作り
即寶菩薩といふ、これ虛空藏尊なり。寶菩薩の化身にて、十八日に生れ給
ふ。觀自在と虛空藏と其内證想ひ見るべし。かゝる故にや彼の廣傳記の
中に、日本國の内にて、聞持修行の靈場三十三處を擧るに、當山其隨一に
撰まれたり。其三十三處を見るに、過半は本尊十一面尊、鎮守白山權現の
山なり。(一面尊の垂迹) 十) その他は本尊文殊に、鎮守辨才天等なり。(辨才
尊の十一面垂迹) 上來の意を以て、當山は求聞持修行の最上の道場なることを
知るべし。

或人問曰く、觀音を信せざれば、虛空藏の福智得難しといふは、いかな
る深理あるや。答二尊の内證、豈愚意を以て度ることを得んや。大旨淨嚴

聞持修行の地

和上の法要抄などを以て量り知るべし。顯露にいふべきことにあらず。愚按するに舊事神皇本紀第廿に曰く、垂仁天皇三十四年三月天照皇大神日本媛命に告げ玉はく、天孫尊大神は天の氣を以て地の徳に降し、地の氣を以て天の徳に昇せ、能く人黎を養ひ、又萬物を生ず、太理之主神夜盡畔光り、日に亞ぎ、月に亞ぎ、星の殊勝なる神、尙我よりも勝に寶祚を守り、神蒼生を守る神なり抄略。同廿六卷十一丁雄略天皇十一年五月皇大神託して告げ玉はく、我日遍照神天中に在すと雖、彼の月の遍照神天中に在さざれば、則天地の堅め無くして、又星の太照神在さざれば、則天下人の産れ並に物の生有ることなし。故に三柱の太神は鼎立するが如く、一を闕けば、則ち立たず、由て神代に天祖鼎の石を立てたまふ。汝我言を疑はば、一夜の中に三根一株の新瑞神魂木を生ずべし。此木日の月の星の神一體の瑞魂の木なり。又天地人の氣一根の印精の木なりと。其夜皇大神の高殿の側に忽ち高量二丈、太量一尋、三根一連の新瑞の木なり。同

じく十五丁に云く、同十二年四月日本媛命諸神司等集へて告げ曰く、我皇太神に事ふること四百七十年、今三光大神一處に集ひ鎮り坐す。天下太平に位ゐす。亦待つことも謂事もなし。今當に神つ都に歸るべし。吾恒に皇太神を見るに、日魂直に降り迹を垂れ玉ふ。天に日の在す限りは、地に大神在す。天孫大神は曉星魂を遣し、豊食太神は月魂直に降り玉ふ。天を見て宜く三神を知るべし。又第五十七禮綱本紀上に云く、日魂陽徳に立ち、月魂陰徳に立つ。星靈は和徳に立つ。鼎徳に任じ、宗宮に在して天下を鎮め玉ふ。略抄。上來の文を以て見るに、日は陽、月は陰、星は和用なり。陰陽和用する故に、天地も立ち、萬物も成就するなり。然れば、明星天子の徳、尤肝要なり。天照太神の我よりも勝に蒼生を守る神と曰へるも、宜ならずや。此垂迹の三光大神の威徳を以て、本地の功德を量り見るに、内外兩宮は即ち寶生如來虛空藏尊なり。前に述べし如く、當山は是胎金兩部の大日如來の淨土にて、三光大神常在の靈壤本地垂迹光を並べ世を

照らさせ玉ふ三國無雙の仙都なり。兩部は是理智色心迷悟凡聖等の二
 法なり。此等の二法不二冥合する時は三毒即三身の覺位是れ南方不二
 の三瓣寶珠寶生如來虛空藏尊なり。所謂一鼎の三足一株三根の奥旨深
 く察して是を觀るべし。開持法は一印法にして以て不二の奥旨を顯す
 一印なり。初心の徒も修し易しといへども成就を得る時は即兩祖の如
 く自證化他茲に究極す。初地即極の秘法と謂つべし。嗚呼兩部不二の山
 にして迷悟不二の法を勤念す。あに觀行應理にあらずや。其成就し易か
 るべきこと知るべし。觀音虛空藏の内證は三形と尊形とに約していは
 ゞ猶無盡の義あり。今は單に淺きを以て深きを量りたるのみ。猶先徳の
 寶鍵淨嚴の秘要など考へ合すべし。

或は問ふていはく子が言を聞かば古來開持修行の人兼て明星を禮
 して加護を求むるは其理分明なり。然るに或師の曰く日月等の諸天不
 可禮事と時處軌に説が故に無用なりと軌に是を判ずるは何の謂ぞや。

答ふ愚見を以て測りがたしといへども天竺の俗久遠より梵天日天等
 を禮して世間の悉地を祈る軌に判ずるは是なるべし。然るに日本は神
 國なり。神は即ち佛の化なり。上にいふが如く日月星等の諸天皆是神な
 り。神と天と二にして不二なり。神書の意は神天をさして佛の化といふ。
 是密教の如來自證の徳より下下來來して外金剛部等の惣て三界六道
 の隨類身を現すといふと同じ。佛菩薩は上位にして薄地の凡下は直に
 拜見し難く親近し難き故に光りをやわらげ塵に同じて衆生を度し玉
 へば我等如き衆生に親しきは神天なり。世間の悉地を願はず來世無上
 の悉地を求めんが爲に神天を禮して加護を請ふは神天の本誓に叶へ
 り。何ぞ是を非理といはんや。諸尊法に通じて神分を加へて三界の諸天
 本朝の神祇を勸請し法樂することは聖徳太子の教に順じて高祖是れ
 を始め玉へり。是をしも非理といはんや。且又高祖を初め開持成就の者
 多くは明星の降臨を感ず古へより兼禮して加護を祈るは一に是によ

又道場に明星影向の窓を開くは曉天に輝く明星の照覽し加被し玉ふと觀想して呪を持せば信心も彌々増すべければなり又彼の三十三處の靈場に各鎮守を擧ぐるを以て見れば唯明星を拜するのみならず其鎮守をも拜して加護を求むるなり當山開持堂の側にも辨才天を勸請して鎮守とす辨才天は是れ十一面の化なれば尤も理にかなへり但し昔の開持堂の鎮守は白山權現なること彼の廣博記に見えたり因に彼の三十三處靈地を出さん古來此法の繁昌なること想ひ見るべし。

求聞持靈地事

神鏡廣博記第八卷勢州涌福智山國東寺縁起に出たり今爰に掲げば

- 第一 信貴山 大和 毘沙門 第二 高千穂峯 日向 天孫大神
- 第三 竹生島 江州 辨才天 第四 朝熊岳 勢州 虚空藏天孫大神
- 第五 涌福智山 勢州 一面白山 第六 鳴川 大和 一面白山
- 第七 九世戸 丹後 殊 第八 大山 伯耆 善白山
- 第九 一古投 丹波 手白山 第十 五臺山 土佐 殊白山

- 第十一 足磨山 土州 如意輪白山 第十二 岩本寺 加賀 一面白山
- 第十三 那多寺 加賀 如意輪白山 第十四 石動山 能登 虚空藏山
- 第十五 日光山 下野 觀音白山 第十六 羽黒山 羽州 一面白山
- 第十七 神藏山 紀州 藏 第十八 粉川寺 紀州 手白山
- 第十九 廣川寺 河内 丹生 第二十 槇尾寺 和泉 白山
- 第二十一 高貴位寺 河内 一面白山 第二十二 舍利山 大和 傳言是豐山
- 第二十三 栗木岩窟 越前 一面白山 第二十四 戸隠山 信州 一面白山
- 第二十五 岩戸 武州 手 第二十六 村松寺 常陸 虚空藏太神宮
- 第二十七 清栖山 安房 空藏 第二十八 惠島 相摸 才天
- 第二十九 玉崎寺 奥州 手 第三十 大田寺 豊後 藏白山
- 第三十一 蓮臺寺 豐前 陀八幡 第三十一 牛尾山 山城 地主權現
- 第三十二 石山寺 江州 如意輪

求聞持靈地

以上 右國東寺之記ニ依リテ出ス。

求聞持の法は密宗の徒必ず修習すべき事 予往時ある阿闍梨に就て受法しける時、闍梨示して曰く、此法は愚を轉じて智となし、貧を改めて富となす、祕法なり、眞言行者は別して福智兼備せざれば、二利の大願を成就すること難し、故に眞言門に入る者は、最初起步の時、此法を修して無始の業障を滅し、福智の資糧を貯ふべし、始終一印の作法なれば、童子の時にも勤め易し、無畏三藏唐へ來り玉ふて、最初に此法を譯し玉ふ、又本朝へも道慈律師傳へ來り玉へば、日本國も密法の最初は此法なり、和漢共に密教流布の最初は此法なりしこと、徒事にはあらざりしなり、學密の徒必ず先づ修習すべき自然の理を顯すなり、高祖大師進士たりし時、數回勤念して悉地を得玉ひ、密嚴先德廿二歳より廿四歳の御時、まで八度精修して一切智を發得し玉ふは、此深理を後者に知らしめんが爲なるべし、兩祖の大權なる尙是を修習し玉へり、況や其末資たる者豈修せざるべけんや、高祖曰く、良工必利其刀、と、良工すら先づ刀を錯ぎ、

利にして後に巧みをなすと、況や拙工おや、又曰、鈍刀切骨必縁、砥助と性質の鈍刀錯ぐことなくんば、豈骨を切ることを得んや、まづ研ぎて銳利にすべきが先務なり、若し業障甚重なる者、此法を修せずして直に密教を行せば、空手にして虎豹を搏つに似、稚子にして鏑錐を振ふが如し、却て身を害すべし、なご慇懃に諭し玉ひければ、予も俄に心を發し、一度び修せしかども、生得懶惰疎慵にして信心堅固ならざれば、持呪も亦如法ならず、只一百万返滿するを以て成就とせり、業障の致す所、慚愧の至りなり。

又能滿院道場に文殊菩薩二尺餘の座像を安ず、草創の際古像を得て修補せしこと、彼の寺の舊記に見へたり、此菩薩は殊に智惠の主なれば、此に安じて五字五洛刀の念誦をも勤めしめんが爲なるべし、仲海二師の婆心至れりと謂ふべし、愚按するに、興教大師も五洛又法念誦し玉ふにや、祕釋中に其表白の文あり、慕蘭の志あらんもの仰で信誦すべし、五

聞持法必修

字は即ち五智なれば功德殊勝なること量り知るべからず、具さに經軌の中に廣く明せり披見すべし。

五字陀羅尼頌不空譯云、衆生性狡劣迷入三有苦、雖聞勝上法不不生勇進、一智者生悲愍爲此求先覺、猶如近寶山、智人往探掇愚者知不往、長日受衆苦、又云順理修行人、住於禪行者、應當觀此法爲下起三昧、用速獲中種智、上故下劣根性人癡愛雜亂者亦勸修此法、爲下消煩惱障入寂靜智上故。

靜かに之等の文を見れば、悲ひ哉我身既に寶の山に登り得たれども、智人の其實を採り得て自在に受用するを見つゝ、假にも信手を出して拾ひ取らんともせず、又煩惱障の病重く癡愛雜亂して、展轉ふしまろび、日夜憂苦を受くれども、其病を療する妙藥を持ちつゝ、それを服用する心もなし、寔に毒氣深く入て本心を失ふ故なり。いかに業障甚重なれば、斯くまでに狡劣には生れたるならん、前世の業因を悔み歎くも、而も

尙後世の糧を貯へんともせず、我心ながら不審にこそ思ふなり。

因に此尊初めて日本へ出現し玉ふことをいはゞ、

皇帝本紀上卷之上卅一丁云人王廿九代 宣化天皇二年二月五瀬國渡會神乳山(今の)大輝光滿國中、神官行見有二人、兒年度十六端嚴麗娟々尊極不可親倚、而乘大獸、長量一丈二三、咫毛色濃紫極猛怖形乃皇太神託、巫勅曰是客大神兒尊在辰旦國五峯山嶽、世智中智、世聖中聖、天地師也、當崇祭之以非犧供、彼辰旦國八十年先此兒大神在、故文巧也、從是這國當文巧、所乘獸稜威神獸庶惡神見焉、甚怖之、正善衆明神爲惡神、被襲、故造此獸形、置焉、神前是兒尊來助、吾神威增國德益永久奉、留祭之、于時兒太神乃分三神身、如分三燈火、一躬逗於茲、駕獸化、磐兒尊密形、一躬飛空至奧國、直如石成永居、故此地名永居、略抄

辰旦國五峯山といふは、即ち五臺山花嚴經諸佛菩薩淨土品と少しも

異ならず神佛全同なることおほよそ是の如し。駕獸は獅子、兒大神は兒文珠菩薩なること見るべし。我朝諸社にこまぬとて獸の形を安ずるは此時より始まる。また奥州永居の文殊菩薩今尙靈驗掲焉なること普く世の知る所なり。

(信怨能化加筆)

求聞持の法我道の秘要なるかや、よく詳にこるして此書をみんものは、いやましに位を増して修行し、愚迷を轉じ聖智を得ならん、作爲の功大なるかな至れる哉はやく刊板して諸法を助補すべし。

諸國新長谷寺

敬て惟れば當山は三世常住淨妙法身大日如來の淨土なれば、伽藍を草創せざりし時にすら靈驗を處處に顯はす。況や大悲薩埵顯現し玉ふてより後は、感應の月影普く秋津州の内にみち溢れ、遠く新羅唐までも照らさせ給ひぬ。依て普天率土此山をうつし。老少男女此尊を信せずといふことなし。是れ亦清く古へより濁れる末の世に至るまでは、つせ川の清き流は淵瀬のかはりもなく、大悲利生の谷長きしるしなり。

一信州更科郡新長谷寺

當山開基百年程以前に、善光寺如來の御告により、白介の翁なるもの當山を寫し勸請せり。

一京東山吉田新長谷寺

俗に今長谷觀音といふ、山陰中納言之を安置す。山陰中納言は幼稚の時當山觀音の冥助に依て不思議に萬死の難を遁れ、身命を全ふしたり。當山を信仰すること殊に深し、即ち千手觀音を彫刻し奉らんといふ願を起し、良材を異國に求め得たれば、之を吉田の山庄に刻まんさせしに、當山觀音佛工を化し、先づ十一面の小像を刻み、尋で千手大悲の尊容を彫刻す。即ち今津の國惣持寺の觀音是なり。

一攝州惣持寺本尊千手同試十一面尊即ち西國三十三處隨一なり。

一支那國宋州岩山新長谷寺 後梁の大祖當山觀音の加被に依て帝位に登り、後に勸請す。

一比叡山長谷堂 西行の撰集抄に詳也 一奥州三ツ迫坂上田村丸建立

- 一奥州安達郡二本松領長谷堂 田村丸建立。
- 一同南部三ノ戸郡新長谷寺 此山に御手洗池といふあり、雌馬若し此水を呑まば名馬を産むと故に此邊より多く名馬を産す。
- 一奥州稗貫郡似苗村長谷寺 御丈五尺兩夾侍共に安す。
- 一同郡青蓮寺村新長谷寺
- 一奥州森山領道坂長谷寺(一名彌勒院)
- 一出羽田川郡湯田川村長福寺本尊當山の末寺なり。
- 一同秋田男鹿郡椿村長谷寺 兩夾侍ともに安す慈覺大師の開基と傳ふ。思ふに慈覺大師は當山御信仰深く觀音へ參籠し種種の奇瑞ありしことは靈驗記に載す。彼の國に遊化の折彼の靈場を開き玉へしか。
- 一佐渡國雜多郡長谷村豊山長谷寺 高祖大師御開山地景全く當山の如し、前に山あり與喜山とよび、中に川ありはせ川と稱す。惣て山川の景色方丈六坊井に本堂例時の修法等迄皆當山に擬すといふ、即ち當山の末寺なり。
- 一下野都賀郡板荷村觀音寺本尊定朝作

- 一甲斐國長谷村長谷寺 長一丈六尺 身延山より約一里の傍にあり。
- 一相州釜倉長谷寺 坂東四番の靈地にして、古名刹なること世の知る處なり。
- 一同飯山寺亦曰長谷寺坂東六番の札處なり
- 一伊勢多氣郡長谷村近長谷寺 御丈一丈八尺。
- 一羽州宇賀郡湯澤町長谷寺 禪宗。
- 一下總香取郡米尾村長谷寺 長六尺。
- 一同古河城下長谷寺。
- 一南都興福寺大御堂兒觀音。
- 一同元興寺長谷觀音堂。
- 一大和笠山觀音寺 藤原房前公安す。
- 一伊州上野善福寺 當山觀音と同一木同作なりといふ。
- 一同所大福寺。
- 一但馬湯本 稽文會稽首勳の作といふ。
- 一播州二見浦長谷寺。
- 一伊豫國寒川村新長谷寺、一名神宮寺といふ、海中より出現すと傳ふ。
- 一大阪谷町萬年町俗に藤棚觀音と稱す。
- 一堺町新長谷寺 徳道上人開基。
- 一肥後熊本新長谷寺。
- 一江戸關口目白東豊山新長谷寺 當山秀算僧正中興

諸國新長谷寺

一同麻布一本松長谷寺

一同牛込神樂坂長谷寺

一同青山向橋長谷寺

一駒込千駄木長谷寺

一大塚護國寺

桂昌院一位尼公の御願にて、常憲院當山に擬して建立し玉ふ、其緣由を尋ねるに開山亮賢和尚は上野の國小野村の産なり、幼にして得成寺に入て剃染し、冠歳の頃豊山に登り、講習年を積み、深く顯密の教理に通じ、恒に觀音大士を供養して、屢々靈驗を感ず、功成りて歸錫し得成寺の主となり、兼々卜筮を善す、桂昌院の侍女に古杜といふものあり、上野小野の領主前田右近大夫の家臣の女子なり、依て賢師の高徳を知りて是を密に桂昌院殿に語り、師をして便生福徳智惠之男の丹誠を祈らしむ、未だ數月に渡らざるに懷妊せり、賢師占相して曰く、男子誕生して當に天下を治め玉ふべき緣なりと、是に依て殊に大猷院殿の鈞命を蒙り、倍丹誠を抽入するに正保三年正月八日綱吉公誕生

し、母子共に安泰に産れ、事々皆賢師の豫め語りし如くにて、些も違はず、茲に於て大猷院殿殊に歸信深く、長日護摩を修して、護持せしめ玉へけるに、遂に延寶庚申の春天下の主とならせ玉ひぬ。時に賢師語るらく、當日我命を蒙りて懷妊し玉ふより以來、今日の泰運に至るまで専ら豊山の觀世音に祈請し奉る故に觀音薩埵の妙智力なりと、大君聞いて深く大悲の恩徳を感じ玉ひ、母公と心を合せ、矩を譲り玉ふて辛酉の春有司に命じて、此伽藍を造立せしめ、尼公護持の尊、瑠璃の如意輪觀音を豊山の大悲者に擬して安置し、神輪山護國寺と號し、賢師を住せしめ、命じて曰く、斯寺の營構は豊山の觀音を仰ぐ素志の致す所なれば、永世修學を彼の山に求め、淨侶を以て相續して主職せしむべしと。かゝる御篤信より起るが故に堂宇宏麗にして、規製巧を極め寺領千二百石を寄附し玉へり、當辰年迄八十年を加算す。

一出雲國神門郡杵築中山長谷寺。

一同國大原郡三代村長谷寺。

一紀州伊都郡高野領長谷村長谷寺。

諸國新長谷寺

豊山玉石集

一同郡灌頂莊入江村長谷寺 昔岩佐權之丞といへる者癩病を發して
 當山へ參籠し大悲の冥助を祈りける時。大士夢中に告玉はく、汝業病
 平癒を求めば、速に歸て汝が隣村勝利寺の觀音に祈念せよ。權之丞
 感涙を流し、歸て勝利寺に參籠し一心に戀念するに、觀音即ち權之丞
 が身に代りて其病を受け玉ひ、業病日ならずして平癒を得たりけれ
 ば、本是れ長谷觀音の御方便なりとて當寺を勸請すこなん。入江村近
 郷の人々此縁を以て勝利寺の觀音は、殊に癩病を憐み玉ふとて、歸依
 渴仰して除癒を得る者多しといふ。彼の觀音は高祖大師四十二歳の
 御作なれば、世人亦除厄を祈る。慈尊院の側にして、高野登山の者多く
 詣拜す。

一奥州安達郡福岡村長谷寺(天臺宗) 兩山の際一帶の河流れて、山川の
 望景全く當山のごとし。

一武州葛飾郡三輪江村定勝寺長谷觀音堂。

一 下總葛飾郡木村觀音寺本尊。

一 下野都賀郡美濃村城寶寺 本尊長八尺護持院未

一筑後國生齒郡山北村龍王山德音寺本尊 本堂十四間四面行基作。

一上總國 長谷寺

一豊前下毛郡馬草村長谷寺 八面山といふ、高山の北端に在り。

一同國上毛郡長谷寺

一筑前羽方城下大龍山千丈寺長谷觀音 行基大士作柏木祕佛なり。

一勢州阿濱津領長谷部村長谷寺

一高野山奥院長谷觀音堂 水向地藏より十間ほど前方にあり、傍に曰
 く、天和三癸亥年木食空識之を再興す。

一日向國佐土原三納郡長谷寺 長一丈六尺三體同様。

一同國莊内領都城長谷寺 當山觀音の末木を以て作るものなりと。

一阿波國木末村長谷寺 豊山の末木にて作りしとぞ。

一和州宇陀大願寺

一常州茨城郡峰寺村長谷寺

一駿州阿部郡府中長谷村長谷寺

一河州藤井寺十一面尊 藤井安基といふもの當山大悲の救助に依つて

諸國新長谷寺

豊山玉石集

逆罪を遁れ蘇生したるを以て安置すといふ。

一同壺井通法内道場本尊

一三河志多羅郡長谷村長谷寺

一奥州伊達郡萬松寺村潮音寺觀音 (天臺宗)。

一賀州金澤城下觀音町卯辰山長谷寺觀音院 金澤城下より出たる四

國の行者來て是を語り、幸笈の中に異縁起ありとて出して是を與ふ、

言く賀州長谷寺は金城の東北にあり、本尊十一面觀音御長三尺餘、往

時天平の比、辛堀藤五夫婦の願に依て行基菩薩影み玉ふ尊像なり。往

古は當國石川郡に鎮座し玉ひ、賀州七邑の氏神と崇め奉り神驗他に

異り、元和の初國命有つて當山に遷し堂塔僧坊に至るまで御建立あ

り、本尊の由來明白なるが故に長谷寺觀音院と號し、國家恩徳に酬て

毎年卯月朔日二日祭禮能樂あり、誠に大慈大悲の誓約唐捐なく諸願

成就せずといふことなし。

一同城下栗殿町慈光院本堂觀音 近年迄長谷寺と稱す。

一南都西大寺觀音堂 長一丈六尺。

一奥州津輕城下廣前三里東青柳村長谷寺

一伊豫松山城下温泉郡藤原村福正寺

一出羽秋田城下寺町東福寺觀音

一安藝國豊田郡長谷初瀬村長谷寺 長谷といふ谷際に八村あり、其一

を初瀬と名づけ、寺を長谷寺といひ、當山觀音を安す。

一伯耆國久米郡倉石町長谷寺 領主建立の寺

一石見州力子郡増田長谷寺

一越後蒲原郡水原町長谷寺

一備中國窪谷郡矢田村長谷寺 吉備大臣當山を勸請す、其麓に又吉備大

臣の社有り寺社共に靈驗揭焉なるべきこと隣國まで隠れなし。其縁

起は吉備大臣唐にて豊山觀音の加被に依て圖碁に勝ち、且つ野馬臺

の詩を讀み、萬死の厄を逃れ歸朝し玉ふのみならず官位榮爵身に餘

り、其宋地たるに依て靈地を此に擇み、大悲閣を建立し本尊を彫刻し、

落慶供養の日、大臣遙に豊山に向て祈念を凝し玉ひけるに、初瀬の方

の空より一帯の光さして、新像の眉間を照らさせ給ひけるさなん、又

諸國新長谷寺

大臣唐にて碁局に向ひ、決勝の間一心に豊山の観音を念じ、窃に一石をぬすみ口中に入れてくだき呑み一石の勝となり、其縁に由て齒の弱き者は祈り求むるに、驗しあらずといふことなし。又碁を好む者吉備公を信すれば必上手になる故に、古より備中國は圍碁盛にして郷黨閭巷に黑白を相争ひ、子聲丁丁として断ゆることなし。

一 大和高市郡御厨子村蜘蛛観音 是亦吉備大臣唐にて野馬壘の詩に向ひける時心中に豊山の観音を戀念せしかば、観音蜘蛛となつて其上に落ち、文字歩みを引ける故に滞りなく、難讀の詩を讀み得たり、其蜘蛛の観音の小像となつて吉備の懐に入る。乃ち吉備國名を恥しめずして歸朝し速に當山に詣で、大悲の恩徳を禮謝す。
且つ末世結縁の爲にさて自ら十一面の尊像を刻み、蜘蛛観音を胸間に納め、此寺を建立せり。其近かく吉備村といふあり、大臣此所にて生れたりと傳ふ。又南都に吉備塚といふあり、葬りし所なりと云ふ。吉備大臣のことは續日本紀三十三、廿三左に委し。

一 下總海上郡長谷村長谷寺

一 因幡國法美郡長谷村長谷寺

一 近江國江西高島郡長谷寺

一 備前佐賀城下金陵山西大寺本尊

一 備後海邊長谷寺

一 美濃國吉田郡吉田山新長谷寺

一 飛彈國小坂村吉田山新長谷寺

一 賀州金澤寺町長谷寺

一 信州松本領長谷村長谷寺

一 常州水戸長谷村長谷寺

一 羽州秋田城外長谷観音

一 同郡若松村長谷観音

一 美濃國惠名郡長谷村長谷寺

一 美作國西上郡長谷寺

一 江戸澁谷長谷寺

豊山玉石集

- 一 大和高市郡高田村長谷本寺
- 一 同郡八木村國分寺長谷觀音
- 一 上野甘樂郡高崎清水寺千手觀音
- 一 肥前彼杵郡長崎伊奈佐村萬福寺本尊十一面弘法大師作長谷觀音といふ。
- 一 甲斐東郡菩提村菩提山長谷寺十一面長一丈餘
- 一 奥州岩城石川領長谷寺
- 一 甲斐國下山村長谷寺
- 一 奥州南部八戸豊山寺
- 一 同田村郡山中村帥繼院 田村丸建立
- 一 常州眞壁郡八町村新長谷寺 結城七郎朝光鎌倉の長谷七面堂に安置せる像を持ち來りて、貞永元年（わん）に開基す、即ち八町の供料御朱印あるを以て八町村と稱す。
- 一 下總猿島郡長谷村長谷寺
- 一 周防山口村長谷寺

- 一 南都唐招提寺長谷觀音
- 一 周防吉敷郡江良村長谷寺
- 一 尾州知多郡阿濃村長谷寺
- 一 江戸傳馬町裏鹽町新長谷寺
- 一 奥州會金嶮山惠隆寺
- 一 但馬一志郡穴見莊長谷村長谷寺
- 一 江戸上目黒五本木長谷寺
- 一 武州秩父郡長谷寺
- 一 肥前長崎町長谷寺
- 一 大隅霧島山長谷寺
- 一 石州鹿足郡本町長谷觀音堂
- 一 豊後國堅來村長谷寺
- 一 攝州武庫郡駒林村長谷堂
- 一 筑後國御井郡初瀬村圓通寺
- 一 同國同郡長谷寺

諸國新長谷寺

豊山玉石集

- 一 下總香取郡長谷寺
- 一 羽州青柳村長谷寺
- 一 下野高原長谷寺
- 一 同佐野郡長谷村長谷寺
- 一 備後甲奴郡本江村長谷觀音
- 一 武州豊島郡練馬村愛染院
- 一 上總國市原郡長谷寺
- 一 武州豊島郡谷原村長命寺



火之卷

御影所……籠堂……水向井……大黒堂……十六丈水精塔……御供所……白山
 権現……珠覺堂……不動堂……一切經藏……本長谷寺釋迦堂……三重塔……
 寶頭盧……本願院……地藏堂……見大師……或問……奥院……興教大師堂……
 ……興教大師略傳……陀羅尼堂……墓所……蓮花院……聖笈院……勸學院。

御影所 觀音堂西脇にあり、九尺四方の假屋を構ひ虚空藏を安置す、
 本願院より晩年僧を置て本尊の御影を出す。

籠堂 裏表三間 秀慶僧正是を建つ古は札堂の内に籠りたりと諸國よ
 り參籠の者年中絶ゆることなき籠らんと思ふ者は麓の里に宿を借り、
 宿主觀音堂へ案内し、堂下に願ひ籠る、されど女性一人は籠らせず、又女
 性を毎日七つ時より山下の宿へ下す、一七日籠るもの疊料として青錢
 五十文堂司へ渡す。

御影所 籠堂 水向井 大黒堂

水向井 観音堂の乾の方にあり、傳へいふ、徳道上人自ら掘れりと、小
さき井なれど、いかなる炎旱にも水絶ゆることなし。側に六字の名號十
三佛種子阿字など石に刻みて水手向の本尊とす。近年延命地藏の石像
を寄附する者ありて安ず古より遠近の者率都婆を立て、此水を手向け
眞言念佛など唱へて有縁無縁に廻向す寔に徳道上人の弘誓願観音薩
埵の大悲水なれば三途の塗炭を滅し、枯骨の衆生を潤すべきこと疑ふ
べからず、ある人の文月十五日に詣でて詠める俳句に

玉祭り手向ける水や袖の海

大黒堂 二方 観音堂と同時に建立せるもの、弘法大師御作の立像大
黒天を本尊とし、右に多聞天左に廣目天を安ず、山下に供僧の坊あり常
に一僧をこゝに置きて香花を供へしむ。按ずるに大黒を諸寺院に安ず
ることは、義浄三藏の南海歸寄傳に出たれば三國共に供養するものか、
大日經疏等を見るに梵語に摩訶伽羅翻じて大暗夜天といひ、亦大黒天

神といふ。曰く無明暗黒中長夜の諸障怖畏を除かんが爲に此眞言を説
くといひ、又茶吉尼能人の肝を取て食するが故に、大日如來降伏三世の
法門を以て、化して大黒神となり彼を呵嘖し玉ふと、理趣釋には摩訶伽
羅を大時と翻す。如來の惠光は圓明常住にして三世の別なし、故に大時
といふ、其義大日と同じ、故に三世無障碍の義といふ、又七母女天の主と
す、是行疫神なり、仁王疏良曰大黒神は闘戰神なり、若し彼を禮すれば其
威徳を増し、擧事皆勝つ、故に饗祀すべしと、又云彼の大力有りて、即ち人
を加護し所作皆勇猛ならしむと、神愷記に云く毎日飯を以て供養すれ
ば、毎日必ず千人の衆を養はしむと、又云く若人三年供養すれば世間の
官位職祿悉く與ふべしと、又云く大衆の食堂に置いて供養すれば堂屋坊
舍自然の榮え必ず涌出すべしと、或は摩醯首羅の變身となり、或は不動
明王の化身となり、又は梵天の部屬となり、又は閻摩天の眷屬なりとす、
皆大日如來普門示現の身なれば、世間出世間の願望何れか成就せざら

んや、三國共に是を崇め奉るもまたむべなる哉。高祖大師は殊に此尊を信仰まじまして、童幼の時土を以て此天を作るを遊戯としたまふ。傳記に見えたり。されば高祖の御作世に多く、彼の高野山奥の院大黒堂の本尊も高祖の御作なり。又廻り大黒と稱して昔より行人派三十坊の寺院を月替りに廻り玉ふ尊天あり、末資をして此天を信仰せしむ。高祖の善巧仰信すべきなり。又案するに神書に依て見れば、此天は即大己貴三輪明神なれば、我國民も其恩徳の深大なるを思ふて報謝すべきなり。毘沙門 須彌山四方の中北峰に御座す。三寶を守護し二世を救済し玉ふこと餘天に勝れさせ玉ふ故に世間ことに此天を恭敬す。

廣目天 須彌山西方に立たせ玉ふ護國利生の尊天なり。

十六丈水精寶塔 中に三世諸佛の舍利を安す。此塔觀音堂の後の山の地中に有り、金剛使者童子獨杵を以て山を穿ち、塔の五輪を行基菩薩に見せ玉ひしこと、本縁起に菅神の記し玉ふが如し吾人の目に觸るゝ

を得ざるも、幽界の事疑ふべきにあらす。昔當山を指して舍利山といふは傳記廣是が爲なり寔に南瞻部州第一の福田といひ起。又世人當山の觀音は殊に福徳を與へ玉ふとて福觀音と稱し奉る。此寶塔と御座の金剛寶座との功徳に依てなり。豊山の豊山たる、また所以なきに非ず。去ぬる享保の中頃かよ、紀州のさる在所に當山の所化勢州の某といへる僧寓居せり、其里の十四五歳なる小童草刈に出で、歸らず、處處を尋ねたりしも居らざれば狐の誑惑したるにやあらんとて、大鼓樂音を扣きて山林野澤隈なく探ねしかども見えざりければ、死したる者として其親など歎き悲しみける處へ四五日を経て、小韻うたひつゝ歸り來りぬ。人々驚き集りて今日までいづこに居りしぞと問ふに、彼答へて云く、我は伊勢參宮を爲したり、吾草を刈り居る時山伏如き者二人來りて曰く、汝參宮せざるや我等伴ひ行かんと。我いふ拔參りせんと日來心懸け居れども今何の用意もなしと。彼人曰く路用など我等與ふべし、いざ來

よとて手を引き玉ふまゝに具せられ行きぬ、彼人人此前き二三里迄送り來り、是よりは道も知るなれば急ぎ歸るべし、親親も嘸心勞し居らん、是を以て參宮の證とせよと、御祓二本給ひけりて、懐より取出すを見れば正しく新なる御祓なり。さて内外宮の有狀を語るを聞くに、大方違はず、又常人の知らざる處など語る。道筋など問ふに、行くに阿部の文殊へ參り、歸りに初瀬と三輪とへ謁でしより外は一向覺えず、いかなる宿に泊りしやと問ふに、一夜も人の家に宿りしことなしといふ。何を食せしやと問へば、二人の衆の休む處には何處にても、美しき童二三人宛奇麗なる器に酒餅菓子など種種持來て供ふるを、我にも分ちて給り、其味の美しきこと譬ふべきものなし。道に草臥はせざりしやと問へば、彼の人の後に從ひ行くに山もなく川もなく、登りも涉りもなく、心安く歩きしといふ。扱初瀬は如何なる處ぞと問ふに、山川の風景長廊下舞臺のすがた少しも異なることなし、只觀音堂より猶綺麗なる門樓宮殿有りしこと

いふばかりは常人の知らざる處なれば、皆人奇異の念をなす。彼僧其親及び童を伴ひ故にはつせに來たるに、大鳥井より町の内仁王門長廊觀音堂前に至れば、正しく此處なりといふ、さて觀音に額突き欄干に立寄りて語て曰く、此にて前に東西を見渡しける時二人の日向ふに見ゆる長屋の脇に造り並べたるを指さして、あれは十地の菩薩等の學問したまふ處ぞと仰せられき、さてその綺麗なる宮殿は何處にありしぞと尋ぬれば、此方へ來給へとて、先きに立ち觀音堂の後に至りて、茫然たる體にて曰く、我前に見たる結構なる宮殿は此處に有りしを今は見えず、その時に彼の山はなく、此に一つの美しき樓門あり、彼人等手づから門を開き玉ふて、此内は人の行く處にあらず、こゝより内をのぞき見よ、常の人の拜む處にはあらずとの玉ひしが、内を見るに、其高さ幾丈なるを知らざる程の宮殿ありて、金銀珠玉をちりばめ、鈴鐸幡蓋のすがた言を以ていふべからず、眼も眩むばかりなりしが、けふは見へずといふ。乃ち彼

の僧兩人を連れて温春法印を訪ひ、具さに其消息を語りければ、法印手を拍て感歎し玉ひむかし行基菩薩に金剛童子の拜せしめたること縁起に有り、實に凡人の拜む處にあらす、いかなる善因ありてか汝は是を拜したるぞや、いと羨ましきことなりとて繰返しくりかへし感歎し玉ひ、且つ十地の菩薩の學問する處なりとの玉ひしを思へば、當山に住する身となるは、ありがたきには非ずや、たれも心して寶山空手の悔みをなさざるこそせまほしけれと、いはれしを聞きて彼僧當山の靈場を捨て、何ぞ陋巷に歸り世塵に染まんやとて、それより直ちに在山勤念しけるごなん、こは三十年餘り前のことなれば傳ひ聞きたる者今猶多し、予此事を初登山の頃聞き侍りしが耳の底にこぼまりて忘れず侍れば、爰に記して他の信を起す一の端とせんのみ。

御供所 南北四間半 觀音の御膳供物調進の處なり。

白山權現 そのかみ當山に勝永房阿闍梨行圓といふ僧有り、天祿二

年七月一日加賀の白山天嶺の絶頂に登り、綠池の側に持咒し侍りけるに、雲光池上に登へて光の中に十一面觀自在尊妙相端嚴にして影現し玉へり、阿闍梨さては此神も十一面尊にてまします、爰に來ること因縁なきにしも非ずと、信心彌増さりけるに甲斐國八代郡の者とて賤げなる男前の日より籠り居て、同じくこの奇瑞を拜しけるは、神明の倏此男に託し行圓にむかひ指さし、や、大和泊瀬川玉の御垣清き流に心を洗ふ、大法師願くば我詞を聞き玉へ、我風雨をもいとほす、艱難をも厭はず、日日長谷に詣で、觀音の應用を佐くること怠りなし、然るに彼の山に我住處なし、空中には自界他方の冥衆大聖供養の爲に影向して透間なく、山内には往古より鎮座の神祇冥衆木石を卜して、一石一樹として冥衆の御座にあらすといふ處なし、願くは大法師山内の諸神に請ふて我居處をはつせの山に構へよと、眼前の奇瑞疑ふべくもあらず、乃ち行圓敬つて啓していはく、季世の凡夫薄福にして信根淺し、恐くは疑をなさん、

希くば其験を給へど神の玉く法師の言いと宜なりとて前庭に出
で天に向て氣を吐き玉へば又圓光となりて立ち登ること三丈あまり
其中に一の圓鏡有り飛び来て法師の左の袂に入る行圓深く敬ひ捧げ
て山に歸り觀音堂の坤に一の幽谷ありむかじより魔鬼常に住むで人
の到ることなき處なれば彼處を守らせ奉らんが爲に其處に小宮を作
り八月三日神鏡を遷し奉る其夜時ならずして大雪降り積ること一尺
餘貴賤耳目を驚かし神威の験きを歎みけるそれより後當山魔撓なし
靈抄記按ずるに此事は三國佛法傳記にも委しく載せたり此神靈威今
に新にして諸人渴仰す就中口中一切の病患を能治し玉ふといひ傳ひ
て或は齒齩齩齒舌の爛たる者など祈願を立て其報賽に楊枝を削り奉
納して常に社頭に充滿す。

瑛魔堂 四方 堂内唯瑛魔王一體を安ず故に俗呼んで獨瑛魔といふ
小野篁の直作なり篁は不測の神人身は朝庭に仕へながら神は炎魔王

宮に遊ぶ其事釋書等に委しければ爰に出さず篁は炎魔王の形を見て
直に作り玉ふ故に威嚴赫如として太怖畏すべし京千本通りにある
篁直作の炎王の像と一様なり按ずるに炎魔王は即素服雄尊なり舊事
本紀第七神事本紀上に九天六地を明す六地の中に上明地下冥地の別
有り上明地といふは即日月の照し玉ふ人間世界なり下冥地といふは
日月の照し玉はざる冥途黄泉なり其下冥地を明す中に寒塞地熱動地
水氷地鐵塞地燭火地荒風地等を明して所謂底根國雄神知在處なり
といへり即第一卷神代本紀にはゆる常熱國強寒國是を黃底と名づ
くといひ又火煽熱過氷凝寒過たる處といふ是なり佛教にいふところ
の八寒八熱等の地獄にあらずや雄神は素服雄尊底根國に放れ行玉ふ
事は神國の人童子迄もいふ所なり然れば即炎魔王なること分明なり
又第廿卷神皇本紀中卷上云垂仁天皇八十七年二譽津別命頓氣絶
天皇自見曰當活勿動遂二十日气出活焉即奏曰吾至奇國一廣野千

里高山万又困至大宮帝大神坐率入大殿曰汝知黄泉都吾荒魂在
 出雲昔天皇見神寶官女愛其麗誤手觸血穢後八日尙殘穢氣殊太
 受穢願集百神巫爲百度祓除清淨納入御藏諸寶勿再人視凡神寶勿
 女見女穢必失靈德神道失驗在於女獨道禁女愛誠有所以哉
 吾這寶物者是中國富根有吾此寶故八洲瑞中國富豐天皇祖尊者天
 照太神魂種御子吾气生兒何於吾無祖思忽祭吾者王之威亦緩三寶
 由緒天皇未知鏡天照太神形劍吾稜威形瓊豐食大神形天祖能生三大
 神以爲天地靈也以此三神德倚三寶保之爲天皇德天皇能受這旨
 以三此語傳後代故召汝傳天皇略抄
 いへり。そさのを尊炎王なること底根の國地獄なること自外往々見へ
 たり又依佛敎説いはく金光明經辨才天女品現爲炎羅之長姉といへ
 り辨才天は日分魂即天照太神なり天照太神は姉なりそさのを尊は
 弟なり然ば琰羅の長姉は辨才天女天照太神なり弟の琰羅は雄神なる

こと知ぬべし若かくのごとく見ざれば此經文いかんが解せんや神佛
 二敎の説懸かに合ふこと如是亦尊者をや又按するに炎魔王の本地を
 古來地藏尊といふ陰陽本紀上十八云次生三地神一知地號曰服狹雄尊一
 神亦名地襲尾尊(ツチツノオノミコト)あに直に地藏尊地襲尾尊同體同名な
 らすやあ尤も奇なる哉妙なる哉誰か掌を拍て歎せざるものあらん
 や又按するに地藏の眞言に炎魔吒炎魔耶等の句あり是又同體の證な
 り又地藏本願經には炎魔王衆讚嘆品あり
 不動堂 四間二尺四方 本尊二童子ともに三井寺開基智證大師の御
 作なり古記に曰く寛平五年の春智證大師觀音參籠の頃蓮花谷の池を
 廻りて三七日慈救咒を唱ひ經行し玉ひける時池中より不動の三尊出
 現し玉ひ多羅尾の瀧の下へ飛び行き玉へり其姿をうつし大師自彫刻
 し玉ふ所にして寔に類ひなき威怒の像なり山下に不動坊とて供僧有
 り日日香花を辨備す月の廿八日ごとに六坊衆番代に護摩を此に修す

珠寔堂 不動堂 一切經藏 本長谷寺釋迦堂 三重塔

一切經藏裏三間

唐本の一切經を安す寛平七年丁未八月水野石見守忠貞公の寄附なり經藏は牧野備後守成貞公黄金若干を喜捨して元祿四年卓玄僧正經營し玉ふ傳大士并普成普建の像及前机ともに東照神君曾て根來寺へ寄附し玉へるものなり右神君の御筆記有り中興專譽持來し玉へり。

本長谷寺釋迦堂

三間 人王四十代天武天皇御建立なり天皇未だ東

宮に立せ玉はざる時帝位の御望まじまじ當山の靈場なることを聞し召弘福寺道明上人に命じて伽藍建立の御願を立てさせ玉ひけるに果して帝位に登らせ玉ひければ速に金銅にて千體の釋迦像を鑄て堂を作り安置せしめ給へり神鏡廣傳記に大和國釋迦堂といふは即是を指せり觀音堂に先だつこと三十四年なり今の堂は觀音堂同時の御建立なり玉此中弘福寺今廢して高祖御遺告に載せ

三重塔

是亦右同時天武天皇御創建なり今の塔は豊臣秀頼造營片

桐市正是を奉行せり。

其規模小なりしと雖善美を盡されたる點に於て海内一の名を嘔はれしも惜むべし明治九年三月祝融に罹り一楹の烟と化す今は只礎石方三間のあひだに雜草の徒に繁れるのみ。(編者補記)

本長谷寺堂内賓頭廬の古像あり土人傳へいふ大悲閣造立の時此

尊者光を和らげ出て工匠役夫等に飯盛り與へ玉ふに百人の飯を以て二百人に喰しむるも猶餘り有りけりごぞ。

本願院 開山徳道上人幽栖の跡なりといふ。

地藏堂 二間 本尊は春日作り篋丸長者安する所の本尊なり長者は宇

多郡安田村の者當山觀音を信じて富貴を得長者の名を得たる事は靈驗記に具あり今に宇多山上に長者屋敷とて舊墟あり鎮守社猶残りて安田村の者歳毎に是を祭祀すといふ觀音堂の舞臺より正面に當て宇

賓頭廬 本願院 地藏堂

多山上に少く窪なる處見ゆ、是其處なり。傳へいふ專譽當山へ來り法幢
建てんと思ひしける頃、此本尊當山所化の僧と化現し、伊賀伊勢等の近
國を經歷し學徒を誘獎し、當山の海衆に入らしめ、みづから論席に就て
問答決擇し法化を賛けなすこと一夏、其間此像隠れて見へ玉はず。法席
卷てのち急ち本身に復り玉へり。こゝに於て諸人始て彼僧は此尊の化
現なることを知る、故に其翌年天正十六年尊像を修補し堂宇を新にし、
堂に續て寮舎を作りこれを地藏寮と名づけ、その端主をして日夕に香
花並法味を供へしむ、その當時より今に至るまで、大衆の一人に擬して
新入の者あらば入衆料を此本尊にも行奉る。あゝ專譽僧正の法幢を當
山に建つる諸佛冥道心を一にして力を合せ玉ふものと見つゝべし。あ
に尊とからずや、當山の學徒たらん者殊に信仰すべきは此尊なり。

兒大師 同堂内に安する高祖大師御童形の像なり。

或問 簀丸長者の名常に耳に觸るといへども、未だ其事を聞かず此

に出して人の信を催さしむ。このみの丸の事日本後記並に萬葉集の中
に簀丸といふ者あれど、同人なりや、將別人なりや、請其因緣具に知らし
めよ。

答名同じくして別人なり貴賤貧富異なるのみならず、時代亦相違せり
前には繁を思ふて略すといへ共殊に人の信心を激勵すべき緣由なれ
ば望に隨て是を今記さん人王五十九代宇多天皇の御宇寛平年中當國
安田村に基守といふ男有り、十九歳の時一日の中に父母に離れけり本
より貧者なりければ行末いかにせんとも覺えず、ことに親の佛事など
營むべき様もなかりければ、二親の菩提をも訪らひ我身の行末を祈ら
んとし、彼四十九日に當る日より月詣を始めけり、二三箇年の間漸して
兎角過しける程なれば、觀音へ一錢を奉ることもならざれども、月詣を
ば缺さず勤めけるに、後には身を隠すべき衣服なく、簀丸一つ覆ひ膚を隠
し、觀音の寶前に參り此度を以て利生の有無を知らんと思ふて、殊に至

誠の心を起し祈りける。其夜の夢に御帳の内より童子来て、小財を入れざれば大財を得べからずと告げ玉ひければ、基守いぶかしくおもひ大慈大悲の觀世音何の見る處有てか我に物を乞はせ給ふぞと申しけるに、童子重て因なければ果なし、汝小財を上つらずんば、設ひ利生に預るも命短かるべしとの玉ふと思へば夢覺めにけり。さて進すべきものも無ければ、只一つ着たりける簀を脱で正面に懸て家に歸りけれども、食すべき物もなく、歸り路の野邊に薯蕷の蔓のふとく肥たるが見へければ是を掘て食せんとて頓て掘けるに銅の壺一つ有り中を見るに沙金満ちてありけり、是觀音の賜る物なりと悦び家に持歸りぬ。察に人に此由を尋ければ、昔富める者の倉の跡にてぞありけり、それより國中第一の富貴の者となれり。初つ瀬の觀音へ簀を捧て長者になれり。さて人みな呼んで簀丸長者といひける。親の十三年に當りける時堂塔を立て、千僧を請じ供養しけるにも當寺の僧を第一として導師は當時の智願

上人勤め玉ひけり供養の會場の上に二人の天人下て蓮花を以て堂塔を供養し、我等は是汝が父母なり、汝が追福の功德により觀音の御方便にて、今既に天に生れぬといつて雲を分て昇りけり。今の安田の塔是より本の堂塔は雷火に焼といへども、後に富める人ありて重て其跡に本の如くに造りて今に有り實に親を資け身を救ひ玉ひしこと尊とし哉。已上靈といへり。只今は其後に造りしといふ塔もいつしか朽はて、彼の里人に尋ぬるもその跡すら知るものなし。宋僧傳十一念淨心是菩提勝造二恒沙七寶塔、寶塔先盡碎爲塵一念淨心成正覺、といへり。七寶の塔は貧しき者の立ること能はざる所なり、富者信を起して立といへ共終に塵となり跡かたなし、一念の淨心は發さんと思はゞ貴賤貧富誰とて難からん、たゞ祈るべきは此一念の淨心ぞかじ。

奥院 むかし淨阿上人とて道心堅固なる遊行派の念佛行者あり、此處に草の庵を結んで露の身を宿し、明れば佛の御名をとなひ心を西方

に傾け終に人王九十七代光明院御宇曆應二卯年（九十四代後元二年紀元一八八九年）六月二日端座合掌して眠るが如く往生を遂げられけり。曾て手づから自身の壽像を造り置きしかば、是を其草庵の本尊として道心者など往來せり。根來の法流を此山に傳へ來てより、假に興教大師の像を此中に安置して祖師堂と稱せり。尊慶僧正の時、陀羅尼堂を前に造り、英岳僧正の時、根山の菩提院を移して菩提院と號す。

興教大師堂四面 興教大師四十二歳御自作の像を安ず。其岳僧正の持尊なり。小池坊に主となりて後此堂に安じ奉り、今の堂は享保十八年惠海僧正の御造立なり。專譽僧正像 此堂内に安ず。當山中興の師なり。具に小池坊の下に記す。

興教大師略傳 名は覺鑣字は正覺人推尊して密嚴尊者といふ。人王七十三代堀川院御宇嘉保二乙亥年肥前國藤津郡能美庄に生れ玉ひり。其處に誕生院あり。元祿五年備前太守鍋島直條公石碑を建て、是を不朽

に傳へ玉ふ。泊如老僧正其銘を撰す。瑞林集に載せたり。桓武天皇五世の孫平親王將門の苗裔父は伊佐平次兼元とて武略天下に隠れなかりき。尊者稚心に思ひらく、我父は天下の豪貴にして更に右に出る者なしと、八歳になり玉ふ時、領守より年貢催促の役人下て其家に入る、兼元禮を正し敬をなす。尊者異て兄に問ふて曰く、彼は何人なれば敢て我父を輕んずるや。兄の曰く、彼は領主の役人なり、我父威勢有りといへども領主の命に順はざる事を得ずと。又とふ天下に領主より貴き者ありや、曰天子といふ有り。是我日本國の王なり。又とふ天子より貴きはなしや、曰神天有り。天子尙命を承て國を治む。又とふ神天より貴きはなしや、曰佛世尊あり。とふ佛世尊より貴きはなしや、曰佛より勝りて貴きものあることなし。故に無上世尊といふ佛に三身あり。法身を以て最上とす。其教に顯密あり。密教を以て甚深とす。とふ世に其佛位に登れる者ありや、曰剃髮衣を染め精進修行する者は必ず其佛位に至る。問其人は何れの人にか

ある。曰紀州高野山に弘法大師入定の地、彼處に定尊といふ閑梨是正しく其人なりと尊者聞きて喜びて曰、我當に其無上世尊となるべしとて是より葦履を茹はす香を焚き佛を禮するを常の事としたり。其發心の初めかくの如しむべなるかな。遂に密教中興の祖師となり傳法一流の淵源を開き玉へる事、十三にして仁和寺に至り、十四五歳の間南都に出で、法相三論華嚴等の教旨を學び玉ひ、十六の御時、仁和寺成就院寛助大僧正に就て剃染し、廿歳にて高野に登り、明寂閑梨に隨て密教學習し、廿二歳より廿四歳の時迄、八ヶ度求聞持の法を精修し、其後千日の護摩を修せらる。其中音語を禁ず、依て人千日無言の行といふ。廿七歳護摩すでに畢て、醍醐に登り、賢覺僧都に見へて五部の灌頂を受け、並に聞持成就の秘決を授り、明年野山に歸て重てこれを修し、果して大悉地を得一切智を發得し玉へり。三十七歳の時、鳥羽上皇の御願として野山に於て大傳法院を建て、密嚴院を作り、常に此に住し玉ふを以て、人貴んで密

嚴尊者と稱す。四十一歳の時、興隆佛法の能事既に畢て、傳法院座主職等を眞譽阿闍梨に譲り、自證の悉地を得んが爲に、發露懺悔文を製し、自懺し人にも誦せしめ玉へり。其詞親切にして、言言句句末資の砭針にあらすといふ事なし。故に峨峰月潭禪師讚して曰く、一幅懺文無盡義事理貫通自成。章瀝胆披肝悲願切讀來、何人不断惶一と。末弟たる者たれば、軌とし従はざるべけんや。三月廿一日より恒に道場に座して、堂外に出づることなく、弟子一兩人の外、他の出入を禁じ玉ふ。其間孔隙より窺ふに、不動尊となつて迦樓羅炎の中に座し玉ひ、或ひは滿堂澄水凝滯するを見る。四十六歳の御時、六群の輩、これを嫉み相議して曰く、新院を營みて本寺に越え、高祖に配して定扉を鎖す。當に定室を踏み破り、枯骸を取り出すべしとて、兇徒數百人密嚴院に競ひ入り、室中を周眺に尊者は御座せずして、唯不動尊の二像のみあり、奸黠の者有て、是れぞとて、矢鏃を以て一像の膝をつく、木にて雕りたる像より血流て地に至る時に尊

者心中に深くこれを悲み玉ふて定を出で本身に復し玉ひければ兇徒等其威徳に恐れて戦戦として逃げ歸る茲に於て尊者徐歩して根嶺に入り玉ひり今根山に在て錐鑽不動と號して靈驗揭焉なる尊像是なり。此事世俗誤を傳ふるに記す。幾ならずして又鳥羽上皇の御願として根山に於て圓明寺を始め佛殿僧坊數十宇を新に建て、山を一乗と號し寺を圓明と名づく尊者恒に圓明寺に住し阿字觀を凝し玉ひ七十六代近衛院御宇康治二年壬戌冬十二月十二日恬然として寂し玉ひぬ御年四十九歳にぞならせ玉へける陀毘の時五智房融源閑梨棺に對して理趣般若を誦す第二段に至て棺中に首の句を唱ふる聲聞へければ源公和してよむこれより經の終りまで段段是の如し諸人驚歎せずといふことなし是に依て根嶺の風を傳ふる者は一の句を除くを以て式とす。かゝる奇特を見れば曾て興福寺の僧珍也尊者を毀りける夢に夜叉羅刹衆各刀杖を以て胸に中て汝正覺上人を誘す其罪輕からずとて呵責

せられ惶怖して汗を流し頭を叩て憐みを乞ふはるかに見れば尊者は白蓮花の上に端座し神天蓋を捧げて侍衛し八幡大菩薩衣冠を整ふし尊者を禮拜し歸命金剛祕密佛靈地合法久住者世出世間利群生引導三有及法界といふ偈を説て讚歎し玉ふを見けるといふも理りならずや。又太上皇數百蓮花座の瑞夢を感じ玉ひ忠通公豫め青龍和尚の再誕なることを識り春日明神膝に懷きて大法器なるを歎じ我法を識ることなかれとの玉へ多聞天王親り現れて如意珠を授け講讚の文を乞せ玉ふなど奇跡靈瑞具には別傳及年譜等に有り今こゝに十が一を千百に取て略して記するのみ尊者滅後根嶺隆なること四百八十二年百七代正親町院天正十三年(紀元二二四二年)三月兵火此現岡に燃えて玉石共に摧かれ清衆淨侶法財を齋み持て各四方に離散すあゝ法水時に乾きける歎將た運數こゝに定りける歎彼唐人の梵宮だも亦銷竭す人世轉悲に堪へたりと作りける詩を吟じて嗟かぬ者はなかりき然れ共佛

天猶我法を守り玉ふにや僅一年を隔て、天正十五乙亥年專譽僧正三密の法幢を豊山に立て小池坊と稱し慶長元丙申年玄宥和尚五部の教網を洛東に張て智積院と號し共に眞言新義の本山となり根岳の宗風彌四方に傳はり尊者の德輝益一天にかじやきぬ滅後五百四十八年を経て元祿三庚午年六月小池坊僧正卓玄智積院僧正信盛相議して表を抗げ美謚を請ふ其上表の文は運徹僧正是を草し玉ふ是又瑞林集運徹著に入れり同冬十月に至て百十四代帝王東山院勅して興教大師の謚を賜ひて高祖大師に追配せられ玉へり。

誠に動けばいよ／＼香こといへるが如く盛徳の致す所豈貴からずや彼内大臣實徳公の根來傳法院に詣で玉ふて高野山別れて來しもことさらに法を傳へん世々の爲かもとよみ玉へるを思ひ合せ見れば根嶺の廢するは實に廢するにあらず一源分れて二派となり廣く衆生を攝化し玉はん方便にもやと覺え侍る。

陀羅尼堂 横三間 堅五間半

興教大師堂の正面に三四間隔て、在り、

其間廊を構ふ毎年十二月十二日大師の偉日なれば十一日の曉より十二日朝まで萬指の大衆を十二時に分配し一時に百餘人づゝ晝夜不斷に尊勝陀羅尼を誦して法樂をすゝめ奉る根山よりの舊風なりといふ、依て陀羅尼堂と名づく堂の西南の隅に定阿上人像を安す是古の草堂に安する所の像なり其外彌勒佛の像等有り菩提院の内道場なり。

墓所 大師堂の後より地藏堂前の門際まで數百歩の間道の左右

當山の墓所なり又竹籬一重を隔て、山の嶺迄初瀬の里の終の住家なれば空しく烟のたちのぼらぬ日とてなく年々に古き墓は跡なくなり、月々に新しき率都婆こそ立添ふなれ當山中興大檀那大納言秀長公の墓を始め代々化主の石塔中興以來山内にて入寂せし人々の石塔みな此處に在り累々として幾百千といふ事を知す青苔むして傾けるあり金字鮮かにして新なる有り其中に我親しき友だちなどの墓も年

年に數へ侍ること多くなり勝り時に緩歩し見るに早く着慣れし旅
衣法の爲とて遙々そこへ越路の人もあり、かくならんとは知ら
ぬ火のつくしがたの人もあり、十が八九は東西南北の遠つ方の墓なれ
ば尋ぬる人もあらずぞと思ふ、誰訪ひとてのしるしの石木の下露にぬ
れたる様心なき身にもいとほかなくぞ覺え侍る。古きは知らず、我覺え
しばかりもつくづく思ひ見るに、多くは年若くして而も健なげなりし
人人なり、實に古墳多是少年人といひしは、さることこそ、おのれは稚
より病多くして三十四の坂はよも越えじと、我ながら思はれて頼み
がたなき露の命、いかにしてかけふまでは消え残りけん、心悲しく覺
え侍れども誠をいたして、先きだつ人のなき跡をとむらふ心も出侍ら
ぬは、いかならん罪業にやと、いとかなしく口惜く覺え侍る。又ここにあ
はれに覺ゆるは、文月中の五日の頃なり、年ふりたる石塔にも燈かゝげ
種々の供物など有るを見ては、いかなるゆかりの人や、慈に其なきあ

を訪ふぞと頼もしく、また新たなる石塔にも檜一枝の手向もなきを見
れば、跡忍ぶべき人もなきにやと、餘所ながら心ぼそくこそ侍れ、世に在
りし時は、いかに憎しと思ひし人なりとも、かゝらん後に一遍のゑかう
にもあづからば、さこそはうれしがるらめ、たとひ身にかへてもと、いと
おしく思ひし者なりなど、思ひ出で、跡とふ事もなくば、返りて憎しと
こそ思ひめ、實にや夢の世に幻の身なれば、玉の臺も何かせん、とてもか
くてもよしや世の中のこと、はきたの翁にならひて愛しきにも憎きに
も、都て心に留むまじき事なり、王公大人の墓すらも、物變り星移りては、
鋤かへして田となし、跡かたもなくなり行くならひなるぞかじ。とても
徒に朽はつる身ならば、かゝる靈場の土になすこそ朽さぬるにこそや
ならんと、有り難くこそ覺ゆれ、西方淨土有縁の處といへば、順次の往生
を遂げたる者も多かるべし、都率天上觀音院ときけば、此處即ち内院と
覺の眼開きたる人もあるべし。さらすとても龍化三會の曉には彌勒慈

尊も高祖大師もよもや見捨ては置き玉はざるべし三災壞劫にも動せざる秘密莊嚴の土なれば田となり畑となる氣遣ひもなき處にこそ。

蓮花院

此寺の濫腸は孝謙天皇春宮に在せし時彼の蓮花池の靈威を聞き召し行基菩薩に勅して此池は密法相應の池なりとて五智の如来を彫造せしめ圍二丈六尺の寶形の圓堂を立て安置せられ重祚の後天平神護二年圓堂の上に三間四方の堂を作り神護慶雲二年九月彼の天人下て蓮花を洗ひしといふ事に寄せて蓮花院と號し百廿町の免田を附し十二人の供僧を置き玉ふといへり略抄此寺廢して幾年なるを知らず今按ずるに昔は今の勸學院の處なるべし彼の池邊なるが故に今の蓮花院は武州東山房入寂の頃其餘長を以て春の端寮に附し蓮花院の舊號を爰に名づけたるなり。

聖笈院

興教大師自ら負て信貴山朝熊岳など所遍歴し玉ふといふ笈を安す其中に大師の小像を納む此笈は東奥相馬の賢真といふ僧

根山廢して後當嶺に負ひ來るが故に常盤の端寮に安じて當初より今に至る迄相馬の學徒傳へて爰に居住す聖笈院の號は相馬覺津黄金若干を附て長く供料としける時信怒僧正其芳志を感じ院號を給ふとぞ。

勸學院

豐八間半 本尊不動尊ス慈覺大師御自作英岳僧正之ヲ寄附

大衆講學討論の會場なり

月次廿一日の御影供十二日の打集ぬ大般若轉讀等此院に於て勤む寺の前に方池有り是所を蓮花谷の池といふ。むかし天人下りて蓮花を洗ひ又多羅尾の瀧に立せ玉ふ不動明王出現の靈池なり種々の奇異有りしこと靈驗記に記すが如し今も此水を汚しなごする者罰を蒙ること時時有り故に四邊を石にて疊み三方にくぎぬきをまし石燈籠を安じ毎夕燈を點す古より菡萏池にみつれども花咲くことなく夏の間立葉蓋をさゝげて露の珠をうけ觀る者をして自ら心を清らしめ妙蓮不染の理を悟らしむ近年花開くことあり不吉

の兆なりとて根を掘り捨てしとなん、今は絶えてなし惜ひかな。

(信恕能化加筆)

佛閣神社由來、視而驚眼予久住山不知山之靈瑞、披讀此卷、喜悅如拾玉我然他亦爾元照律師云救將來不如著述、可信斯言。

長谷寺八景

楠田宗健

雲井宿梅 古里の昔の春を忍べさやただかに匂ふ軒の梅が香
 尾上櫻花 立ちつゝく雲がさばかり初瀬山尾上の櫻今盛りなり
 初瀬山郭公 時鳥暫し語らへ尋ね來し初瀬の山のかひさ思はむ
 古河行螢 古河や水の流に數見えて照す螢の影の涼しさ
 八色岡紅葉 朝夕の露も染なす岡の名のやしほ色濃き秋のみぢ葉
 愛宕曉月 小泊瀬やこゝに移して有明の月は愛宕の峰にさやけき
 嶮坂薄雪 初瀬山阪こえて行く旅人の跡あらはなる今朝の初雪
 古寺晚鐘 初瀬山谷吹のほる山風に尾上の鐘も聲むせぶなり

風之卷

鐘樓……三百餘社……馬頭夫人社……八幡大菩薩……住吉明神社……寶篋印塔……藏王堂……貫之梅……石橋……漱鹽石……陀羅尼塔……三部權現等……春日明神……橋宮神……道明上人石塔……仁王門……長廊……小池坊……護摩堂……表門……稻荷社……新義真言統括之印章……請堂行人之事……來淨來言被官之事……安養院……二本杉……長勝寺

鐘樓 尾上の鐘といふ、定家卿の歌に「年も経ぬ祈る願ははつせ山をのへのかねのよりの夕ぐれ」といふ是なり。又未來鐘といふ昔山城國木津里に野慈といふ貧き人有り、宿善にや容儀醜からず、信心も深くして當寺に月詣して貧きことを歎きける。折節山の鐘少し聲幽なりければ人々鑄替ばやなどいふを聞きて、此男宿坊の慈願上人に向て我願ひ成就せば、當に洪鐘の聲の大なるを鑄て進せんといひけるを、傍人聞きて、いと貧しげなる男なれば實しからず思ふて、未來の世にてやといふて

鐘樓

咲ひければはせの者共、皆此者を指して未來男とぞいひける此男彌心
憂く思ふて月ごとに参りて大聖を責奉りけるに、三年を満しける長和
三年の春頼母敷夢を見て、急ぎ下向しける道にて、飢にせまり行きやら
で休らひける時、近江國藤原惟憲といふ者、長谷へ参られ在原寺にて幕
引き廻し破子なんぞ用ひける側へ立ち寄り、耻くは思ひけれども今は
歩むべき力もなかりければ、忍んで物を乞ひけるに、呼び入れもてなし
て、左右物語りなごし侍りけるに、大聖の御方便にや、汝若し人に仕へん
とや思ふと問はれければ、まかるべしといふ。それより直ちに具して下
りけり、貌形いと清らかに、才も賢ければ、身近く召仕はれ、頓て近江國司
代となり、後には止六位に登り、栗田助貞と名を改め、國司の内にて優優
敷者にぞなりけり、則立願しける鐘を鑄る時、誓願して曰、大聖の加被に
依て我既に榮華身に餘る願はば、此鐘形も聲も思ふ如くにして、大聖の威
光を響かし、聞く者をして、悉観音の益に預り、二世の願を満さしめん

誓願空しからず、思ふ如くに鑄立し、寛仁三年三月十八日、百僧を請じて
供養しけり、其諷誦文には、吉瑞なればとて、我名の助貞を指置きて、正六
位下木津未來男と書付け、誠に甚深の願力に答ひけるにや、供養の夜
の夢に、長谷山内の虚空に、貴賤の諸人及び異類、異形の畜類など、皆蓮花
に乗て、充滿し、西方をさして飛び行く、其中に我師の慈觀上人少し、後に
下り玉へば、是は何事ぞと問ひけるに、汝が甚深の願力に依て、此鐘の聲
を聞くものは、皆是の如く、西方往生を遂ぐるぞと告げ玉へければ、歡喜
すと見て、覺めけり、一人の願力に依て、無數の人畜を救済すること、最有
り難き事なり、今の鐘は、文龜元年辛酉年十月攝州住江郡吾孫子助太夫と
いふ者の寄進せるなり。
當山鐘を撞く事、晨朝巳時、入相、夜丑時とばかりなり、自餘の刻は、貝を
吹くなり、貝を吹くことは古よりして、久しき事なるべし、清少納言が枕言
葉にも、當山時の貝のごと見へたり、古歌に「けふもまたむまのかいこそ

吹きにけれひさしのあゆみ近づきぬらしと、あれば古より他處にても
時貝を吹きけるならん當山丑時につく鐘を心經鐘と名づく、橘宮神の
扱苦與樂の爲に心經一卷讀で、一つづつ心經十五卷讀むなり、是は
山内の淨衆にも此かねの聲を聞き眠覺めん者は同く心經をよみて法
樂せしめんが爲に、良譽僧正始め玉へりごぞ。

千歳集 雜

有 家

はつせ山入相の鐘を聞く度に昔の遠くなるぞかなしき

詞花集 秋

兼 昌

夕ざりに梢は見へず初瀬山入相の鐘の音ばかりして

新勅撰 雜

入道二品親王道助

はつせ山嵐のみのちの遠ければいたりいたらぬ鐘の音かな

玉葉集 秋

贈從三位爲子

泊瀬山檜原の嵐鐘の聲夜ふかき月にすましてぞさく

續千歳集 雜

慈 鎮

鐘の音を女と頼んで幾夜かもねぬをならひの小はつせの山

新拾遺 集

權大納言道守

きかでたぐあらまじものをきふの日もはつせの寺の入相の鐘

いたづらに此世もさてやはつせ山かねの音にもおごろかぬ身は

當山の鐘をよめる歌數十首あり、擧げてしるすべからず。

又毎日四つ時に出仕の鐘を撞大悲閣にて法樂の修法等ある事は、藏

王權現金峰山より毎日四つ時に、當山大悲閣へ參詣し玉ふ故に其刻に

合すとなんいひ傳へたり、しかれば四つ時は別して山上山下の慎むべ

き時なり。

三百餘社裏一間半 銅瓦(惠海僧正代葺替)御建立なり。是は日本國中

より日夜當山へ影向したまふ諸神を一處に勸請し奉るなり。

馬頭夫人社 本朝人皇五十七代陽成天皇御宇に當て、大唐第十八世

三百餘社

の王を僖宗皇帝と稱す。其第四の后は文宗皇帝の御孫玄成太子の御娘なり。宿業にや有らん顔長く鼻の形頗馬に似たりければ、馬頭夫人とぞ人人申しけり。御形はしかあれ共、御心や艶に情深くやおはしけん。帝王二心なく愛させ玉ひけるを餘の后等嫉合て、いかにしてか此后のかたはなる姿を顯はに帝に見せ奉て、御中を遠ざけ奉らんと謀り、帝を始め諸の后等打集ひ七日七夜の花見の宴をなし玉へと、后等一同に帝に奏しければ、帝王聞し召今十日餘りも過ぎて花の盛りなる頃、此遊びをなすべしと宣下せられけり。后等悦んで我先きに粧をなしける、扱彼夫人は如何にして我醜き形を顯さんと思ひ、また出でざらんもはづかしき事なるべしと案じはづらひ玉ふ餘に、穀城山といふに神變威験を具して、満てがたき人の願をもかなへる仙人有り、聞き玉ひて密に召して仰せ合されけれ共、前世の業障にて生れつかせ玉ふ御形なれば、仙術の及ぶことにあらず、若は佛神の御方便をこそ祈り玉はめと申す。さて

は何れの佛神が浩る事をも叶へ玉ふべきやと御尋ね有りけるに、仙人答て申しけるは、我昔日寶誌和尚と共に、通力を以て三千世界を巡り見し中に、日本國の中和州長谷寺の觀音は、徳道上人といふが、極位の菩薩形を凡夫に同ふし、諸佛冥道の教を受け、功德成就の地を開き、廣大利他の願を發し、普門示現の尊容を顯はす、其上山内みな密嚴清淨の佛土にして、應用三千世界に満ち、眷屬は悉く大悲擁護の聖人にして、化儀を十方國土に施す、是累劫の間、大聖化益を垂る砌なり。其中觀音金剛寶石に座して、廣く衆生を度し玉ひ、驗徳世に勝れ玉へりと、申しければ、即ち教に隨て、道場を構ひ、七日七夜丹祈を凝されける、其満する曉夢とも現ともなく、東方より貴き沙門紫雲にのり來り、香しき瓶水を顔に洒がせ玉へけり。扱は感應に預りぬと悦んで鏡を取て見れば、百の媚面にみち奇しき香有て、端嚴無雙の容となれり。かくて三日過ぎて、彼の宴に出させ玉ふに、そのやむごとなき粧を見奉りて、上下擧て驚歎せずといふこと

なく憎み嫉みし后等も返て親子の配をぞなし玉ひければ帝の寵愛彌増し玉へり是皆日本長谷觀音の御忍徳なりとて大唐乾符三年丙辰貞觀十八年六月十八日明州の津に出で諸の寶物を當寺へ贈り其寶物は佛具錫杖如意鏡鉢金剛鈴玉幡牛玉法螺虎皮孔雀尾此等十種の物並に金札に願文有り其詞云

稽首大悲長谷山

本誓悲願已無異

請願納受我戀志

重誓我具身神通

娑婆能化觀世音

難救能救大悲尊

海中無難着彼山

必往守護其伽藍

と刻みて石函に入れ表に奉獻日本國大乘相應功德圓滿長谷豐山寺と書きて小船に乗せ海に浮べはるかに東方に向て祈念し船を放つ天龍其戀志を感じけるにや順風はげしく吹て一日夜の間に播磨國明石浦に著く其所の郡司代秦友麿といふ者記文に依て貞觀十八年六月廿七

日當寺へ送り來せり其所以を知らざれ共堂内に納め置けり六年を経て元慶五年人皇五十七代陽成天皇紀元一五四一年三月當國十市郡土師時躬といへる者十歳なる童を連て當山へ參籠しける時に馬頭夫人此童に託して上件の事一々語り我は今日より永く此山に住して護法善神となるべしと云其言に隨ひ即ち鐘樓の東脇に社を作り勸請せり是を記して大安寺の惠尋法師入唐の時唐土にて尋ぬるに聊も遠はず彼時躬の子に託したりける日夫人は隠れ玉へけるとぞ源氏物語に唐の後十種の寶物を初瀬に贈ると書ける此事をいへるなり略抄此神靈感今に新にして祈り求むること叶はずといふことなれ故に月ごこの十口の病ひ面上の腫物其外疣黒子など不吉の相都て頸より上の病いかなる難病なり共誠を致し祈つて愈すといふことなれ故に月ごこの十七夜には遠近の少長男女燈を供へて光山谷を輝かす小池坊寶藏に馬頭夫人の鑄像有り足下に僖宗皇帝の後妃觀音薩埵化女等の十九字有

り、彷彿として餘は分明ならず。依て見れば馬頭夫人も亦是れ當山大悲者の化身なり。あゝ難有哉。當山大悲者いかに大悲深重にましませばにや、遠き唐の人までを救ひ、佛道に引入れ玉はん爲に婦女の身を現じ故に醜き形を受け玉ひて當山不思議の徳を顯し信を發さしめ玉ふこと、彼吉備公觀音の加持力にて、野馬臺の詩をよみけるより始て、此等の靈感唐朝は勿論海外の邊國までも當山の威験隠れなかりしにや、大梁の大祖皇帝は當山の守護に依て帝位に登り、新長谷寺を建て當山を勸請し、天臺山の堯惠禪師は如意輪の告を蒙て、萬里の蒼溟を渡り此山に尋ね來り、往生極樂の素懷をさげ、新羅國照明王の後は、當寺に祈請して刑戮の難をのがれ三十三種の寶物を當山に贈りしことなど、詳に靈驗記に戴せたり。されば代々天子の御願文にも、濫觴を日域に開くとも、奇瑞をば漢室に表はすとも、異域の風に傳とも、書き玉へる寔は是當山の靈瑞和漢に秀でたることを感じ玉ひけるにこそ。

八幡宮 八幡大菩薩は人皇第十六代應神天皇なり。生れ給ふ時白幡四、赤幡四、天より降るを以て八幡丸と名づけ奉ること世人みな聞き知る所なり。人皇廿九代欽明天皇三十一年に豊前の宇佐に始て鎮座し玉ひ。舊事本紀、聖武天皇天平廿一年に毘盧遮那大像を拜し玉はんとて東大寺に遷らせ玉ひ。水鑑桓武天皇延暦元年には我を大自在菩薩と稱すべきよし託宣し玉ひ。水鑑按ずるに三代實錄等菩薩號を以て。平城天皇大同四年には高雄山に影向有て高祖大師と密教を唱和し玉ひ。諸社根嵯峨天皇弘仁十四年には東寺に現形して、大師に鎮護の事を約し玉ひ。東寶 按ずるに高雄東寺共に八幡宮 清和天皇貞觀元年には行教和尚に隨て石清水に遷座し玉ひ。扶桑略記、宇多天皇寛平年中には御袈裟念珠香爐等を納むべきよし託宣し玉ひ。其外傳教大師に袈裟を授け、開成皇子に泥金を賜るが如き毛舉に遑あらず、其三寶を宗重し玉ふこと仰ぎ見るべし。殊に我大師には御親深く諸處に隨住し玉へり。故に高祖曰我常

に本朝の諸神と契約のこゝと有り、入定の後神社の中に在て國を守り民を利すべし。依之見れば日本國中神社の中に都て高祖大師御座。就中八幡大菩薩は我に約して曰、上人と我とは影と形との如し、何國にもあれ上人の住はん處には我も往て住むべしと、先年高雄山及乙訓寺に於て法談の砌、たがひに寫し留めし影像各其地にあり、敬拜して恩を報すべしと、兩所の靈像今に靈驗揚然にてまし。さればにや弘仁年中大師を東大寺の別當に補せられし時、八幡宮影向有て御法談の席に、天竺にて善無畏三藏に眞言教を授けしは我なりとの玉ひけるとなん。善無畏受法の師は龍智菩薩なり、宜なる哉密教を愛し大師と御契約深きこと、依之八幡と大師と御同体の義有り心を付て見るべし。加之人王九十一代後宇多天皇弘安四年蒙古襲來の時、蒙古は元第四主なり、兵船して來る、俗に蒙古高句麗とて怖る。西大寺思圓上人に勅して、男山八幡宮に於て一七日を期して夷敵調伏の法を行はしめ玉ふ時、滿日に當て

山岳動搖し、寶殿自ら八字に開き、高聲に告玉はく、思圓上人修法既に成就し日吉春日我を始とし、國中の諸神みな太宰府に進發す。早く降伏の蕪矢を放つべしとの玉ふ御聲の下より、弦の音高く天に響きて、大いなる蕪矢一筋白旗三流光を放て、神殿より出で西方に飛び去る。會中の諸衆未曾有なりと感歎しける時に當て、西海浪高く騰ること二十餘丈、數萬の兵船一時に海底に滔没しぬと、かや、僧寶傳八幡の神力密教の威驗傳ひ聞くすら耳目を驚かすのみ。又初め宇佐に鎮座したまひし時の御託宣は言語の絶えたる有り難きことなれば、此に擧て以て神徳を顯はし、法樂に供へ奉るべし。舊事本紀第三十卷上、帝王本紀云、欽明天皇三十一年四月戊戌、豐前國上表而奏曰、三月十五日神託三三歲、女子曰、我是譽田八幡丸也。我本日輪天荒魂也。天照太神者一身有四形、二者姫神在日輪中、一駕九頭龍、二者彥神懷乎日輪、駕四頭馬、三者媛神在日輪前、駕七頭猪、四者童神在日輪、光限二駕、二頭狸、今在五瀬國五十宮、(天照皇太神也)日神

者日中在姫神吾皇母太神者日前在姫神也在熱田宮武大神(日本武)在ニ
光限童大神也吾是懷日彥神也根元身者在南海聖仙山中先天地住或
西極國(天竺)或者辰旦(支那)垂迹神明還顯于此早奏朝廷造新靈宮當
奉崇祭我荒魂神我應守護日胤寶祚神產國界我有二神變出天極國
其天真神聖轉輪大王等又出辰旦催轆勝軍大王等變愚癡民成智德
民變暴惡人成仁善人我先現耳天皇大歡任神勅立大殿于時大神
成大靈光日輪而鎮座略此中到南海の仙山といふは是補陀落山か
然則本地觀世音菩薩なり當山に鎮座し玉ふも殊に由あるをや天に在
ては日輪と現じ萬國を徧く照し玉ひ地に於ては迹を三國に垂れ光を
和らげ衆生を濟度し玉ふこと尊むべし仰ぐべし或は問世にいふ本地
は彌陀如來とあに相違にあらずや答彌陀觀音唯因果の差のみにて實
は一體なり極樂淨土にては彌陀と稱し娑婆世界にては觀音と號す何
れも相違にあらざること知ぬべし。

住吉明神社 黄泉本紀を按ずるにいざなみの尊火の神炬著塵命を
産み玉ふ時焼かれて崩し黄泉國に往き玉ふをいざなみの尊したひ行
きて見玉へ汚穢國なりとて急ぎ歸り日向國橘之小戸櫛原に向て被除
じ玉ふ時若干の神神を化生し玉ふ中の底筒男命筒男命表筒男命な
りこの三神同體にて住齊元國守寶祚治風塵質風俗故此神盛則
寶祚盛此神衰則隨寶祚衰世盛衰狀唯在此神住吉三所前神なりといへ
り野山名靈集に云く高祖大師曰我と住吉明神と共に利益を誓ふて互
ひに寫すところの影像彼社に在り我入定の後彼殿に在て衆生を利す
べしと行狀記に云く村上天皇應和元年長者僧正寛空天台座主延昌
同時に參内有りし時勅定に云傳聞く弘法大師は高貴徳王菩薩權に化
生して三密の法門を弘通し我國を利益すと亦住吉の明神も徳王菩薩
の化現なりといふしかれば大師と住吉とは一體分身なり神となり祖
と現じて共に我國を鎮護す廣大の恩徳尊とぶべしと按ずるに古今著

聞集に云、住吉は四所おはします、一の御前は御託宣に云、我は是兜卒天
高貴徳王菩薩なり、國家を鎮護せん爲に迹を墨江の邊松樹の下に垂て
風霜を送る、時に苦を受くること有り、北の方に當て一の勝地あり、公家
に奏し一の伽藍を立て法輪を轉せしめよと、此託宣に依て神宮寺をば
建立せられけり、以上名靈今按ずるに大成經第三十三、四十四云、住吉太
神巫に託して曰、吾高貴徳王菩薩也、我三神分身在天地海、在天高貴産
靈尊、在レ地大已貴尊、在海彦波斂武尊、別身別神、本我也、皇太子當知文、此
中に高貴産靈尊とは天の神、六の世獨化天神にて始て、五行相生之道を
踏分け玉へり、即天思兼命、又天八、傳齊元神道、天太玉命、少彦名命等の親なり。
大已貴命といつば即三輪明神此國を造り成し給ふ、日本の主神なり、彦
波斂武尊といつば地神第五の神にて神武天皇の御父なり、然則其廣大
の恩徳言の及ぶ所にあらず、神明の託宣天子勅定高祖の誓言符節を合
せたるが如し、誰か疑を此に懐かんや、本紀に住吉三所といひ、著聞に四

所といふは、傳へきく其第四殿は即ち高祖にてまします故に、常に精進
供を奉るとかや、當山即都率天彌勒の淨土觀音院なりと、藏王權現天滿
宮へ告げ玉へしを以て見れば、此に鎮座し玉ふは、ことに深き理あるを
や、あゝ忝なきかな。

寶篋印塔 長廊の西にあり。

藏王堂 貳間半四方 鐘樓の下廿五六間下に有り、廻廊の曲目の隅な
り、三體の藏王は即三世の利益を表す、釋迦如來千手觀音彌勒菩薩の垂
迹なりとぞ、此處は縁起にはゆる雲梯とて三藏王毎日金峯山より金
梯を渡り大悲者へ詣で來り玉ふ處なり、故にこゝに此尊を安ずるなり。

(明治十五年山門及び第一第二の廻廊焼失し三年の後復舊したり。此
藏王堂より上は、徳川三代將軍の建立せし儘にして、近く特別保護建
築に編入せらるべきものなり。(編者補記)

貫之梅井雲井坊 藏王堂の側に有り、此梅は則古今集にはゆる紀

寶篋印塔 藏王堂 貫之梅

貫之の

人はいざ心も知らずふるさとは

花ぞむかしの香に匂ひける

とよみける梅の子幹孫條今に朽せず傳ふるごぞ。按ずるに土佐日記抄に紀貫之は、はつせの觀音の申し子にて童の時は、はつせにて生長ける其師の坊をば雲井坊といひけるといへり。此雲井坊いつの頃よりか廢されて、其名のみ残りて侍りけるを當山中興の後學寮を作りて雲井坊となづけたり。

今の雲井坊は尾州天王坊現住宏道法印此端寮におはせし頃尾陽侯某君先妣泉光院殿の追賁の爲に、黄金百兩を贈り給へけるを、法印自有とせず是を永く此寮に附置き供料とし雲井坊と名づけんと、化主信怒僧正へ啓す僧正是を感歎し、即允許せられ、それより雲井坊と稱すむかしの雲井坊は今の嘯月寮の處に有りとなん。

金葉和歌集春部大江匡房の歌に

はつせ山雲井に花の咲ぬれば

天の川

波たつかとぞ見る

この歌に依りて是より登る坂を雲井坂といひ、又寺の名とせしか。

(編者補記)

貫之の伯父は佛門に入りて淨眞と號し、雪井坊に住す。貫之幼少の頃淨眞に就いて教を受け、長じて朝廷に奉仕す。後再び此寺に來遊せし時、淨眞嘗て貫之の植え置きし梅花を手折りて示す。乃ち人はいざ心も知らずの一首を詠む。直ちに淨眞之に返歌していはく、
花だにも同じ色香に咲くものを
植えけん人の心しらなん(貫之家集)

その頃ある人雲井坊の中興しけるを慶びて

はつせ山花ぞむかしの跡したふ

人の心の香こそえならね

石橋 激盟石 陀羅尼壇

石橋 藏王堂より下廿二三間に有り、世俗無明の橋といふ。あるがいはく高野になぞらへて御廟の橋といふべきを誤りて無明の橋といふ。あるひはいふ誤にはあらず、無明深重なる者は渡ること能はざるが故に、無明の橋といふ。實にむかしより此迄來りて是より登り得ざる者年ごとに幾人となきあり、あるひは藏王堂より登り得ざる者あり、あるひは住吉八幡の御前あたりまで登りて空しく歸る有り。又は大悲閣に登りても満月の尊容を拜むこと能はざる者有り、予も幾度か是を見侍りき、障りなく登り得て慈眼視衆生の御顔を拜せんものは、尤も悦ぶべき事にこそ。

漱盟石 無明橋の傍にあり。

寶篋印陀羅尼壇 勢陽射和富山氏建つ。

三部權現 九社明神 春日大明神

辯才天女 橘宮神 拜殿堂 横五間半

本洞の端寮供僧にて毎日密呪を誦じ、蕪藥を奠る。

密嚴尊者三十二歳の御時靈場を根來山に相て、伽藍を創めんとす。先一祠を岩手の庄に營で日本國中大小神祇壹千餘座を勸請して鎮守とし、傍に僧坊を構ひて神宮寺と稱す。是根來寺の權輿なり。三十七歳の御時高野山に於て大傳法院並密嚴院を造畢て、三部權現、九社明神、春日神等勸請して鎮守とし玉へり。

三部權現者、中央佛部聖無動尊、本部十天、護國利民天龍八部諸護法天等、左金剛部丹生高野兩大明神爲上者、地主山王兩所權現、十二王子百廿伴、右蓮花部天照皇太神、八幡大菩薩、賀茂大明神及日本國中大小神祇一千餘社也。

九社明神者、中御船三所大明神、金折六所大明神、金峰藏王權現、左丹生高野兩大明神、伊太祈會大明神、右熊野三所大權現、白山妙理大權現、牛頭天王八王子也。

三部權現 辯才天女 九社明神 春日明神

春日大明神を勸請し玉ふ縁由は尊者童年の時南都にて法相三論等を學び玉ひし頃汝が法を擁護せんと誓ひ玉へし故なり勸請の日明神了髻童子の形を現して來臨し鎮座し玉ふとぞ。春日五社也第一殿本殿也今來臨し玉ふ當に知るべし第四殿なるこそを。第四又九社明神の内白山權現を勸請し玉ふことは尊者前に岩手庄にて一祠を立て日本國大小神祇を勸請し玉ひし時一人峩冠偉服着玉へる神忽然として現じて曰我常に上人の善願を隨喜して影の如くに隨て衛護す只恨むらくは招請に漏れたることをと尊者驚いて曰是何れの神ぞやと。曰我は白山妙理權現十一面の垂迹なりと言ひ訖て隠れ玉へり故に今九社の内に殊に此神を勸請し玉ふとぞ。已上結集取意

尊者滅後百四拾餘年を経て正應元戊子年賴瑜僧正傳法密嚴の二基及び諸堂神社等を根來なる一乘院に移す。自後貳百八拾餘歳を経て天

正十三乙卯年春根山灰爐となる中一年を隔て、天正十五年專譽僧正豊山の請に應じて根山の法水を長谷の流に添え玉ふといへども鎮守を勸請するに違あらず四十餘年を経て寛永六年七月廿五日小池坊第四世秀算僧正三部權現を勸請し又四十餘年過ぎて寛文十二壬子秋七月一日第五世賴意僧正九社明神を勸請し玉へり。三部九社當山へ勸請今記する所は三部の社の棟札並に九社明神神体の裏書に依る。

春日明神並辯才天勸請の事 記文なしといへども思ふに右同時の勸請なるべし。春日明神勸請の所以は尊者野山に勸請し玉ふ因縁分明なれば當山へも從つて勸請すべき事勿論なり。辯才天女も元尊者の勸請なりといふ説あれども慥なる毫記なく且其所以しれざれば信用し難し。愚按するに辯才天は根嶺に在て既に妙音院小池坊の本尊なり。妙音院と號するは職として此由なり。其天女の像今現に當山小池坊の寶

庫にあり然ば則別に一社を建て是を祭典すべき道理必然なり。こゝに之を勸請し奉る。あに此故にあらざらんや。

愚謹で按ずるに春日大明神は當山觀音の脇侍なり加之第四御殿は即觀自在尊にて曾て密嚴尊者に對して汝が法を守らん誓約し玉ひ白山権現は十一面の和光にて當山にも鎮座し玉ひ辯才天女亦十一面尊の垂化にて根山妙音院小池坊の本尊たり宜なる哉專譽僧正根山妙音院に住して尊者の教風を豊山に扇揚し妙音院の嘉號を長谷に移し來ること誰か本地垂迹等の佛神御心を合せ引入し給ふにあらすといはんや仰ぐべし尊むべし妙音輪下の學徒忽にすべからざるは此鎮守なり。

橘宮神

金蓮院本は橘坊といふて今の月窟花洞の校舎の處にあり慶長の末橘坊の住僧觀海無實の醜名を得たる事を憤り院宇を燒きて自ら焚死し魔道に入りて祟をなすこと甚し寺を舊處に營んで佛眼院

と名づく猶妖災有て住する者なし寺宇まさに廢せんとす此に於て承應二年良譽和尚彼幽魂を崇めて橘宮神と號し毎夕丑時心經を誦じながら梵鐘を撞き法味をすゝめん約し年々霜月十七日を以て祭祠の日と定め地をかへ寺を造て金蓮院と名を改め任識房頼意を住せしむ一夕神來り語て曰我心を改め道に入らんことを欲すれ共類ひにひかれて苦に責められ自由なることを得ず願くば我爲に日日理趣般若を轉じて以て救濟し玉へ然則我永當山の人法を守るべしといひ畢て去る時に満山皆鬼類なるを見る意隨て慇懃に冥福を資くそれより障難あることなき今に一日も其法施を怠ることあらば必ず災ありといふ英岳僧正天資聰明にして始涉の時早く書を講ず一夕友生を訪ひ我新解の義を談す其友是を感歎すること甚し其歸るさ高慢の心を起して此神前を過る時忽ち畏るべき形の者出現し捕て投られ宛轉して悶絶す偶慈心の門より出る者有り是を見て走り寄り介抱して寮舎に歸り

須臾にして蘇生し、自ら懺悔しけるごぞ。傳通其外此神の祟りを語るも
の古來より多し、深く秘していはず唯黙して敬するのみ。

道明上人石塔

上人は六人部氏の人、曾て天武天皇の勅を受けて
飛鳥の弘福寺を建立し、又勅に依て本長谷寺並三重の塔等を當山の西
岡白河に建つ、彼本長谷寺等後、是即德道上人の師範なり、行狀具に知
れず、といへ共其實德推してゐるべし。

附記

六坊清淨院の下に在りて、九重の塔なり、千有餘年の古墳にして考古
學上多大の参考に資すべきものなり。

仁王門

當山の大門は舊は杉坂の大路とて、二本の杉のあたりより
今の閑水漱石の寮の間に有りけるごなん、與喜の天神當山へ御影向の
時杉坂の大路を踏み玉はず、道明上人石塔の前なる徑より直に觀音堂
へ登らせ玉ひけるより、人多く其跡を慕ふて此徑を登りければ、人皇六

十六代一條院勅願にて河内守藤原景齊に詔して天神影向の御跡を追
て、二王堂を今の處に移させ玉へり。額は人王百六代後陽成院の御宸毫
裏に天正十六年九月晦日といふ記文あり、大和國守大納言秀長公造營
の時なり。二金剛の像は攝州城主九鬼長州公の先祖某公當山の靈驗を
蒙て造立し玉ふご、今に彼城主より年々二月廿六日代參を遣はさる。
門の左右に二金剛を安ずるは、寶積經等の説に依て現在賢劫の千佛
に二弟有り、法意太子は千兄成佛の時金剛力士と作て教法を守らんと
誓ひ、法念太子は勸請して法輪を轉せしめんといふ、法念は即梵天とな
り、法意は今の二王と現はれ玉ふて、滅後の遺法を守り玉ふなり。
又密教の意をいはゞ高祖の秘藏記曰金剛智也、此智摧二滅煩惱、譬如三
金剛強力摧破諸物、其開二發心實相門、以三智惠一故、先門立二金剛、
内置二佛身、佛身者本來自性理也、斯理以三智所照、得三顯現、故いへ
り。又此二王開口閉口の差別は、彼抄に淺略深祕の二義を明す、先淺略を

いはゞ開口は是實相の門を開いて自性の理に通ずる表示、閉口は是惡趣の門を閉ぢて三業の過を遮ぎる表相なり。口は是れ面の門なるが故に口に寄せて門の開閉を顯すなり。次に深祕の意は開口の像は阿字を唱ふ、阿は胎藏界の東方、因曼荼羅を表するが故に此像東に居す。閉口の像は鑲字を稱し、鑲は金剛界西方果曼荼羅を顯す故に此像西に居す。自宗の意は最初を以て却て至極とするが故に、門前の二像直に兩部の源底を示すといへり。眞言密教の甚深殊勝なることは是等を以て思ひ見るべし。況や當山即秘密莊嚴の地、金胎兩部大日の淨土なること本緣起の文明なれば、門前の二王直に兩部の源底を示すといふも過言にはあらず。凡そ此山に入らん者先づ此意を得て深信を興じ、二王を拜して後大悲閣に登るべし。むべなる哉。守護の童子一度び此山に入る者をば生生に加護して終に淨土に送ると、行基菩薩に告げ玉ひしこと、頼母敷もまた難有ことならずや。かくいふにつけつゝ、我心の淺ましく愚なること

思ひしられ侍る。いかに宿業の重にや身は淨境に住ながら住み馴れたるにまかせ、かしこき事ども思はず。妄想穢念のみ心の中にきそふて、月日をあたにはつせ川、清き流を汲むかひもなく、たま／＼高根によちて月の顔を拜むとも、いつもの事となげやりに、うはの空なるあさましさ、年若き順禮のいく度も參る心はと打擧げ、山もちかひも深き谷川と心を澄し、あな有り難やと地にひれ伏し、餘念なげなる様を見ては、實に一度此山にすら入らば、生生朽せぬ縁や結ぶらんと羨敷、我信心の薄きをはづかしく思ひ、あるは遠方よりと見ゆる者の大悲者をばぬかづく。眞似のみして、かなたこなた見廻しいざとて急ぎ歸るを見れば、また我心の如く寶の山に登り得て、むなく下る者も有るなれど、思はれ淺ましくこそ思ひ侍るなれ。希は佛の此懺悔の心をあはれと御覽して、我にも人にも信の心を起さしめ玉へかし。南無大慈大悲觀世音菩薩。

長廊 二王門より大悲閣に至るまで、凡そ壹百九間、此權輿を尋ぬれ

ば人王六十八代、後一條院御宇南都春日社司中臣信清といふ者の建立、
彼が嫡男信近足に蛇眼疔といふて七日在て必ず死する瘡病を出し、既
に四日になりければ、苦痛彌増し醫術もかなはず佛神も助け玉はず、父
信清悲みの餘に春日社に参りて、氏子一人を千金にもかへ玉はず、こ
そ承れ、いかに御氏子をば一人失はせ玉ふぞと歎き申しければ、傍な
る巫に神明託して、我氏子を思ふこと汝が父として子を思ふにも超た
り然れども定業は力なき事なり、但し汝是を以て長谷に参り歎き申し
て見よとて、榊の枝の四寸ばかりなるに葉の三つ付たるを口中より吐
出しけり、嚴重の験頼もしく覺えて是を持て當寺に参り、彼の榊を佛前
に捧て祈申しける程に、二日といふ長元二年九月五日觀音堂の東の大
戸より鳥一羽飛入て、彼の榊を加へ、西の大戸より飛出で行方知れず去
りぬ、其日病者六日目にて醫師も叶はずとて辭し去り、父は長谷に参て
未だ歸らず、たゞ母と妻と其外七八人死期を待て守り居たりけり、病者

内は暗くして、心地もここにはれやらぬ由いひければ、庇の間に身出し
て足をば籐より外に踏出させけるに、忽ち南方より鳥一羽飛び來て彼
足の痛處を啄き五寸計の蛇を腫たる中より引き出し、いまだ動けるを
呀へて飛び去ぬ、病者半時ばかり絶え入て蘇生し、拭ひ取たる如くに平
癒しけり、父信清歎の餘りに長曆三年卯月より始て、二王堂より大悲閣
まで九十九間の登廊を立て、百僧を屈して供養し、彼報賽に擬しけり、觀
音も納受ましましけるにや、信近先途思ふ如く遂げて正權頭を極め榮
華身に餘りけるとぞ、今の大仁王門殿御造は觀音堂同

(編者補記)

徳川三代將軍時代に仁王門及び長廊下全部火災に罹り、家光公之を
再建し、明治十五年再び火難に遭ひ、長廊下は下段と中段と焼失し、藏
王堂より上は僅かに難を遁がれたるは不幸中の幸、仁王門は三年の
後再建し、長廊の二段は明治二十七年に舊狀に復す。

長廊 小池坊

小池坊 長谷寺中興の寺號即 舊根嶺に於て小池坊智積院兩能化と稱し共に學頭職の寺本名は妙音院といふ辯財天を本尊とす。其天女像今小池坊寶前に小池有るを以て呼んで小池坊といへり。專譽僧正當山へ移住し玉ふ始は長谷寺と稱して今の大師堂の處に有り是を當山の寺務とし公の坊と稱す。譽僧正根山小池の法流を爰に傳ひ來るが故に、また小池坊と號す。中興第八世快壽僧正院宇狹隘にして前は本堂に近く後は屏山に接するを歎き山林を遍覽して勝地を尋ね玉ふ時南麓に至り白鶴雌雄空中に舞ひ遊ぶを見て其靈地なることを知り院區を此に移さんことを徳川家綱公に願ふ家綱是を許容し寺境を廣め且つ黄金七百兩を賜ふ依之不日に荆蕪を刈夷らげ殿丈寶庫等を造り更に講堂を建てむとて良材など多く集め給へ共營構いまだ就す歸寂し玉へり第九世賴意僧正寛文七丁末年家綱公より又黄金千兩の恩賜を蒙て堅十五間横十間に建立し玉ひ佛前の根上に松鶴を彫らせ玉ふは彼白

鶴空中に舞ひ遊び嘉瑞を示すとなり今の講堂是なり本尊彌陀如來は往古よりの古佛八祖及興教大師の像は良譽僧正等身の量に刻ましめ玉ふとぞ。

護摩堂 桂昌院一位尼公御願として元祿九丙子年英岳僧正造營す、

本尊は興教大師鳥羽上皇の御惱を祈り玉ふとき一刀三禮にて彫刻し玉ふ尊像なり此像に就て更に秘旨ありといふ又大聖不動明王といへる額傍に大傳法院と記せる額は仁和寺に納めありしを小池坊は傳法院の正統なりとて當寺へ下されしといふ。

小池坊表門 牧野備後守成貞施主にて元祿年中英岳僧正建立す。

稻荷社 庖厨の脇に數十丈の岩あり龜岩と名づく上に老松四五株あり樹下に稻荷明神を勸請して小池坊鎮守とす。按ずるに稻荷明神は地御食持命即天照大神の分魂にて十一面の應現なるのみならず高祖大師と密教守護の御契約まじませば祠りて鎮守とするならん。

(編者補記)

此大講堂外拾數棟の建築は結構壯麗を極め、性相義學の淵藪として學徒雲集し、高德此峰より湧き其名宇内に冠たりしなり、天なる哉命なる哉明治四十四年一月十二日烏有に歸せり、然れども熱烈なる信仰を有する末寺講社特信者の賛同に依り五十四萬圓の豫算を以て工事に着し、今や良好なる成績を以て大講堂の一棟は既に上棟式終り、殘餘は着々其歩を進捗し居れば輪奐の美を極むる亦近きにあるべし。寔に隆んなりと謂ふべきなり。

新義眞言統括之印章

徳川家康公中興專譽僧正へ眞言新義を統ぶ

るの印章を下し玉ひしより以來當代迄(信怒僧正迄)廿五代徳川の命を蒙て轉住し、又幕府の執奏に依て權僧正に任じ參内して親り龍顔を拜し奉る、東都に下り金城に登り、酉の間に於て台顔に謁し拜謝を述べて退出し、其後御暇御時服を下し給はり、諸老臣より傳馬の印章を給ふて日光山に登り、東照神を拜禮せしめ、國主以上の格なりとかや、翌年又執

奏によりて正僧正に轉任し參内す、其後是を以て常格とす、就中毎年正月參内して龍顔を拜し、新正の賀を述べ奉り、東都へは代僧を以て歲末新正兩度の御祈禱札を献じて賀慶を上申す、代僧亦帝鑑の間に於て台顔を拜し、檜木の間に御暇御時服を賜ふ、智積院も同格なり。
當山第十四世英岳及び十五世亮貞等を大僧正に任じ玉へり、寺領は大和大納言秀長公三百石を寄附し給へければ、東照神君も是に準じ境内山林の外三百石を充て給へり、常憲院殿の御代に至て二百石を増加し給ひ合せて五百石なり。

諸堂行人法師之事

是は道心者の勸進非じりにて皆承仕人も各諸

堂の軒下に指掛をいたし居住せり、性盛法印の代に行人等結縁の爲四度別行を勤て然るべしとて切紙を遣はさる、銘々承仕方にて學侶には入らず行人法師なり、面々諸堂諸方檀那を持ち、或は田畑を持って堂のほごりにも作物を營み、又は洗濯物抔取散し、女人の出入抔折節有りて見

表門 稻荷社 新義眞言統括之印章 諸堂行人法師之事

苦るしきことごもあり、又第一火の用心あければ、本堂御造營の折に尊慶僧正の代に、仁王門下十三石餘の町屋浦地を拜領し、町家を引退け、其跡を行人に相渡し、面々相應の庵等を建て、之に住む。卓玄僧正の代、大師堂再興之砌、承仕仕るべき旨仰せ付られしを以て、行人共違亂を申し立て、銘々住む屋敷の儀は公儀より拜領なし、秀算僧正の代、切紙下され、別行等勤めよなご、申したて、南都奉行所へ訴訟差出せし故、此方よりも古來よりの子細を申述べ、行人共非儀を申し立て、御奉行大岡美濃守殿聞届られ、行人の内一切、經弟子長竟、始め大師堂地藏庵、此三人は大和一ヶ國追放、其外の者は隠居を申付、又は閉門等の仕置、小池坊より申し付くべき旨、取計になりたり。諸伽藍承仕の爲に、各各へ預け置なり、但し此方より再興己後は、小池坊より本堂承仕人に、申付、香燈の供養勤む。次に天神祭禮の供物、莊嚴は來淨來言は、頭坊へ取寄せ、諸事之を勤めしむるなり。但し、大幣は寺中一薦之役、快壽僧正の代迄は、西藏院秀貞法

印之を勤められ、其己後は、寺中移り替り、其作法相傳も、施主となる故、是も其後は、右等の者之を調ふ次に、開帳盛物は、尊慶僧正の代迄、守家の年預坊にて調ふるなり。然れども其後は、學侶の作業に相應せずとて、行人共に申付調ふるなり。供物料として、一開帳に盛物六盒、代銀十貳枚之を遣はす。年中開帳の度、數に依り、歳の暮年預方より之を遣す。次に行人共は、絹衣並色袈裟、堅く古來より停止す。右行人居住の家は、古來より院號坊號とてもなく、唯其預る處の堂の名を呼び來りしなり。されども自分餘勢にて、諸檀那の札の上書、杯は堂の名を坊號となし、不動堂坊炎魔坊、杯と書遣はすよし、相聞きたり。學侶方より呼びに遣す時は、古來より通じて、不動堂炎魔堂、大黒所、杯と呼ぶ。己後も、學侶と行人との座席の階級等之を亂すべからず。行人共、觀音の戸帳の開閉、或は修正會、修二會の節、又祭禮の砌、承仕等種種、役義を勤め來るなり。又臨時の灌頂、曼茶羅供等の大法會、執行の節は、承仕役等を申付け、相違なく勤めしむるなり。

諸堂行人之事 來淨來言被官之事

長谷寺往古より観音來淨坊來言坊四十八人之被官之事 此來承來
言の兩家は往古より因縁これ有り法體にて半衣着し節力いたす四十
八人の者右兩人の下役なり是も被官とて法體にて晴禮莊重なる儀式
の時は白布の社杯を着せり是も尤も本堂の承仕交るがはる之を勤め
香花燈明は勿論鐘を撞き修正會修二會の太鼓打つ事まで四十八人の
内にて之を勤む依て觀音の散錢の内配分をも之を取り來承來言の指
令を受け在所所に檀那を持ち渡世とするなり然るに新義の山と爲
りて已來各堂毎に承仕人を抱へ之を勤めしむ依て散錢の分配も遣は
さず檀那も次第に少くなりし故料作を專一にいたし或は内商買杯に
て渡世するなり故に法體にては渡世の障にもなればとて小池坊へ訴
へ出で皆有髪となる然れども來承來言は古來の印の爲めに相守り法
體にて米三石五斗宛之を遣す然るに其時の來承は福神なる故に三石
五斗位も取るも取らざるも苦からず杯申し一度び是を遣さざりしも

後に詫ぶるに依り三石宛を遣す來言は元の如く三石五斗を遣す觀音
の散錢の内往古より印壹貫文宛配分せしに來言は惡錢多しとて投げ
返すそれより已來散錢聊も遣さず其比より來承は醫師來言は山内の
坊宿申付くなり素より觀音天神の社法會神事等俗役人頭にて諸事之
を勤むるなり仁王門にて神社の輿四十八の盛物は來承來言始め下役
人四十八人の供物なり有髪となりたる後山内にて之を供すと聞き及
ぶ兩人共境内除地に居住す。

安養院 藏王堂より東方三十間ばかりに在り此寺草創のむかしを
尋ぬれば人王七十代 後冷泉院御宇行仁上人と申す貴き聖おはしき
兼隆中納言の末子にて惠心院僧都の弟子なりけり生年廿一歳の時永
承七年の秋當寺に詣で堅固の菩提心を授け解脱の門に入らしめ給へ
と懇に祈請せられ一七日を期し籠られけるが満する夜の夢に御帳の
内より香染の衣着たまへる僧出で曰く此處は功德成就の砌安養有

縁の地なり、汝永く此山に住して我本師彌陀佛を念せば決定して西方に往生すべしと告させ玉へければ、夢覺めて喜躍に絶ず直に當寺に住し、手づから花を探り水を汲で観音に奉事し、彌陀を稱念し、其中當寺の靈驗、建立の次第、杯本縁起に繼録して奏聞せられけるに、白河法皇勅信淺からず三間四面の御堂を作り、一の院家を建て上人を住せしめ、其期する處なればとて安養院と名づけさせ玉へける。白河鳥羽二代の御幸にも此院家を御所とせられける。中宮御惱の時詔して加持を請はれけるにも參らず、一期當寺を出でずして念佛功成り八十九歳の時保元元年九月十五日辰の時西に向て合掌し、観音のお告のごとく安養に往生を遂げられける。時に紫雲軒に下り異香室に薰じて見聞の人人まで皆隨喜の涙を流し善縁を結びける。其後年ふりて荒廢に及びける頃七十八代二條院御宇伊勢國飯高といふ所に一人の貧女有り、美目心操優なる者なりけり、七歳にて母に離れ十四歳にて父に別れけるが父

の教に順ひ、はるかに當山に信を起し祈念しけり。廿二歳の時國の司初瀬詣と聞へければ、其下郎に申入れて當寺に參り家に傳へて祕藏しける鏡に

あはれとも佛見たまへますかぐみうきおもかけの底にうつるを、となんいへる歌を書付て御寶前に納めけり寔に観音のおはからひにや國司此歌を見て優優敷心有る者とや思はれけん直に召し具して下向し上童になし給へける。其年の冬國司の北の方過させければ、其代に此上童を引上げて寵愛せられ富貴身に餘りぬ是當寺の御方便なりとて重て登山し三七日籠居て父母の菩提の爲又自身冥加の爲とて安養院の荒たるを修造し、三町の免田を寄て法會杯懇懃に修せられけり。其夜の夢に死したる二親來り、汝が追福に依て安養に往生を遂げたるぞと告て紫雲にのり西方に飛び去りけり。我身の榮華のみならず二親迄を助け、ること観音の御利益身に餘り嬉しく思ひ下向しぬ。男子三人女

子二人迄産みて彌増し榮えけるごなん古其後いつしか廢れて其跡さへも定かならずなり侍りける今の安養院は化主圭賢僧正悲母の菩提の爲供料若干を附して紅葉の端寮を安養院と名づけ高祖御作の金銅の彌陀如來を本尊とし玉へり。

二本杉 雲井坊の脇より下ること數十間杉の寮の下にあり古はそ道筋杉坂の大路とて大門なりけりごぞ此處神代の時天照太神降臨の處なりといふ即古今集に

はつせ川古河のべに二本ある杉年をへて

又も相見んふた本ある杉

といへる此杉なり。

新古今

有

家

涼しさは秋や歸りて初瀬川古河のべの杉の下かけ

後撰

寂

蓮

契きなまた忘れずよ初瀬川古河野邊の二本の杉

新後撰

俊

成

初瀬川又見んとこそたのめしが思ふもつらし二本の杉

續後拾遺

中前太政大臣

初瀬川又相見んとたのめてこるこはいつぞ二本の杉

拾玉

慈

鎮

杉の庵に夢結び行まごふりて初瀬の山にをしか島なり

此外二本の杉をよめる歌多し。

長勝寺 二本の杉の側に有り人王五十九代宇多天皇菅相丞の勘出し奏聞し玉へる當寺建立の縁起並に祕記の二卷を御覽ありて叡信等

閑ならず朝廷國家の祈禱佛事當寺にて修し給へけり同九年七月五日天皇御位を遁れ日祚を春宮に譲らんと定め玉ひけるに其日の己の刻のはじめより春宮俄に御物の氣惱みましまして殆ど危く見へさせ玉

長勝寺

ひけり。殊に讓位の日のことなれば天皇の御歎きなめならず遙に當
寺に向て香花を供へ觀音の冥助を求めさせられ若大悲の威徳に依て
春宮つゝがなく踐祚するを得ば速に長谷寺に於て八大觀音の妙相を
瑩き三十三身の御姿を顯すべしと御掌を合て祈念し玉へけるに叡
信の感應速疾にして申時ばかりに天氣殊に晴て一點の雲もなかりし
に春宮の御殿の上に白雲一むらたなびき其中にて形は見へざれ共十
一面の大呪を四五人にて稱へ祈願する聲有り眼前の奇瑞に貴賤耳目
を驚かす所に御惱忽ち平愈し玉ひける。醍醐天皇と申し奉る是なり依之宇多上
りて春宮天位に即せ玉ひける。醍醐天皇と申し奉る是なり依之宇多上
皇嚴重の靈驗を貴み昌泰元年二月二日當寺に臨幸し玉ひ同六日吉日
とて八大觀音並に三十三身の像を作り始め玉ふて二本の杉の邊りに
地をトて伴の尊像を安置の處と定め玉へけり長勝寺是なり同五日還
御有り翌年十月十四日太上天皇御出家御名を金剛覺と稱し奉る仁和

寺始祖寛平法皇と申し奉り即ち真言一流の祖師となり玉ふ此法皇に
てましますなり同三年二月二十二日重て御臨幸有りて廿四日に八大
觀音並に三十三身密儀を以て開眼し玉ふ大阿闍梨權少僧都益信廣澤
師長勝寺結界は權律師聖寶の祖師同廿六日舞樂を奏し御供養導師は
天台座主内供奉長意なり同廿七日法皇還御なし玉へける其後代代此
伽藍を崇重し玉ふといへども世下り料所失して佛殿僧坊荒廢し數體
の尊像破壊に及びける時人王七十四代鳥羽院御后美福門院御懷妊の
時博士是をトふて姫宮なりと申しければ女院これを歎かせ給ふて保
延四年十一月當寺に御參詣有りて變成男子の御利生を一すぢに祈ら
せ玉ひける其夜の御夢に長勝寺阿闍梨成海來て申しけるは努々御歎
き有るべからず御懷胎の姫宮をば薩埵大悲の弘誓にたがはず英明の
男子に變成せしめ奉るべしといふと見て覺め玉ひ頼もしく思召て一
夜の御籠にて還らせ玉ひけるが同五年五月十八日若宮御誕生あり後

に帝位に即かせ玉ふて近衛院と申し奉るは此若宮の御事なり。女院速疾の御利益を感じ悦び玉ひて當寺に於て種種の御興隆有り。即ち長勝寺を修營し瀧藏の拜殿を経營し玉ひける。靈驗其後幾年ばかり相續しけるにや遂に廢絶して數多の佛像も所所に散在し玉ひける。川上の谷に長勝屋敷といへる有り。其所に小庵あり。是昔の長勝寺の舊墟なりといひ傳ひたり。今の長勝寺は信有僧正の御時彼の寺號を取て以成の寮の端に名づけたるにて昔の處にはあらずといふ。今按するに既に二本の杉の邊に地を卜すといふときは川上の谷には非ずして今の長勝寺是むかしの跡なること明かなり。二本の杉は昔より今の所なり。川上にはあらず。杉坂の大路といふを以てしるべし。想ふに昔年長勝寺廢して後川上に小庵を結びて長勝寺の名をよびけるに年久しく經ぬれば直に昔の跡と思ふて誤りを傳ふるなるべし。其三十三身の像は今山下の一切經坊に移して安置す。八大觀音は何處に有とも知れず。中尊の彌陀

如來は玉葛庵に安置しけるに、四十年餘り前にや與喜山崩れかゝりて、彼の庵壓潰され中より火興て庵中の物一も残らず皆焦土となる。里人等本尊の定めて灰とならせ玉ふらんとて火消て後漸土を運び灰を掻き除け見れば本尊も總身少し焦れさせ玉ひごも御面より始て御手足まで聊も損じ玉はず。寒灰の中に立せ玉ひければ諸人奇異の涙を流し感歎せずといふものなし。尋で又小庵を結び安奉しけるを今の長勝寺再興の時乞請て後光臺座など營みて本尊とすと其再興の時の毫記に見へたり。御頭より御足まで一本木にて作り奉れる像にて漆など用ゐざる世に稀なる靈像なり。昔の八大觀音の中尊にてましますといへば古記にいへる如くば益信聖寶二大師の御開光なれば燼灰の中に燒残りて御座もむべなり。あゝ幾度の興廢を経給ふてか今また長勝寺の古跡に歸りさせ玉ひ本尊とならせ玉ふこと彌陀如來威験の力なりや寛平法皇御願の力なりや二大師加持の力なりや尤有り難き事なり。

(信恕僧正加筆)

此卷最も宜しく出来たり

詠長谷寺八景

覺山

岌嶮層巒圍八紘。翔廓飛閣參彫菱。日低鐘韻震沙界。
 境靜法燈揭化城。雪簇粧坂疑路沒。光穿彩堞忘陰傾。
 宮梅惹得羅浮夢。紀氏曾停故國情。山麓櫻花經雨濕。
 砌邊蛺蝶逐風輕。殘春駐馬騷人嗟。盛夏切聞蜀鳥聲。
 地拆古河咽石湧。天昏腐火點波明。捲雲岡壑翠嵐起。
 裏露楓林紅錦清。葱鬱岩嶠衝漢水。嬋娟曉月掛逢瀛。
 梵宮所囑真堪賞。多景永傳不朽名。

空之卷

年中行事

正月朔日 より十四日迄修正會十四日晚結願御印文出之
 正月十五日 大般若瑠璃講
 二月一日 より七日迄修二會
 三月二日 より十二日迄千部會
 三月廿一日 御影供二箇法要
 四月八日 灌佛會
 六月十五日 高祖大師誕生會
 六月十六日 蓮花會

年中行事 觀音開帳

年中行事……觀音開帳……修正會……瑠璃講……東照權現法樂……與喜社月
 次連歌……御影供……灌佛會……仁王會……聖憲尊師追福……高祖誕生會……
 蓮花會……施餓鬼……陀羅尼會……佛名會……節分會……

六月十八日 會式

七月十五日 施餓鬼

九月二十日 傳法會暨義

十二月九日 より三日間佛名會

觀音開帳之事並年中法會 當山大悲十一面尊は當初 聖武天皇夢
 御告を蒙り戸帳を懸奉りしより深く秘して王公の外開帳し奉ること
 なかりしと云ふや天正年中當國郡山城主大納言美濃守豊臣秀長公當山
 御信仰深く御座して大悲閣を始め登廊樓門杯新に造營し玉ひける頃
 自料ての玉はく諸佛は慈悲を以て利生を施し玉ひ衆生の信心を以て
 感應に預る若信を發さしめん爲ならば開帳し奉ることも大悲さつた何
 ぞ喜び玉はざらんや然れども一閻浮提の靈像容易に開帳し奉らんも
 恐れ多し今より後若信心篤くして願ふ者あらば黄金一枚を寶前に捧

げさせ一七日の間兩宮ともに開帳し奉りて參詣の輩に勝縁を結ばし
 むべし我先づ是を始めんとて即黄金一枚を奉獻し一七日開帳し給ひ
 其後も數度開帳せられけり其黄金今に傳て寺中年預に在り是を當山
 開帳の初例として開帳し奉る者年年數多あり承應三年化主良譽法印
 簿籍を作り之を録し始てより今茲に寶曆十庚辰八月迄凡そ二千餘ケ
 度なり開帳期限の中又開帳願ふものあれば先づ假に閉帳し開帳の法
 事を修し開帳し奉り前後通計して各七日の數に合せて開帳するなり
 開帳の時には新に供物盛物を辨備し化主僧正及び六坊衆出席にて嚴
 重の法會有り其修法の振鈴の後開帳す禮堂の正面に薄疊を敷き施主
 を置て拜せしむ開帳終て御札並に兩宮の三尊を頂かしむ開帳の時は
 方丈六坊より各寺代一人づゝ出で法事を勤め後鈴の時御戸帳を揚げ
 奉る開閉共に尤殊勝なる儀式なり毎年定開帳の日左に記す參詣の輩
 をして其時節を知り開帳にあはしめんが爲なり